
とある私の物語～ネギまに転生ですか？～

lapaid

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある私の物語〜ネギまに転生ですか？〜

【Nコード】

N5019Y

【作者名】

lapaid

【あらすじ】

ある日私は真っ白い空間にいました。そこには自称神と名乗る人物が。

話を聞けば転生させてくれるそうです。何でも神様のミスだとか。所謂テンプレってやつですかね？

希望を聞いてもらって、向かう世界は「魔法先生ネギま！」だそうです。まあ、魔法やらなんやらで危険ではありますが、楽しめそうではありますね。

目が覚めると…えっ？なにこの設定？いや、悪いとは言いませんけど…ハア…

初投稿です。アンチ、チート、原作改編、自己流解釈など結構やかしてますので気を付けて下さい。

プロローグ（前書き）

初投稿です。

拙い文章ですがお楽しみ頂ければ…

プロローグ

「知らない天井ですね。」

取り敢えずいつてみたかったこの台詞。

周りを見回しますが真っ白です。何もありません。距離感がおかしかなりそうです。

「というか、何故こんなところにいるのでしょうか？」

それに、もう一人が居ないのです。

「すまんのう：ここは何処でも無い場所じゃ。」

いきなり「いかにも」な方が現れました。

驚きましたよ。

「その通り。儂は神じゃ。」

「GODの神ですか？なんにせよ説明を頂きたいのですが。」

「ここは本来死ぬべきではない人物の来る場所じゃ。」

「本来死ぬべきではないとは？」

「儂は名前こそ無いが最高神での。部下がミスをして本来寿命でない人がここに来るのじゃ。」

「役所が個人を管理していた書類をシュレッダーにかけて再起不能

「なったって感じですか？」

「そんな感じじゃの。というかお主の言った出来事のままじゃが。」

うわぁ……でもなんか……うわぁ……

「そこは申し訳ない。さて、ここに來た人物は主に三通りの選択肢があるぞい。」

「三通りですか。」

「うむ。」

1つ目はこのまま天国に行くことじゃ。普通の輪廻に交じるということじゃ。

2つ目はここで仕事をする。下級神となって、人の管理をする。もっとも、ワーカホリック位しか選ばんがの。

そして3つ目、二次元の世界に転生することじゃ。」

「では3つ目で。」

「早いのか……まあどれを選ぶも個人の自由じゃからの。いく世界は決まっておるが良いかの？これは決めた後にしか伝えられんのじゃが。」

「ええ。3つ目をお願いします。」

「ふむ……行く世界は『魔法先生ネギま！』じゃ。お主の記憶を見たが、この世界を知っておるようじゃの。それで、じゃ。行くに当たって希望したいことはあるかの？3つまでなら聞くぞい？」

3つかあ…慎重に選ばないとなあ…

「おっと、先に言うておくが、気や魔力は最初は平均より高めじゃ。特訓すればただけ伸びるようになっておるぞ。あとは不老じゃ。20歳からの不老じゃの。」

意外とありがたいサービスがついていた！
とするとまずは…

「東方projectの八雲紫の能力、『境界を操る程度の能力』をもらえますか？」

「ほう…なかなか良いのを選んだのう…それに見合うだけの演算能力もつけよう。」

これはありがたい。

「では…『魔法先生ネギま!』の世界の魔法や気の知識を頂けますか？」

「知識だけだと使用はできんのじゃが、良いかの？」

「それは特訓すればいいんでしょう？」

「その通りじゃ。使用出来る状態からスタートも出来るんじやが、それでも良いかの？」

「ええ。構いません。自分で特訓するのが好きなので。3つ目ですが、原作の大戦に関われるようにしてもらえますか？」

「なるほど…了解じゃ。もう一人はちゃんといえるから安心してよいぞ。」

ここには居ないですけど…

「向こうに着いたらわかるぞい。」

「そうですか。」

心を読まれたのはサラッと流す。

「ではお主を送るからの。ゆっくりと世界を楽しんで来るがよい。」

神の言葉を最後に、私は意識が落ちた。

（麻帆良武道会）

こんにちは。転生した「私」です。
確かに大戦に関われるようにしてもらえますか？と言いましたよ。
言いましたとも。

ですが

「ここが麻帆良か！すごいな！強いやつと戦えるぜ！」

横にいるコイツ、誰だと思えます？

そうですよ。ナギ・スプリングフィールドですよ。

「戦いたいののは分かったから。エントリーしに行きますよ。」

「そうだったな！んでユキ、何処か分かるか？」

「ガイドブック読めばわかるでしょうに…向こうですね。それっぽい人もいますし。」

私の名前はユキ・スプリングフィールド。ナギの双子の姉として生まれました。

ちなみに転生したというのが分かったのは5歳の時、それから『境界を操る程度の能力』が使えるようになりました。

で、私は10歳で魔法学校を卒業、旅に出て行方をくらませようかとしたらナギが中退してついてきました。

あ、卒業後の課題はなかったですよ？あの仕組みは大方大戦後に来たんでしょう。

行方をくらませようかとした理由は単純で、能力を手に入れたのをごまかそうかと思ったんです。どうせしばらくしたらゲートポートに行って魔法世界に行くんでその時にでもやりますが。

ドンッ！

「あ、すみません…」

考え事をしていたのでぶつかってしまいました。見上げると若い青年です。大きな野太刀を背負っています。

「こちらこそすまなかった。考え事をしていましたもので。」

「お！お前強そうだな！武道会に参加するの？」

「ああ、そのつもりさ。君たちはどうするんだい？」

「私たちも参加するつもりです。貴方とは当たりたくないですね。中々の手練れのようなので。」

「はは。そう言ってもらえると嬉しいね。」

「俺は戦ってみたいぜ！お前、名前はなんだ？俺はナギ・スプリングフィールドだ！」

「私はユキ・スプリングフィールドです。」

「俺は青山詠春さ。それじゃ、健闘を祈るよ。」

そのまま軽く礼をして歩いて行きました。

詠春でしたか…まだ近衛では無かったんですね。

そのまま歩いて行き、エントリーしました。ちなみに私が参加すると言ったときの参加者名簿をつけている人の驚き方は凄かったですね。まあ、見た目はただの女の子ですからね。

さて：大会が始まりました。予選はバトロワ形式でした。一言で言わせてもらおうと

「雑魚ばかり」

でした。見た目で人を判断してはいけません、ということをお願い知らせましたよ。

んで、本戦です：が、結論から言います。私とナギ、詠春意外は雑魚でした。

私は『戦いの歌』で身体強化、そのまま肉弾戦に持ち込んで勝ちましたよ。準決勝の相手も軽くないなして、次が決勝戦です。

さて、ナギ対詠春ですね：しっかり見ておきましょうか。

ナギはフットワークをいかして詠春の懐に潜ろうとします。が、詠春は野太刀を振るって追い払い、そのまま神鳴流を決めようとします。あれは：斬空閃でしたか？

あ、ナギが障壁で防ぎました。やっと防御を覚えましたか。

そんなやりとりがしばらく続きましたが、二人とも動きが止まりました。時間が押してるからお互いに威力の高い技で決めるつもりですかね：

台詞が無いですって？結構離れてるから声が聞こえないんですよ。解説はもはや機能してないですし。どういうことか？いや「すごい」だの「派手」だのしかいってないのですよ。

おや？ナギはあんちょこ見てますね。読唇術で：何々？「ヘカトンタキス・カイ・キーリアキス・アストラ・プサトー！」って：なんの事か分からない？日本語にします。「百重千重と重なりて、走れよ稲妻！」ですよ。

ナギは「千の雷」、詠春は「雷光剣」、2つがぶつかって煙が上がります。

ゆっくりと煙が晴れていきます。立っているのは…ナギでしたか。審判が10カウントとって、ナギの決勝進出が決まりました。

ナギが控室に戻ってきました。

「どーだ…勝って…やったぜ…」

息も切れ切れに話してきました。

「お疲れ様です。まあ良いじゃないですか。派手に壊したおかげで決勝は1時間後ですよ。」

「1時間あればなんとかなるぜ…絶対に勝ってやるからな！」

「私も負けるつもりは無いですよ？」

今はゆっくりと過ごしましょう。

「さあいよいよ麻帆良武道会も決勝戦！いままでハイレベルな戦いを見てきましたが、ここで終わるのが惜しいくらいです！さあ、決勝戦の選手を紹介しましょう！まずは一人目、ユキ・スプリングフィールド選手です！」

私がリングに上ると歓声が上がります。

「いまだ10歳の女の子ながら、敵を瞬殺する実力は本物です！ま

ともな試合を見ていない気がします、この試合ではどうなるでしょうか！

では二人目です！ナギ・スプリングフィールド選手です！」

ナギがリングに上ると、同じように歓声が上がります。

「こちらも10歳の少年ですが、先程は素晴らしい試合を見せてくれました！それまでの相手はほぼ瞬殺、やはり実力は本物です！そして、この二人は双子なのです！双子同士の戦いのどちらに軍配が上がるのか！」

「本気でいきますよ？」

「当然だ！俺が倒して優勝するぜ！」

「威勢は良いですね。私も優勝を狙うので。」

「それでは、試合：開始！」

「『戦いの歌』！」

お互いに無詠唱での戦いの歌、一気に距離を詰めます。

拳を出して、受け流され、ナギが掌底。それは読んでますよ。

そのまま手首を掴み、放り投げます。

放り投げたところまで一気に瞬動、回し蹴りで叩き落とします。

「グッ！」

ナギは背中から叩きつけられましたが、身体強化もあってそこまでダメージは無さそうです。そのまま立ち上がりました。

「マンマンテロテロ…」

「!リラ・カ・マギカ・ラ・エレメンタ!」

呪文詠唱は予想外でした!すぐに始動キーを唱えます。

「来たれ雷精、風の精、雷を纏いて、吹きすさべ南洋の嵐!」

「来たれ氷精、闇の精、闇を従え、吹雪け常夜の氷雪!」

「『雷の暴風』!」

「『闇の吹雪』!」

ドオン!

「くっ! 『魔法の射手 連弾 光の10矢 水の10矢』!」

爆風で吹き飛ばされながらも、魔法の射手で反撃。雷の暴風は打ち消しきれなかったですからね!!

「うお!? お返しだ! 『魔法の射手 連弾 雷の20矢』!」

ナギも黙ってやられるわけもなく、打ち返して来ました。最初の1、2発当たっただけ良しとしましょう。

チラッと残り時間を見ますが、もう2分ありません。ナギに目配せすると、すぐに理解してくれました。

「マンマンテロテロ! 契約により、我に従え高殿の王、来たれ、巨神を滅ぼす燃ゆる立つ雷霆」

「リラ・カ・マギカ・ラ・エレメンタ! 契約により、我に従え炎の霸王、来たれ、浄化の炎、燃え盛る大剣、ほとばしれよ、ソドムを焼きし火と硫黄」

（ご都合主義）

SIDE ユキ

どうも、ユキ・スプリングフィールドです。

えー…只今トルコのイスタンブール、魔法世界へのゲートポートです。

武道会が終わって、ナギと詠春が意気投合、その流れで『魔法世界に行こう！』って成りました。

まもなく準備が完了するはずですが……お？

巨大な魔法陣が現れました。いよいよ転送ですかね？…って私だけ別に魔法陣！？ということ！？

考えを巡らせるまもなく転移されました。

ガサッ

痛たた…えーっとここは森？何故に？Why？

混乱していると、ヒラヒラと一枚紙が落ちてきました。手にとってみます。

『どうじゃ？ネギまの世界を満喫しとるかの？といってもまだ大戦すら始まって無いんじゃがのう。』

今回はちょっとしたサービスじゃ。お主は『境界を操る程度の能力』の練習がまるで出来んかったじゃろう？そこでナギや詠春とは別に転移させてもらったぞい。

ただこれだけだとサービスにも何にもなっておらんじゃろうから、ダイオラマ魔法球を送っとくぞい。なんと外の1時間が中での1年になると言うものじゃ。

さらにお主が認めぬ限りは見ることも触れることも出来ん特別製じゃ！

もちろん中の環境は整えてあるぞ？食料は10年分はあるからの。職業は適当に探してくれの。

なお、この手紙は読み終えたら自動的に消滅するぞい。』

そのまま手紙は存在が薄くなり、消えてしまった。

ドサッ

目の前に落ちてきましたよ。魔法球。手のひらサイズ。

えーっと、状況を整理すると…

・ナギたちと別行動に

・魔法球（特別製）GET！

・職業は自分で探せ

ってことですか…

（……い……おい！）

「ふえっ!？」

いきなり声が聞こえました。なんなんでしょう…

（俺がわからねえのか？お前のいう「もう一人」だよ！）

（あ…あなたでしたか…びっくりしたんですよ？）

（何が「あなたでしたか」だよ…ったく、すっかり俺のこと忘れやがって…）

（いや、気にならなかったというか何というか…）

（正直に言えよ…忘れてたんだろ？いい加減俺も表にでるぞ？）

(わかりましたよ…暴れないでくださいね?)

(わーかってるよそのくらい。)

「ふう…久しぶりに表に出たぜ…」

(しょうがないでしょう…あなたが表に出る機会が無かったんですから…)

「お?こんなところに女のガキがいるぜ!」

「いいじゃねえか!身ぐるみ剥いて慰み物にしてやろうぜ!」

(ちょうどその機会がやって来たぜ)

(程ほどにしてくださいよ…)

ん?俺が誰か、だって?まあ後で説明するから待っててくれ。

数は…5人。野盗の類か?

「だーれが好んで慰み物になるか。さっさと滅べ。『凍てつく氷柩』」
「!」

パキン!

氷付け…だが3人か。無詠唱なら上出来か?

「「なっ…」」

おーおー啞然としてやがる。まさか10歳のガキがこんな呪文使えるとは思ってなかったか？

俺は浮遊術を使って空中に飛び上がる。が、アイツらはポカーンとしてやがる。逆に腹がたつな。

「追ってこれねえとは情けねえなあ！ま、お前らはここで死ぬ運命さ！」

俺の名前は零崎雪織！てめえらのきく最後の人間の名だ！」

（リラ・カ・マジカ・ラ・エレメンタ　おお地の底に眠る死者の宮殿よ、我らの下に姿を現せ）

頭の中で詠唱、このくらいは容易いもんだ。

「『冥府の石柱』！」

ドッ…ガガガガガ！

巨大な六角形の石柱が空洞を開けるように6本、閉じ込められたところにトドメの1本。そのまま下衆どもを押し潰した。ってゆーか

抵抗無しかよ。まあ抵抗してもどうにでもなったがな。

一分待ったけど反応なし、こりゃ死んだな。

「ハッ…ちよろいな。」

(え、えー……)

さてと、適当に暴れて気分も晴れたから説明しようか。

俺とユキは同一人物で別人格。平たく言えば二重人格だ。

転生前、ユキは性同一性障害だった。その結果イジメを受けた。

何度もイジメを受けているうちに、ユキは女としての人格を生み出して、それが主人格になったんだ。今思えばどんなレアケースだって話だな。

んで、俺は半ば封じ込められたんだが、元々の人格は俺だ。何度も呼び掛けると、ユキの精神と繋がった。

始めは会話が出来るのがやっとだったが、その内に表に出る人格を操作出来るようになった、って訳だ。

んで何だかんだで転生したんだが、ユキが俺のことをすっかり忘れてやがったから表に出るのが遅れた、って感じだな。

以上、説明終了！

（まあ…もう良いですよ。それにしても零崎名乗るってどうなんですか？）

（別に良いだろうが。まさに裏人格って感じで。）

（ハア…）

なんか溜め息ばっかだな。ま、原因は俺だけだな。

さてと、これからどうすっかな…

くご都合主義 part 2 く (前書き)

ここでもくご都合主義が発動

（ご都合主義 part 2）

SIDE ユキ

「さあて…殺して解して並べて揃えて晒してやんよ！」

（どうも…只今裏人格のユキ・スプリングフィールドです。

あ、大戦が始まったので私は「泉野雪」と名乗っています。）

ズドオン！

（あれから魔法球の中で西洋魔法の修行を5年程。おかげで大抵の魔法は無詠唱で使えるようになりました。）

ガガガガガッ！

（その後は日本で神鳴流の修行。門外不出の『忒の太刀』も教えてもらいました。

どうやったのかですって？運が良かったただけなんです。）

ピキ…パキ…

（何やら妖怪退治に失敗したのか今にも殺されそうになっていた子

供を助けたところ、青山家の一員だったんです。取り敢えず保護して本山に向かいました。」

バリイイイン！

（長に「なにか出来ることはないか？」と言われ、「神鳴流を教わりたい」と言うのでOKが貰えたのです。約1年程で修めました。

それから再び魔法球にこもって、5年程咸卦法の修行をしました。居合い拳もつかえますよ？）

「あーあ。零崎終了か。」

（只今の職業は主に依頼されて賞金首を狩ってます。エヴァ以外。主に雪織が。）

「さて、報告に行きますか。」

（あ、そうそう。雪織は魔法…スキマも応用して姿を変えています。髪や目の色は黒色に、んでもって黒いローブを羽織ってます。）

「スキマは…別にいいか。歩いていくか。」

（ちなみに得物は黒い鎌。これは魔法球レベルの金がかかってます。魔力や気やらを最も流しやすい金属で出来た特別製。同じように刀も作りました。）

「ただもう少し歯応えのあるやつでも良かったかな。」

（得物が鎌だから雪織は「漆黒の死神」なんて呼ばれてます。私ですか？私は特には何もしてないので二つ名なんかありませんよ。）

「そんな感じで俺たちは過ごしてる、って訳だ。」

（台詞とらないで下さいよ…まあ山程喋ったので後は雪織に任せます。）

んで、さっきの戦闘だが：『雷の暴風』、『魔法の射手 連弾 光の101矢』、『おわるせかい』の3つだ。

実は『おわるせかい』は二段構えなんだぜ？

「とこしえのやみ、えいえんのひょうが」までで凍結、そのあとに砕くまでが1つの魔法だ。『こおるせかい』の場合は永久凍結するまでが1つの魔法、ってことだ。

つと、説明している間に到着だ。

「依頼完了だ。」

「ふむ：これは報酬の5000ドラクマじゃ。それにしても見事な戦いぶりじゃったな。」

俺は取り残した場合金を一切受け取らない、絶対に後金にする、という二つの条件でいつも依頼を受けている。

依頼料は本来の手配金額の5割。希望すれば遺体現場につれていくことや、生け捕りも可にしている。その場合は手配金額の6割で依頼を受けている。

ちなみに指名手配されていない場合は依頼人に金額を決めてもらっている。

そのおかげか信用度はかなり高い。今回は依頼人が遠見の魔法が得意だったらしく、1から観察していたようだ。

「そりゃどーも。次があったら依頼してくれ。もっとも、いないかもしれないがな。」

俺は魔法世界を放浪している。理由はスキマ移動のためだ。

スキマ移動は一度見たことがある場合とない場合とで大きく難易度が変わる。

見たことがない場合は正確に座標を決める必要があるのだ、洞窟内等には開けないのだ。

適当に移動していると、新聞の記事が目に入った。「次の戦闘は『紅き翼』の参加か!?'」だと。

ちようどいいか。あの愚弟^{ナギ}の顔と『紅き翼』の実力を見に行くかな。

〈VS『紅き翼』〉

SIDEナギ

よう！ナギ・スプリングフィールドだ！

俺は今、『紅き翼』って名前のギルド？で戦争で活躍している魔法使いだ！

メンバーは俺、旧世界からついてきてる詠春、途中で仲間になったアルビレオ・イマに俺の師匠をしているゼクトの4人だ！

アルは「重力魔法」が使えるし、ゼクトは見た目はガキだけどすげえ強い！

で、今は何をしてるかっつーと、帝国側が撤退したら急に強い魔力を感じたから、そこに向かってる途中だ。

いままでで一番強く感じたから気になってるんだ。

「む…？」

お師匠がなんか気づいたみたいだ。俺も目をこらすと、なんか黒っぽい人間が見える。

近づいた途端、そいつは口を開いた。

「てめえらが『紅き翼』か？」

女みたいな声だな。

「ああそうだぜ。お前は何なんだ？」

「俺が何者か、ねえ。その白いローブを着た男、アルビレオ・イマ。気づいているんじゃないか？」

「ええ：私の推測が正しければ。『漆黒の死神』、零崎雪織でしようか？」

「なんじゃと！あの賞金首を狩っているという奴か！？」

「大正解だ。今回は帝国側からの依頼でな。」「『紅き翼』の実力を見てこい」とのことだ。おっと、殺しは無し、って話だったがな。」

『漆黒の死神』って聞いたことねえけどなあ：

「じゃあお前は強いのか？」

「さあね。今回の目的はてめえらの実力を見ること。1対1がいいか、1対多がいいか、選べ。」

随分上から目線で腹が立つな。

「おっと、逃げるのは無しだぜ『サムライマスター』青山詠春。もし背中を見せたら：」

いない！？

「こいつは御陀仏だ。」

声の聞こえた方を向くと、アルの首に大鎌が添えてあった。できる

なコイツ…

「さて、どうする？」

「いいぜ。1対1でやってやろうじゃねえか。」

「ふうん…じゃ、順番は俺が決める。アルビレオ・イマ、青山詠春、ゼクト、ナギ・スプリングフィールドの順だ。途中で手出しするなよ？」

「仕方あるまい…いったん離れるぞ。」

お師匠と詠春、俺は二人から離れる。するとアイツもアルから離れた。

「ヒヤヒヤしましたよ…死ぬかと思いました。」

「俺は殺すなどとは言われたが、根本が達成できそうにないなら手段は選ばん。精々あがけよ？ 『魔法の射手 連弾 闇の101矢』」

SIDEユキ

一気に魔法の射手が向かう。

「はっ！」

黒い球体…重力球か。まああれくらいなら普通に落とせるよな。

んでもって俺の方に飛ばしてきた。

「あらよつと」

ま、俺も使えるんだがな。重力球にたいして重力球をぶつけてかき消す。

そのまま虚空瞬動で懐に入る。

「『闇の吹雪』」

お？障壁はったか。とはいえほぼゼロ距離攻撃は効いたみたいだ。フラフラしてるし俺を見失ったか。

「『魔法の射手 戒めの風矢』」

「くっ…！」

命中、束縛成功。後は降参させるだけ。

「リラ・カ・マギカ・ラ・エレメンタ…」 おお地の底に眠る死者の宮殿よ、我らの下に姿を現せ」

掌は上に向けて

「『冥府の石柱』 つと…どうだ？降参か？」

「…無理ですね。降参です。」

ま、今の間に首を刈れば人生が終わってたからな。当然と言えば当然か。

「まずは一勝。次だ。」

すべての魔法を解除。次にやって来たのは詠春。

「俺は殺さないが、おまえらは殺す気で来ていいんだぜ？」

影のゲートを利用して刀を取り出す。

「先手は譲ってやる。来な。」

「なら遠慮なく行くぞ。神鳴流決戦奥義！真・雷光剣！」

バカでかい気の雷が落ちる。が、結界で防ぐ。ってか一回打って動き止めたら無意味だろ。

「どうした？この程度か？」

無傷だし、挑発してやる。

「ならば！神鳴流奥義！斬魔剣 弐の太刀！！」

「神鳴流奥義。斬魔剣 弐の太刀」

弐の太刀は弐の太刀をぶつけることで相殺が出来る。

「なっ！？」

ま、こういう技知ってるから防ぐことも出来るけどね。

縮地で詠春の真後ろに移動。

「考え事する暇があるのか？神鳴流奥義 斬岩剣 弐の太刀」

おもいつきり横薙ぎに振る。わざとだが。
それをなんとか避けて、詠春が斬りかかってきた。防ぐようにして、そのまま鏑迫り合いに。

「何故貴様が神鳴流を使える…！」

「自分で考えな。っと！」

わざと力を緩め、体制が崩れたところで鳩尾に掌底。

「グフッ！」

「神鳴流奥義 雷鳴剣」

吹っ飛んだところに雷鳴剣、そのまま直撃。これより威力あげたら死ぬからな。

一気に移動して詠春を掴み、アルに向かって放り投げる。

「軽度の全身火傷。適当に治療しとけ。次」

ゼクトか…戦法は無詠唱の中火力魔法の連発だったか？

「お主は出来るようじゃからの…油断はせんぞ！」

「おっと！」

いきなり飛んできたのは熱線。『燃える天空』 かよ。
かと思えば次構えてるし。

「『雷の暴風』！」

「『闇の吹雪』！」

相殺、爆煙が上がるが正直なところ油断は出来ない。というわけで

「『冥府の石柱』！」

ところ構わず石柱投擲。さて…

「む…『最強防護』！」

当たり。声が聞こえれば位置は分かる。一気に瞬動で後ろに移動。

「…『障壁突破 雷の斧』」

「な…ぐっ！」

もろに命中。まあ死なない程度に威力は調節してある。

（『斬魔剣 弐の太刀』だったら死んでますしね。）

（なにしてたんだ？今の今まで黙って。）

（ちよっとした精神統一ですよ。）

「『魔法の射手 戒めの風矢』」

んで拘束。そのまま鎌を突き付ける。

「これにて終了、か？」

「じゃの…手も足もでんわい。」

というかこの状況から反撃出来る人がいたら見てみたいもんだ。

（その前にあなたは首を落としてるでしょう？）

（まあな。）

「さて：最後。ナギ・スプリングフィールド。てめえだ。」

「はっ：今までの仇、返してやるぜ！」

「出来るんならやってみな。」

「行くぜ！『雷の暴風』！」

結界を張って受け止める。

「つか術式適当だな：バカみたいな魔力で強引に発動してるだけだろう？」

「ムラがかなりありますしね。この際実力差をはっきりさせてはどうですか？」

（だな。）

影のゲートでナギの真後ろに転移。

「ねえ。」

「なん：ブヘッ！」

「ただ単に殴っただけです。あ、雪ですよ？ゲートの時に入れ替わりました。」

「あなたが打てる中で一番威力が高い技を打ってください。相殺してあげます。」

「な！いったなてめえ！やってやろうじゃねーか！」

ブツブツと唱えてます。『千の雷』以外あり得ないわけですが。

「行くぜ！『千の雷』！！」

「『雷の暴風』」

普通なら『雷の暴風』はかき消され、『千の雷』が私に直撃します。
が、

「なっ！？」

魔法陣見て威力が薄くなるところを計算して打ちました。結果、相殺してお互いの魔法が消えました。

今度は瞬動で移動、刀を首に突きつけます。

「弱い。」

「くっ…」

かくして、『紅き翼』との戦闘は私と雪織の勝利に終わりました。

さて、事情を説明しますかね……

くVS『紅き翼』く（後書き）

戦闘です…が正直上手く書けません…
なにかアドバイスがあればお願いします！

それからアンケートです。

今は大戦期なわけですが、そのうち原作本編に入ります。そこで、
麻帆良でのユキの立場をアンケートしたいと思います。

1 教師

2 女子寮管理人

3 喫茶店などの店主

以上の3つから選んで下さい。

一人一票でお願いします。

期限はユキが麻帆良につくまで！結構時間があります。

〈THE・説明〉（前書き）

アンケート実施中です！

ユキの麻帆良での立場について。

1 教師

2 女子寮管理人

3 喫茶店などの店主

以上の三つから選んでください！

〈THE・説明〉

SIDE ユキ

「ま、実力も分かったことですし。ネタばらしとしましょうか。」

「は？」

私はフードを外し、長い髪を外に出す。ナギと同じ、赤毛の髪。

「な……な……な……」

呆然として声が出てませんね。当然と言えばそうですが。

「さて、ナギ・スプリングフィールド。私は誰でしょう？」

「ユキ……なのか……？」

まるであり得ない物を見たかのような表情。

「ええ、その通り。私はユキ・スプリングフィールド。あなたの双子の姉ですよ。」

「グスッ……良かった……もう5年以上も経って……戦争が始まって……ズズ……ずっと会えねえのかと思って……」

あらあら……泣き出しましたか。

「ご免なさい。辛かったでしょう？だから良いのよ？強がらなくて。」

ふんわりと優しく抱き締める。

「だから今はお姉ちゃんに甘えて？大丈夫。顔は見えないから。」

「う…ああああ！」

数十分後、『紅き翼』基地にて

「さて…説明してもらえますか？」

そう切り出したのはアルビレオ・イマ。

ちなみにナギは隅っこで膝を抱えています。恥ずかしかったんでしょうね。

「ええ。私はユキ・スプリングフィールド。先ほどの会話通り、ナギの双子の姉です。」

「では、ナギが『会えない』と言ったのは何故でしょうか？」

「5、6年ほど前に、ゲートポート関連の事故がありませんでしたか？」

「いえ、そのような話は聞いたことはありませんが…」

「とすると揉み消されたのでしょうか…私はナギ、詠春と一緒に魔法世界を回るつもりでした。」

「つまり、とは？」

「何が起こったのかは分かりませんが、私は転移の際、全く知らない森に飛ばされました。」

このあたりから嘘ばっかりになりますが。正直仕方ありません。

「とは言えここは魔法世界のどこだろう、そう思って散策していると誰かは忘れましたが、賞金首に会いました。」

襲われそうになったので私は反撃しました。幸い私の実力を見誤ったソイツを無力化することが出来ました。

で、どうしようかと考えているとどこからともなく人がやって来ました。説明を聞いて、ソイツが賞金首であることを知りました。

お陰で私は身に余るほどの大金を手に入れましたが、さすがに持ち運びが大変です。というわけで大半を使って24倍ダイオラマ魔法球にすぎ込みました。」

「なんというか…無茶苦茶ですね。」

「まったくですね。自分でも信じられない位です。まあ、かなりの金額があまりでしたが、生きるためには働いて金を稼ぐことが必要です。」

とはいっても10歳の体ではほとんどなにも出来ません。というかさせてもらえません。そこでかなりの年数魔法球に閉じ籠りました。」

「食料はどうしたんじゃ？」

「最初に大量にお金を払ったのでなんとかまりました。で、魔法球の中ではひたすら魔法研究に取り組みました。」

そしてある日のことですが、研究中の魔法を暴発させてしまいました。その結果としてですが、もう一人の私である雪織が生まれ、不老になり、さらにはこんなことが出来るようになりました。」

「うおっ!？」

スキマで詠春の前に手首から先だけ出してみました。予想以上の驚きっぷりですね。

「魔力などは一切感じなかったが、空間操作かの？」

「いや、これだけ見るとそうですが。詠春、水の入った容器はありますか？」

「なんに使うのかは知らんが…ほら。」

キャッチして弄ってリリース。

「熱っ!？」

「概念操作とでも言いますか。言うならば『境界を操る程度の能力』が手に入りました。」

「チートですか…ところで何故『程度』とつけているのですか？」

「出来る範囲が限られてるみたいですし。後は気分です。」

まあチート以外の何物でもないですけどね。

「そうですか。」

「で、雪織が賞金首狩りを始めたんです。姿は私と区別をつけるために髪と目の色を黒色にしています。」

「では俺からだ。何故神鳴流を使えるんだ？それも弑の太刀まで。」

「あー…『泉野雪』って知ってますか？」

「うん？いつぞやに連絡があったな。1年で神鳴流を修めたとか。」

「それ、私です。」

「なんだと!？」

「簡単に言う暇潰しで京都に来てた時に青山家の人を助けた見返りとして教わりました。」

「そ、そうか…それで弑の太刀まで使えるのか…」

「どこか納得いかない様子の詠春。ですが事実なので諦めて下さい。」

「お主の力では何が出来るのかの？」

「『境界』に関係する事象があれば大抵のことは出来ます。というか何が出来て何が出来ないかは正確に把握してませんし。」

屁理屈でもいいから境界を作れば弄れますし。死者蘇生と時間操作は出来ませんでしたか。

「んでユキは『紅き翼』に入るのか？」

お、ナギ復活。

「ええ、入りましょうか。」

こうして私は『紅き翼』に参加することになりました。

その後皆に私は『ユキ・スプリングフィールド』と名乗らず、『泉野雪』として名乗ることや雪織の性格や事情等を説明しました。

本名を言わない理由は「なんか嫌な予感がするから」とだけ言いました。まあ雪織が日本名なのもありますしね。

さて、戦争に介入していきますか。

「グレートIIブリッジ奪還作戦」(前書き)

アンケート実施中です。

ユキの麻帆良での立場について。

1 教師

2 女子寮管理人

3 喫茶店などの店主

以上の三つから選んでください！

「グレートⅡブリッジ奪還作戦」

SIDEユキ

「は？グレートⅡブリッジが落とされた？」

「ええ、そうなんです。」

どうも、泉野雪です。

私が『紅き翼』に参加してはや数ヶ月、あれから新たにジャック・ラカンが仲間になりました。

そして過ごしてきたところにこの一報。原作知識がなければ啞然とする以外にできそうにありませんでした。

アレの守りの固さは見ただけで分かるほどでしたから。

「一体何があったんですか？アレが落とされるなんてそうそう考えられません。」

「大規模転移魔法による不意討ちだそうじゃ。それで指揮系統が狂ったんじゃないの。」

「で、その手紙はつまり私たちにグレートⅡブリッジを奪還せよ、ってことが言いたいわけですね？」

「まさしくその通りです。」

「よっしゃあ！さっさといってちゃっちゃんと奪還だ！」

「おう！俺様も存分に暴れてやるぜ！」

「バカ二人は黙って下さい。作戦も無しに行くとか愚の骨頂でしょうが。」

アレの強みはブリッジを攻めれば上空から、上空を攻めればブリッジから攻撃できることですよね？」

「構造を見た限りではそうだろうな。とすると二手に別れるのが良いか？」

「んーそうですね。上空担当とブリッジ担当に別けて攻略するのが良いでしょう。」

「では上空担当はラカンと雪がやるのが良いでしょうか？」

「妥当な線ですね。ラカンとナギを合わせたら化学反応起こして暴走しそうですし。ナギ、ゼクト、詠春、アルが4人で内部を攻略する、ということですね。」

「上空担当のお主ら二人がいかに上手くやるかじゃの。」

「その辺は任せて下さい。ハエ一匹たりとも逃さないようにして戦って見せましょう。」

「そーら、斬艦剣！」

いやはや。さすがラカンです。馬鹿デカイ剣を振り回して次々と戦艦を落としていきます。

私はブリッジと上空を完全に分断するように結界を張って攻撃をしています。ちなみに雪織はお休みです。

「『冥府の石柱』！『闇の吹雪』！」

私は戦艦に乗らずに突撃しようとするやつを中級～上級魔法で撃ち落としています。結界を維持する必要があるので、さすがに広域殲滅魔法は使えません。

「『紅き焰』！『雷の暴風』！」

つかさっさと撤退して欲しいですね。若しくはナギたちが早く奪還してもらいたいです。

「ははっ！さすがユキだな！じゃんじゃん無詠唱で唱えてやがる！」

「黙って下さいラカン！結界を維持するのは辛いんですよ！」

『ユキ！グレートブリッジの奪還は成功だ！今からそっちにいくぜ！』

『ちよっ！待ちなs「ブツッ」…』

念話で成功報告の確認は良いんですが、こっちに来る必要は無いんですけどね…

「まあいいです！ラカン！適当に離れなさいよ！」

結界を解除して、呪文詠唱開始。

「契約により、我に従え光の皇帝、来れ、不滅の光、破邪の神槍、永久の輝きとなりて、降り注げよ光輝！」

「あ、ヤベ！」

「『無限の光槍』！」

カッ！ズガガガガ！！！

光系の広域殲滅魔法、無数の巨大な光の槍が降り注ぐ魔法です。『おわるせかい』等とは違い、確実性はほんの少し下がりますが威力は遥かに上回ります。

「ふいゝ危なかったぜ。」

「離れろといったでしょうに。」

「聞こえなかったんだぜ？お前の声が。」

「そうですか。まあ貴方なら大丈夫だと思いましたし。」

あ、帝国軍が引いていきます。さすがにアレで壊滅的なダメージを受けましたからね。

「いや、さすがに俺様でもお前の詠唱つきのアレは食らったら死ぬぜ？」

「おーいユキー！って終わってるじゃねえか！」

そしてナギ登場。ゼクト、アル、詠春も一緒です。

「勝手に念話を切るからです。来る必要は無いと伝えようとしたんですがね。」

「まったくのう…少しは落ち着きを覚えろ馬鹿弟子が。」

グレートⅡブリッジの奪還後、私は『属性を統べる者』という二つ名がつかしました。色んな属性魔法を打ってたからでしょうか？

後、ファンクラブが出来たそうです。以外と女性のファンが多いそうで…憧れでしょうか？

ただ、うわべだけを見るのは止めて欲しいですね。結局のところは人殺しですから…

くグレートIIブリッジ奪還作戦く（後書き）

くオリジナル魔法く

『無限の光槍』

詠唱

” 契約により、我に従え光の皇帝、来れ、不滅の光、破邪の神槍、永久の輝きとなりて、降り注げよ光輝” 『無限の光槍』

説明

光属性の広域殲滅魔法。

上空から無数の光の槍が降り注ぐ魔法。

他の広域殲滅魔法と比べ、確実性はわずかに落ちるが、威力は他をはるかに上回る。

『完全なる世界』、そして反逆者に（前書き）

アンケート実施中です。

ユキの麻帆良での立場について

1 教師

2 女子寮管理人

3 喫茶店などの店主

以上の3つから選んで下さい。

『完全なる世界』、そして反逆者に

SIDE ユキ

泉野雪です。

グレートブリッジを奪還して早数ヶ月、辺境に飛ばされたりなんだりするのは分かってましたんで皆に事情を説明、雪織に本来の職業である賞金首狩りをさせてました

時々帰って来てみるといつのまにかガトウとタカミチ君が仲間になってました。

取り敢えず自己紹介で『漆黒の死神』でもあることに驚かれました。

それから咸卦法と居合い拳使ったらまた驚かれました。ガトウは「まさか女性でやる人がいるとは：」、タカミチ君は「凄いです!」、他の人は「まあユキだからな。」という反応。

なんか最後の反応はムカつきましたよ。腹いせにラカンとナギをボコボコにしてやりました。二人から勝負を挑まれたんですよ? 間違っても私からは手を出してません。

さて、そんなこんなでガトウから連絡があって、本国の首都に来ています。

「んで、協力者って誰なんだ?」

そこに歩いてくる男性…もとい

「マクゲル元老院議員！」

煩いですよ詠春。大声出さないで下さい。そもそも…

「いや、ワシちゃう。主賓はあちらのお方だ。」

前後の口調の差がひどいですね。ま、それはともかく。階段を上ってくるのは一人の女性。

「ウェスペルタティア王国…アリカ王女だ。」

美人ですね。いやはや。んで、横にいるナギを見るとボーっとします。アレですね。一目惚れってやつでしょう。

一人一人自己紹介。そしてラカンは「気安く話しかけるな、下衆が。」と言われました。

さて、私の番です。

「お初にお目にかかりますアリカ王女殿下。私は泉野雪と申します。」

「おお：そなたが『属性を統べる者』か。」

「そう呼ばれてはいますが、所詮は一人の人間です。どうぞ宜しく願います。」

会合が終わり、暇な時間です。が、

「ワッハハハハ！ 上手い事やりやがってこんガキヤア！」

「ああ！？ なんの話だよ！！」

「とぼけんじゃねーよ！ あのお姫様とイチヤイチャキヤイキヤイお喋りしてたろーが！ この色男が！」

「なにがイチヤイチャだ、バカっ！ してねっつの！！」

「何言ってるんだよ。俺なんか『気安く話しかける な、下衆が』だぜ〜〜？ いやーありゃイイ女だぜ。一本芯の通ったな」

「頭大丈夫かジャック？ マゾかあんた？ 俺あんなおっかねえ女、はじめて見たぞ？」

喧しい二人ですこと。ホントに。

「しかしよ、ウェスペルタティアの王女ってこたーアレか？ 例の姫子ちゃんの姉君ってことかよ？」

「いや、姫子ちゃんの事はなんか、話しにくいみたいだった」

「へえ？ なんでだよ？」

「知るかよ。俺だって気になってんだっつーの」

成長阻害や感情阻害の薬浸けにして自分の家族を兵器として利用してるんですから。辛いはずが無いです。

ま、これについては黙っておきますが。」

「今は協力を取り付けただけ良しとしましょう。それよりもこの戦争が伸ばされているように感じる理由です。」

「誰かによって世界が滅ぼされようとしている、というアレですか。」

「荒唐無稽な話では無いからな。俺たちも調べてはいるが…」

「少し私は色々な場所を見て回って来ます。あなたたちは別に調べてみて下さい。」

「了解だ。」

馬鹿二人はさっきまでのは何だったのか、また言い合いをしています。ヤレヤレですね。

よう、零崎雪織だ。

俺というイレギュラーのせいか、『完全なる世界』が見つかるのが遅れてしまった。ナギとアリカのデートが今日で、すでに出掛けてしまったようなのが残念なところだ。

「『完全なる世界』？」
コズモ・エンテレケイア

「ああ。その組織がこの戦争を長引かせている存在だ。奴等も馬鹿じゃ無いのか、ヘラスやらアリアドネーやら、『紅き翼』では到底行けない場所でしょうやく尻尾を掴めたぜ。」

「俺たちも帝国と連合がどこかで繋がっているという情報は入ったが…」

「ん、上々だ。どうやら中枢にまで奴等はいり込んでいるようだ。ガトウとタカミチはその方面から調べてみてくれ。それから…重大なのはこれだ。」

俺が取り出したのは一枚のレポート。そこには一枚の男の写真と、『完全なる世界』との結び付きを調べあげた文章。

「おいおい、コイツは今の執政官じゃねえか！MMのナンバー2まで奴等の手が入ってんのか！？」

「ソースは確かだが、確実な証拠が無い。周りには話すなよ？」

そしてナギがデートから帰ってきました。

今はクドクドと詠春が説教してます、が手元に一枚の紙を発見。

「ちょっと落ち着いて下さい詠春。ナギ、その紙は何ですか？」

「ん？これか？なんかアジトを荒らしてたら見つけたんだが…」

「ちょっと見せて！」

写りだす立体映像、そして語られる内容。まさに

「ビンゴ…！でかした！」

「え？何がだ？」

「後で説明します！コイツがあれば戦争は一気に終わらせれます！」
しかし私は焦り過ぎて、1つやることを忘れてしまいました。

ガトウがマクゲル議員に連絡して、弾劾裁判の準備を進めることになりました。

そして法務員とマクゲル議員に会いに来たわけですが…

「法務員はまだいらっしやらないのですか？」

「法務員は…来られぬことになった。」

「は？」

ミスった！本物のマクゲル議員を保護するのを忘れていた！

「あれから少し考えたのだがね…折角の勝ち戦だ…ここに来て水を指すのも…どうかと思ってね」

「はあ…」

「私の考えでは無い。そう考える者が多いと」
「黙れ」

居合い抜きで躊躇わず首を狙う…が、手応えなし。幻影か…

「ちよっ…ユキ！お前何してるんだ！？」

「やられました…ナギは気づきましたか？」

「ああ。お前マクゲル議員じゃねえな。何もんだ？」

「気付かれたか…」

服が破れ、白髪青年が姿を現す。

「なっ！？」

「よくわかったね、千の呪文の男に属性を統べる者。こんなに簡単に見破られるとは、もう少し研究が必要だね。」

トランシーバーを取りだそうとしたのを狙おうとしたが

「ぐう！」

どこから…？影のゲートか？

「わしだ！マクゲルだ！『紅き翼』から暗殺されそうになった！奴等は帝国のスパイだ！ああ、うむ！奴等の仲間もだ！今も狙われている！軍に連絡を…」

やられた。みればもう一人がラカンとナギの相手をしている。

「君達にはここで退場してもらおうよ。」

「本体は既に海の中、か…」

スキマを展開して強引に味方を全員基地に送る。

「覚えてなさい『1番目』^{ブリームム}。私たちの誰かが潰してあげるわ…」

驚いたような顔を見てから、私もスキマで逃げる。

それから程なくして、『紅き翼』には反逆者のレッテルが張られま
した。もつとも、

「昨日までの英雄が一転、反逆者か。ヌッフ、人生は波乱万丈で
なくっちゃな♪」

この馬鹿^{ラカン}の思考は変わらないようですが。

『夜の迷宮』、救出（前書き）

アンケート実施中です。

ユキの麻帆良での立場は：

1 教師

2 女子寮管理人

3 喫茶店などの店主

以上の3つから選んで下さい。

『夜の迷宮』、救出

SIDEユキ

どうも、泉野雪です。

『紅き翼』が反逆者となって数日、ガトウ達と私の調査によって、アリカ王女とヘラス帝国のテオドラ皇女が『夜の迷宮』に閉じ込められていることが分かりました。

今は救助に向かうために作戦を考えているところです。

「そもそも雪の能力があれば容易く出来るんじゃないのか？」

たしかに詠春の言うことは分かります。ですが、

「無理です。」

「何故だ？」

「私の能力は移動に使う場合、座標の計算がいるんです。行ったところが無い場所である上に遺跡の中となると…」

「座標の計算、ですか？」

「ええ。あの能力の移動はほとんど転移魔法と変わりません。魔力が不要で詠唱も要りませんが。というか、そもそも二人がどこにいるのかが分かりませんし…」

「ふうむ…脱出には使えるのか？」

「ええ。それは可能です。」

「とすると、ナギとあなたで二人の救助、私たちは外からの敵を中に入れないようにする。こんなところでしょうか？」

「それが最適解でしょう。では、明日に備えましょうか。」

作戦当日です。今は『夜の迷宮』が見える位置で、結界を張って相手方に見えないようにしています。

「相変わらずお主の結界は反則じゃの…」

「『見える』と『見えない』、その他もろもろの境界を弄って作ってますから。」

「入り口の見張りは2人ですか…どうしますか？」

「出来れば私たちの相手があの2人と内部にいる奴になるようにして欲しいですね…無駄な体力は使いたくありませんし。」

「とすると…私たちが別の場所から攻撃を仕掛けるのが良いでしょうね。出来るだけ派手にやればそちらに集まるでしょう。」

と、ゼクトが転移の魔法陣を書いていますね。

「これで完成じゃ。今とは反対の位置、高度100メートルの場所

じゃの。」

私とナギ以外の四人が魔法陣に乗ります。

「では、派手にやって下さいよ？」

「おう！まかせときな！」

「では…転移」

四人の姿が魔法陣と共に消えました。

ズ…ズン……

直後、ここからでも肉眼で見えるほどの巨大な剣が出現しました。

「うっひゃー！派手だな！」

「ラカンの『千の顔を持つ英雄』、斬艦剣ですね。では、こちらも行きますよナギ」

「おうよ！」

結界を解除。瞬間見張りの二人が気づきました。

「チッ！向こうは囧だったか！」

飛んできたのは魔法の射手。ですがこの程度無問題です。

「『雷の投擲』！」

「咸卦法：居合い拳！」

ナギの『雷の投擲』が一人の心臓に突き刺さり、私の居合い拳がもう一人の首を折りました。

二人の息が無いのを横目で確認しつつ、中に突入です。

突入して早一時間、っていうかここ広すぎです！

「侵入者だ！」

「食い止め…」

パスッ

言い終わる前に刀で首を落としました。

「ひでえなお前…」

「聞く必要の無いことは聞きません。」

女王達の場所はこの中心部、もとい最深部だそうです。っていうかそう叫びながら襲いかかってきた馬鹿がいましたから。

「せめて苦しめないようにしてあげてるんですよ……斬岩剣！」

ガラガラと音を立てながら壁が崩れますが、

「また外れ…いい加減にして欲しいですね…」

「そうだな…オラァ！」
ドゴォン！

ナギが走り、魔力で強化した拳で壁を殴りました。煙が晴れていきます。人影…！

「来たぜ、姫さん。」

「遅いぞ、我が騎士よ。」

「はあ…ようやく見つけました。テオドラ皇女は？」

「ゲホッゲホッ…妾はここじゃ！」

半ば瓦礫に埋もれるようになっているテオドラ皇女発見。
手をつかんで引っ張り出します。

「お主らは『紅き翼』かの？」

「ええ。私は泉野雪です。」

「なんと！お主が『属性を統べる者』か！」

「ええ。そうですが今はとりあえず脱出しますよ。」

そう言ってスキマを地上に開く。

「「な、なんじゃこれは！？」」

あ、初めてみればこうなりますよね…なんたって目玉だらけですもの。

「ナギ、アリカ王女とテオドラ皇女を連れて飛び込んで下さい。外に繋がってます。」

「ユキはどうすんだ？」

「私は外にいる詠春達に伝えます。振動も聞こえないですし、終わってるでしょう。」

「そうか。じゃあ先に行ってるぜ！」

そのままナギは二人を連れて飛び込みました。テオドラ皇女が「イヤじゃ〜！」
って言ってましたけど大丈夫でしょう。

私はスキマを別に開いて、その中に入ります。

スキマの中で状況確認…あれ？敵兵の増軍？仕方ありませんか。

「おわ！ユキ！」

「ラカン？とりあえず食い止めて。派手なので決めるから。」

呪文詠唱開始です。

「”契約により、我に従え風の帝王、来れ、全てを切り裂く不可視の刃、地を海を空を走りて、巻き起これよ旋風”！」

「イカン！ 離れるぞ！」

「『裁きの竜巻』！」

横向きに巨大な竜巻を打ち出すこの魔法。下手に属性魔法を打てばそのまま飲み込んで威力を上げ、そうでなくても大量の真空刃が飛んでいく、風属性の広域殲滅魔法です。

「ふう…」

「やりすぎじゃ。」

ゼクトに文句を言われましたが、適当に流しました。

その後はナギ達と合流、私たちは秘密基地に向かいました。

『夜の迷宮』、救出（後書き）

オリジナル魔法

『裁きの竜巻』

詠唱

” 契約により、我に従え風の帝王、来れ、全てを切り裂く不可視の刃、地を海を空を走りて、巻き起これよ旋風 ” 『裁きの竜巻』

風属性の広域殲滅魔法。

横向きの巨大な竜巻を打ち出す。弱い属性魔法は飲み込んで威力を上げる特徴を持ち、味方による強化も可能。

竜巻の内部は大量の真空刃が飛び交っているため、当たった物はあっという間にズタズタにされ、塵になる。

真空刃によって切れない物はほとんど存在しない。ダイヤモンドでも真っ二つにしてしまう。

↳『紅き翼』基地にて↳（前書き）

アンケート実施中です。

ユキの麻帆良での立場は：

1 教師

2 女子寮管理人

3 喫茶店などの店主

以上の3つから選んで下さい。

『紅き翼』基地にて

SIDEユキ

さて、アリカ王女とテオドラ皇女を救出し、秘密基地に戻って来ました。

「何だ、『紅き翼』の秘密基地とはどんなところかと思えば、掘立小屋ではないか！」

「逃亡者に何を期待してんだよこのジャリは。」

「何だ貴様！無礼であろう！」

「へっへん。生憎ヘラス皇族には貸しはあっても借りはないからね。」

「何い？貴様何者だ！」

とまあ騒ぐ二人がいるわけですよ。

ただテオドラ皇女はまだ幼いので、どうもラカンがからかっているようにしか見えないのですが：

（いや、実際そうだろ。）

（おや久しぶりですね雪織。）

（てめえがずっと表に出ていたからだろうが：暇なんだよ俺は。）

（そうですか。まあ後でちょこっとやってあげますよ。）

そしてナギの方をみると、アリカ王女と話しています。

「じゃが…主と主の『紅き翼』は無敵なんじゃろ？」

そして聞こえてきた会話。これは見ないと。

「世界全てが敵、良いではないか。こちらの兵はたったの8人、じやが最強の8人じゃ。」

「へっ…」

「ならば我らが世界を救おう。我が騎士ナギよ、我が楯となり、剣となれ。」

「やれやれ…相変わらずおつかねえ姫さんだぜ…」

ナギがアリカ王女の前に跪きます。やっぱり様になりますね。

「いいぜ姫さん。俺の杖と翼、あんたに預けよう。」

原作での名シーン、やはり立ち会えるのは嬉しいですね。

「さてと…ナギがアリカ王女に忠誠を誓ったことですし、私も正体を明かしましょうか…」

「なんじゃ？」

「私は泉野雪、『属性を統べる者』。それであると同時に…」

黒いローブを羽織り、同時に魔法を使って姿を変える。

「零崎雪織、『漆黒の死神』でもあるのさ。」

おやあ？突然の事についてこれてねえな。

「じゃ、じゃが『漆黒の死神』は鎌を持っているというぞ？どうなんじゃ？」

「鎌、かぁ。これのことか？」

「ひっ…」

おいおい…ただ出ただけでビビるなよ…まあ子供には恐ろしいか？

「それは…本物か？」

「ん？俺がどうこうじゃなくて、鎌が本物かどうかを聞くとはなあ。ま、こいつは本物だぜ？魔法発動体でもあるしなあ。さあて…」

俺は二人にこの事を伝えるのもあったが、別にやりたいこともあるんだよ。

「久しぶりに派手にやりたくてなあ…ナギ！ラカン！」

「お？やんのか？」

「いいじゃねえか！久しぶりにやってやろうじゃねえの！」

「たまには強い奴とやりてえんだよ。良いか？」

「あたりめえじゃねえか！」

「俺たちはまだお前に勝ってないんだぜ？断るわけねえだろ？」

「ハハッ！じゃあやろうか！」

魔法球を取り出す。ちなみに時間差は24倍。

「こんなかでやるぞ。流石に外でやったらどうしようもならねえかな。」

SIDEアル

突然雪織がナギとラカンの二人に勝負を仕掛けました。

私としても興味があったので、魔法球に同行させてもらいました。ちなみにタカミチ少年が一緒についてきています。ハイレベルな戦いをみるのも良い経験になるでしょう、とは思ったのですが…

「ラカン・インパクトォ！」

「『雷の暴風』！」

「ハハハハ！どうした？その程度か！」

バキ！ドゴォン！

どうもあの三人は周りへの被害を考えないようで、大量に流れ弾が

飛んできます。タカミチ少年はそれを避けるのに精一杯のようです。かく言う私も重力魔法を使って流れ弾を落としているわけですが：

というか雪織は規格外にも程があります。今だって二人の攻撃を無詠唱の『冥府の石柱』で受け止めましたし：おかげで岩が大量に降ってきましたよ。

「『燃える天空』！」

「「ちよっ！」」

ズドオン！

「だぁー！てめえ雪織！殺す気か！？」

「この程度で死ぬタマじゃねえだろ！そうらもう一発！」

ズドオン！

いや、思わず突っ込みたくなりますね。広域殲滅魔法を躊躇なく打ち込む精神には、ですよ？

無詠唱とか魔力量についてはもう気にしないことにしています。あと適性属性についても。

彼女の適性属性を調べたら全てに適性がありましたよ。広域殲滅魔法は適性がないと使えませんが、彼女は全属性の広域殲滅魔法が使えますから：

なんというか、理不尽に思えるくらいです。バグとかチートとかで収まるんでしょうか？

そういえばすっかり忘れていた事がありますね。この戦闘が終わったら、『半生の書』に記録させてもらいましょうか。

SIDEユキ

きっかり一日を魔法球の中で過ごして、外に出ました。ああ、そう言えば突然神様から手紙が来ましたよ。内容は

「アルビレオ・イマの『半生の書』については、お主が事情を説明したように載るぞ。お主が転生者であると言えば真実が載るように手を加えたぞい。

このくらいのサービスはしとかんどの。それじゃ、元気での。」

という物でした。この手紙を読み終えた直後にアルから『半生の書』に載せても良いか聞かれたので快諾しておきました。

あ、勝負の結果ですか？雪織が勝ちました。といか途中からスキマを使って理不尽な攻撃をしていましたからね：

そして今は

「んゝもうちょっと魔力を多くしてみて？」

「ハイ…この位ですか？」

タカミチ少年を鍛えているところです。

機能の戦闘が終わってから、物凄くキラキラした目で

「僕を鍛えて下さい！」

って言われたんです…断るのもアレでしたので。

「もう少し…もう少し…ストップ！その感覚よ。」

「ん…反発が凄いですけど…」

「一番反発が大きいってことが魔力と気が同量だって事を示してるのよ。」

「そうなんです…でも何でそれが分かるんですか？」

「私も咸卦法を取得するために努力したからね。」

おかげで魔力や気の量についてはほぼ完璧に測定が出来ます。

「それで、咸卦法を成功させるには『自分を無にする』必要があるんだけど…」

「それは分かるんですけど、イマイチ感覚がつかめなくて…」

「いわゆる『無我の極地』ね。こればかりは上手く説明が出来ないからね…」

私は自分の中の境界を無くすことなんて楽にできますし。

「詠春と一緒に座禅を組むのが良いかしら？」

「座禅、ですか？」

「そう。アレは『無我の極地』に自分を追いやろうとする1つの方

法だからね。」

「そうですか…じゃあ今度一緒にやってみます。」

「うん。あ、あとは下手に他の事に手を出さないようにね。」

「どういう事ですか？」

これはまだタカミチ少年には分からないか。

「とりあえずタカミチ君はガトウさんを師匠にしているわけでしょう？だからまずは『無音拳』と『咸卦法』をマスターすること。下手に別の武術に手を出しても良いことは無いわ。」

「何故です？」

「うーん…簡単に言うとう器用貧乏になる可能性が高いのよ。出来るだけ少ないことに集中して、極めるほうが強くなれる。私だって最初は魔法だけひたすら努力したのよ？」

「そうなんですか…分かりました！」

元氣よく返事をしてくれました。

ま、なんかタカミチが強くなるのがはやくなるかも知れないけど、良いですかね。

↳『紅き翼』基地にて↳（後書き）

タカミチ強化？

なんというか中途半端な終わり方です…

〽決戦〽（前書き）

アンケート実施中です

ユキの麻帆良での立場は：

1 教師

2 女子寮管理人

3 喫茶室などの店主

以上の3つから選んで下さい。

～決戦～

SIDEユキ

どうも、泉野雪です。

前話からおよそ半年…え？メタ発言をするな、ですって？別に良いじゃないですかそのくらい。

ゴホン。それはともかく、この半年間はひたすらに暴れました。

『紅き翼』泉野雪として表から『完全なる世界』の手駒を潰し、『漆黒の死神』零崎雪織として裏から情報収集&頼という形でのやはり手駒潰し…抹殺って言うほうがしつくりきますけど。

そんなこんなで映画にして三部作、単行本にしておよそ14巻分の活躍劇を演じました。

そうこうしているうちにアスナ姫が捕まり、『完全なる世界』は準備完了、私たちは奴らを追い詰め、現在は『墓守り人の宮殿』に攻め混もうとしているとことです。

「不気味なくらい静かだな、奴ら。」

「悪の組織なんてそんなものです。なめられているんでしょう。」

まあこんなときは静かになりますよ、普通。

「ナギ殿！帝国・連合・アリアドネー混成舞台の準備完了しました！」

セラスさんが準備が整った事を伝えます。

「それで…あの…ナギ殿、雪様。」

「ん？」

「なんですか？」

「ササ、サインをお願いしても良いでしょうか？」

「うん？ああいいぜ。そのくらい。」

そう言ってナギはサラサラとサインを書き込みます。私もちゃちゃっと。

「あ、ありがとうございます！」

緊張感のない娘ですね…まあ良いですけど。

そしてガトウから連絡、どうやら正規軍は遅れるとのこと。説得は

間に合わないらしい。延長出来ないか聞いてきましたが、

「残念ですが、既にタイムリミットです。」

「ええ、彼らはもう『世界を無に帰す』儀式の準備は整っています。
『黄昏の姫巫女』は彼らの手中にあるのです。」

それを聞いて、ナギが飛び出そうとします。

「待って。私は外の軍勢をあらかた潰してから行きます。だから露
払いくらいは。」

「なんかやんのか？」

「ええ。とびっきりの魔法を。」

そのまま宙に浮き上がり、準備開始。

「……『燃える天空』術式固定……『こおるせかい』術式固定……
『千の雷』術式固定……」

ぐ…流石に3つ、広域殲滅魔法を固定するのは辛いですね…

「術式連結……完了！」

純粹な魔力でその3つを繋ぎ合わせます。形は三角形。

「行きます…『神々の黄昏』！」

打ち出し、一気に相手の軍勢の真ん中まで飛ばし…

「『解放』」

カッ！ズドオオオオオン！

超広範囲に大爆発。衝撃はこちらに来ないように始めから術式を組んであります。

煙が晴れると、殆どの軍勢は跡形も無くなり、残っているわずかも重傷。ここまでやれば良いでしょう。

「このバグが…」

「努力の塊と言ってくださいな。」

「じゃあ皆、突っ込むぜ！」

ナギたちは『墓守り人の宮殿』に入っていました。

さて、私は生き残った悪魔とかの殲滅をしますかね。私は刀を取り出して咸卦法を発動しました。

「ふう…このくらいでしょうか…ねっ！」

私は見える範囲の敵は全て斬り落としました。最後の一体を斬り捨てます。

ゾクッ

恐ろしい魔力…『造物主』か！

（ミスったな。）

（全くです。急ぎます。）

直ぐに『闇の魔法』を発動、両手で『千の雷』を掌握。

一気に雷化で移動。魔力の大きい方に向かいます。

(っ…)

(もうすぐだ。準備しとけ。)

(ええ。)

「ナギ!ゼクト!退いて!『解放・千の雷』×2!」

ズッドオオオン!

「ユキ!」

「私がいつまでも外に居るわけには、いかないんですよっ!」

ズドドドド!

無詠唱『無幻の光槍』を打ち込む。いくら奴でも堪えるでしょ…

「ツク…フハハハハ!」

笑い出した：雪織

（おう。演算開始だ。）

「私を倒すか人間！それもよからう！私を倒し英雄となれ！羊達の慰めにもなろう！」

腹のたつ物言いにたいして無言で『雷の投擲』を打ち込みますが、避ける素振りも見せずにくりました。

「だがゆめゆめ忘れるでは無い！全てを満たす解は無い！いずれ彼等にも絶望の帳が降りる！貴様らとて例外では無い！」

「ぐだぐだ、うっさあああ（るっせええええ）！」

二人して造物主をぶん殴る。

「たとえ明日、世界が滅ぶと分かってても！それでも諦めないのが人間ってモンでしょうが（だろうが）！」

「くっ：貴様らもいずれ知るだろう：私の語る『永遠』こそが『全ての魂』を救い得る、唯一の次善解だと。」

「かはっ!？」

後ろから攻撃…ゼクトを乗っ取ったか…

「お師匠!？」

「自らに問うがいい。人は果たして救うに値するものか？」

（解析完了済みだ。やりな。）

「ゼクトから、離れろおおお！」

ゼクトをぶん殴り、造物主を引き剥がす。不滅の特性から、造物主は元の肉体に宿る。

「く…人間は度しがたい。英雄よ、貴様らも我が2600年の絶望を知るがよい…さらばだ。」

そう言って、造物主は異世界へと消えて行きました。

「お師匠!」

「っ…大丈夫でしょう…傷はついてない…気を失っているだけです

…」

強引にスキマを開き、送り返す。

「お、おい！」

ここからは私の領分…奥まで一気に進みます。

アスナは水晶のようなものに閉じ込められて居ました。

私は水晶に触れます。急に取り出して、悪影響が無いか確認するた
めです。

（ちっ…残念だが発動回避は無理だ。）

（やはりですか…仕方ありません…）

パキイイイン！

内と外の境界を弄り、アスナを取り出します。それと同時に、アス
ナを閉じ込めていた水晶は砕けました。

ボウ…

「!」

(いよいよ発動か…さっさと逃げるぞ!)

(ええ…)

スキマを開き、アスナを抱えてそのまま倒れこみました。

ドサッ

スキマから落ちたところに、『紅き翼』のメンバーたちは居ました…

「ユキ!」

「はは…演算のし過ぎ…です…少し寝かせて…くだ…さい…」

「お、おい!」

「アスナの…面倒を誰か…見ておいてください…」

それだけ言って、私の意識は闇に落ちました

〈決戦〉（後書き）

ゼクト生還。ユキ（作者）がしたかった原作ブレイクの1つです。

やはり微妙な終わりかた：アドバイスがあればお願いします！

オリジナル魔法

『神々の黄昏』

呪文等とはとくに無し。

『燃える天空』『こおるせかい』『千の雷』の3つの魔法を固定、魔力によって連結させて打ち出す。

『解放』によって固定を外すことで、3つの魔法を同時に発動させる。

ユキはあらかじめ衝撃の範囲が広がりすぎないように術式を組み込んでいる。

威力については相乗効果によって測れないほど上がっている。いうならば『超広範囲殲滅魔法』

〽目覚め、一時の別れ〽 (前書き)

アンケート実施中です。

ユキの麻帆良での立場は：

- 1 教師
- 2 女子寮管理人
- 3 喫茶店などの店主

以上の3つから選んで下さい！

〈目覚め、一時の別れ〉

SIDE ユキ

「ん……う……」

ここは……ベッドの上……？

「ユキ、起キタ？」

「アスナ……ちゃん……？」

「ウン。」

私を覗き込むように見るアスナ。えっと……何があった……？

私は確か……『墓守り人の宮殿』でアスナを助け出して……そのまま皆のところに移動して……

（そこで気絶したんだぜ。）

（ああ……そうでしたね。）

「今、誰か他の人はいる？」

「アルビレオ。」

アルが居るってことでしょうね。

「呼んできてくれる？」

「ワカッタ。」

コクリと頷いて、トテトテといった感じで歩いて行きました。

（どのくらい寝ていたのでしょうか…）

（さあな。だが、嫌な予感しかしねえ。）

少し考えていると、アルがやって来ました。

「起きましたね…気分はどうですか？」

「まあまあです。寝起きですし。」

「それは良かったです。」

いつもの胡散臭い笑みではない、素直な微笑を見せるアル。

「さて…私が寝ていた間に何があったか説明していただけますか？」

アルの顔が曇りました。

「いずれは教えることですし…良いでしょう。アリカ王女が捕まりました。」

（やられたな…かなりの間気絶していたみたいだな。）

「……何が起こったか、最初から説明してください。」

「はい……あなたがアスナ姫をつれてきて気絶した後、『世界を無

に帰す』ための魔法が発動しました。これについては帝国・連合・アリアドネーが協力し、『大規模反転封印術式』を発動させることで『墓守り人の宮殿』ごと封印し、解決しました。」

「『大規模反転封印術式』ですって？そんなもの使ったら…」

「あなたの考えている通りです。その数日後、オスティアで終戦記念式典が行われ、お祭りムードの大騒ぎ。運悪くその時にオスティアで魔力消失現象が発生したのです。」

「アレは恐ろしい量の空気中に浮かぶ魔力を使います…そのしわ寄せがオスティアに向かったわけですね…空気中の魔力が消失した場合、浮遊している岩は落下するはずですよね？」

「その通りです。オスティアは崩落を始めました。これを解決する方々は見つからず、アリカ王女が『王家の魔力』を使用、オスティアは地上に不時着しました。」

「犠牲者を可能な限り減らす最善策ですね…これだけだと罪にはならない筈ですが？」

「ええ。問題だったのは、オスティア崩落が始まってからのアリカ王女の動きが早かったこと。結果として『完全なる世界』との結び付きをでっち上げられたんです。

さらに同時にクーデターを起こした際の『父親殺し』の罪も被せられました。」

「『父親殺し』についてはアレが『完全なる世界』と結び付いていたというのに…MMのクスどもが…」

「……続けます。そうしてアリカ王女は捕らえられ、今はケルベラス無限監獄に居るはずです。」

「死刑囚専用の監獄かあ……執行までのタイムリミットは？」

「当初の発表では2年です。正確な日付などはまだ分かりませんが……」

「ふうむ……今の『紅き翼』はアリカ王女に『一人でも多くの命を救え』的なことを言われて実行中、ですか？」

「!……まさにその通りです。紛争地を巡り、巻き込まれた人たちの治療をしています。」

「でもクルトは参加してないんじゃないの？彼の事だから、政治面をどうにかしようと考えてるんじゃない？」

「よくわかりましたね……その通りですよ。あなたはどうするんですか？」

「私は……基本単独行動でしょうね。少し裏でやっておきたいことがありますし……」

「そうですか……止めはしませんが、ホドホドにしてくださいよ？」

「まあもう暫くは休みますが。まだメンバーとも会ってませんし。」

さて、裏での仕事はしますかね……やっぱり残党潰しでしょうか？

「それですね…出来ればあなたにアスナ姫を預かって欲しいのですが？」

「はい？」

今、何て言ったこの人？

「大変なのはわかりますが…やはり男だけでこのような少女を育てるのには無理がある、という結論が出ているんです。」

「はあ。」

「私としては非常に不本意ではあるのですが、もしあなたが単独で行動するのであればお願いします。」

この変態ロリコンが…幼女を手放す…だと…

「分かりました…預かりましょう。」

「ありがとうございます。」

「ワタシ、ユキニツイテイクノ？」

「そういうことですよ。」

数日経っての夜です。

「そうか…ユキは一旦離れるのか…」

「私にも考えはありますし、『紅き翼』の一員であることを辞めるわけじゃありません。」

「アリカ王女についてはどうするのかの？」

「そのために動くんですよ。こういう場合独り身の方が楽です。まあアスナを連れていくわけですが、大丈夫ですよ。」

詠春とラカン、ガトウ、タカミチは既に酔いつぶれています。わりと静かなのはそのためです。
アスナはとっくにおねむですしね。

「なあユキ…俺は何が出来るんだろうな…」

「ナギらしくも無い。何が出来るか、じゃなくて何をするのか、が大事なんですよ？あなたは頭もたいして良くないんだから、思うがままに動けば良いんです。」

「そうかあ…そうだよなあ…」

あらら？寝ちゃいましたか。慣れもしない酒なんか飲むからですよ。まったく…

とりあえず毛布をかけておきました。

「そう言えばユキはナギと今のうちに仮契約はしないのですか？」

「ブッ！ゲホッゲホッ！」

コイツは…

「いきなり何を言い出すかと思えば…私は血の契約の陣も魔力宝石の陣も、魔力を流し込むだけの陣も書けますよ？果ては偽名のまま仮契約出来てなおかつ本契約並みのアーティファクトが使える陣も作りましたよ？」

「それなら良いじゃないですか？」

「あなた分かっていってるでしょう？対象者が寝ていても使えるのは、キスの陣だけだ、ってこと。」

「バレてましたか…」

「ナギの始めて唇を奪っていいのは彼女だけですよ……それに、私はアーティファクトは必要無いですし。」

「んゝ残念です。」

なんというか、締まらないなあ。

「さて、それでは私は離れますね。」

「マタネ、ミンナ。」

「おう！気を付けてな！」

「次に会う日を楽しみにしてて下さい！」

「アスナ姫のこと、頼んだぞ。」

「また会える日を楽しみにしてるぞ。」

「ワシもじゃ。達者での。」

「次にアスナ姫と会える日を楽しみにしておきますよ。」

「次会うときは、絶対にお前に勝ってやるからな！」

さて、暫くの別れです。

魔法も使ってアスナを杖から離れないようにして。

「じゃあ、また会う日まで！」

一気に飛んでいきます。

さて、何処に行って何をしましょうかね。

〈目覚め、一時の別れ〉（後書き）

以下ネタバレ

一時の別れといっても次回には合流するんですけどね。
つまり次回は2年後のことになります。

くくルトとの通信く(前書き)

アンケート実施中です

ユキの麻帆良での立場は：

1 教師

2 女子寮管理人

3 喫茶店などの店主

以上の3つから選んで下さい。

くクルトとの通信く

SIDEユキ

よう。零崎雪織だ。

あれから別れて約2年、俺は『完全なる世界』の残党潰しを主にやってたぜ。

たまには紛争地に出向いて治療とかもやっていたがな。

色々な場面をアスナに見せたことはいい方向に向かったみたいだ。感情も知識も育ってるからな。

アスナが魔法から離れることは絶対に出来ない。俺がその気になれば暫くは断絶出来るだろうが、それはまやかしだろう。

ただ、旅の途中いきなり『力が欲しい』って言われたのは驚いたがな。大方アスナ狙いの敵が何度も来てたからだろうが…

これについては「泉野雪」で仮契約をして、とりあえずある程度の体術をつけることで納得させておいた。

まだ体が成長してないのに筋肉つけると絶対に悪いからな…ただ、センスが良すぎるのは考え物だ。あつと言う間に身につけちゃった。咸卦法も完璧に使えるし…どうしよう？

あ、アーティファクトは『ハマノツルギ』だ。だが調べたら原作以上には上げつない効果を持っていた。

魔法無効化はそのままに、本人の意思で『反射』が使えるとか…何なんだよ！？どこの一方通行だよ！？

ついでに結界も張れるとかもつと意味不明だよ！？

対魔法使い最終兵器といってもおかしくない性能だ…成長して剣術覚えたらどうなるんだろ？いや、覚えさせるつもりだけど…

つと、そんなことを考えてたら通信だ。なんだ？

『もしもし…クルトです。』

「よう、雪織だ。久しぶりだな。」

『ええ、お久しぶりです…』

ん？何やら落ち込んでるな…とするとアレかな。

「どうした？暗い声だが…何か起こったか？」

『ハイ…アリカ様の処刑日が早まりました。今日から10日後です…それで…』

「アリカを助けて欲しい、と？『紅き翼』はどうしたんだ？」

『もちろん彼らにも連絡しましたよ。ですがいい返事を貰えなかったんです…』

ふーん…そんな風に捉えたか。

「へえ…面白いこと言うなあクルト。」

『面白いてなに言ってるんですか!』

「いや、あいつらがどんなやつかまだわかってねえみたいだな、って思ってたな。」

『はい?』

「なーに、大丈夫だ。まさかあいつらが動かないとでも?それはあり得ねえ。一番近くで見てきた俺が言うんだ。」

『はぁ…それでも僕は不安なんですよ…』

「んゝだったら俺が行って発破かけてくるから安心しな。じゃな!」

『え?ちょ…待っ…』

バキン!

通信用魔法具を砕く。

「どうしたの?」

「ああ、クルトから連絡が来てな。アリカの処刑日が早まったらしい。で、ナギがウジウジしてるみたいだからな…」

「ナギたちの所に行くの?」

「ああ。アリカを助けるためにも、な。」

「姉さまを助けてくれるの？ユキオリ。」

「ん？今まで助けなかったから不思議に思ったのか？」

「うん。」

「えーっとだな、アリカは『災厄の魔女』って呼ばれているのは言
ったよな？」

「言ったよ。でもユキオリなら直ぐに助けれたんじゃないの？」

「厳しいこと言うなあ…それだとアリカの命を救うことは出来るん
だが、名誉は救えないんだ。」

「？」

首を傾げるアスナ。可愛いな。

「お前もアリカが『災厄の魔女』なんて呼ばれるのは嫌だろ？何か
したならともかく、何もしてないのにさ。」

「うん。」

「だから名誉を取り戻すために、時間をかけて調べあげた。アリカ
を無罪にして、なおかつ自由にするためにな。」

「つまり悪人を粛清するための情報を集めるのに時間がかかった、
ってわけ？」

「何でそこまで複雑に言えるんだか…まあそういうことだ。」

「でもさ、情報が集まっているんなら今でも出来るでしょ？ つまりユキオリが面倒なんだよね？」

「う…なんつか、そこまで頭が回るか。まあ確かに面倒なのもあるが、アリの『気持ち』を救うための舞台があるんだ。」

「姉さまの『気持ち』？」

「そ。絶望に立たされ、命を諦めた女性^{アリカ}を救い出す一人の英雄^{ナギ}。そのための舞台がな。」

「ユキとユキオリって演出家なの？」

「違うな。自動的にその舞台が整うんだ。利用しない手は無いだろう？」

「うーん…そういうもののなの？」

「そういうもののなのさ。」

さてと、メガロ近くの『紅き翼』の基地に行くか。

「よう、久しぶりだな。」

「うん？ 雪織ですか。久しぶりですね。」

まず出迎えたのはアル。

「久しぶり、アルビレオ。」

「これは久しぶりですねアスナちゃん。元気になりましたか？」

「うん。」

「まあいいや、とりあえず入らせてもらうぜ。」

中に入ると、ナギ以外のメンバーは揃っていた。とりあえず挨拶をして、ナギはどうしたのかを聞くとウジウジと悩んでいるみたいだ。

つーわけで個室の扉の前。まあやることは破壊なんだが。

バゴン！

「よう、久しぶりに会おうかと思ってたらウジウジ悩んでーじゃねーよ！」

「……ああ、雪織か。」

「なんだなんだお前らしくも無い、何があったか言ってみな！」

するとポツポツと話し出すナギ。まあ言っちゃ悪いが悩むことでも何でも無いことだな。

「ふうん…で？」

「で？って何だよ…」

「お前は何がしたいのさ。俺が聞きたいのはそれだけだ。遮音魔法はかけてるから。」

「俺は…その…」

「ああもうじれったい！はっきりしやがれこの馬鹿！」

思考誘導の魔法をかけつつ叫ぶ。こうすれば…

「俺は大好きなアリカを助けたいんだよ！馬鹿っていうことねえだろ！」

「へえ…」

ニヤニヤと笑ってやる。見事に釣れたよ、しかも大物。

「なっ…何だよその顔…」

「『大好きなアリカ』ねえ…」

「なっ………」

顔を真っ赤にして黙りこむナギ。

「お前がやりたいことは分かった。じゃあ皆に伝えろよ？俺たちは仲間だろう？」

「で、でも…」

「いいから伝えやがれ！仲間に遠慮することはねえ！それとも俺がさっきの言葉を伝えようか？」

「分かったよ：伝えれば良いんだろ伝えれば…」

部屋の外に出る。

「皆、俺はアリカを助けたい！協力してくれるか？」

部屋が静まり返る。

「フフ：それで悩んでたんですね…」

「水くさいぞ、ナギ。」

「まさか俺たちが協力しないと思ったか？」

「相変わらずの馬鹿弟子じゃのう…」

「へっ：助けたいんなら始めからそう言いやがれてんだ！」

「僕も手伝います！」

「皆：ありがとうな！」

ナギの悩みは解消、脚本は用意済み。

あとは本番を待つだけ、だ。

く王女救出く(前書き)

アンケート実施中です。

ユキの麻帆良での立場は：

1 教師

2 女子寮管理人

3 喫茶店などの店主

以上の3つから選んで下さい。

く王女救出く

SIDEユキ

「魔獣うごめくケルベラス溪谷。魔法を一切使えぬその谷底は魔法使いにとってまさに死の谷」

処刑人が処刑内容を説明しています。

「見せしめ」の意味でもあるのでしょうか？

重罪人に対しての恐怖の誇示、ってやつですかね…

「歩け」

「触れるな下郎。言われずとも歩く。」

アリカ王女はゆっくりと、しかし確実に「死」へと向かうために歩きます。

そうしてたどり着いた飛び降り台。目を瞑り、

「ナギ…さらばじゃ…」

確かにそう言って、飛び降りていきました。

さあ、本番の始まりです。

「よーしっ！こんなもんだろ！」

「な、なんだ貴様！」

ラカンが処刑人の頭を鷲掴みにします。

「おっさん、今からここで起きたことは『なかった』ことになる。
いいな？」

「な、何を…」

「むんっ！」

ラカンが着ていた鎧が弾けました。中から気を膨らませた見たいです
すね。

「な…『紅き翼』の…ジャック・ラカンだと!？」

「まさか俺だけだと思ってるのか？」

そして現れる詠春、ゼクト、アル、ガトウ。

会場は騒然となり、元老院の議員たちは慌て出します。

「貴様ら…今さら何を！」

「何を？そりゃ決まってる。王女を助けたただけだ。『千の呪文の男』
、ナギ・スプリングフィールドがな。」

「ばかな！いかにあの『千の呪文の男』だろうと谷底からは生きて
帰れまい！」

「クククク…アハハハハハ！」

大笑いしたのは私。まさか何もしていないとでも？

「何だ貴様！」

「面白いと言いますねえ…死ぬのは、あなたたちですよ？」

「何を…」

「ほら。」

スキマ展開、見事に着地したのはアリカをお姫様抱っこしたナギ。

「ナギ・スプリングフィールド、アリカ・アナルキア・エンテオフ
ユシアはここにいます。」

大量のレポートを空中に浮かべる。

「これらはアリカ王女の無実を晴らし、そして」

さらにスキマ展開。無様に落ちてきたのは手足を縛られた真の罪人。

「あなたたちの有罪を証明するもの。」

次の瞬間、処刑執行人の大半が鎧を外す。

「お前たちを『完全なる世界』の関係者とみなし、今ここで処刑する。」

「馬鹿な…そんなはずは…」

私はニヤリと笑い、一言。

「あるんですよ。」

転移魔法を発動。罪人は全て谷のなかに、のこりの『紅き翼』以外の人達は安全地帯…もとい、それぞれの家に。

「茶番劇は終わり。さて…」

ナギとアリカの方を向く。

「プロポーズでもしたんでしょう？お互いに見つめ合って。」

「ハハハハ！こりゃ良いぜ！」

「めでたい事です。」

「馬鹿弟子にも春が来たんじゃないのう…」

「なっ…」

「っ…」

おやおや、二人とも顔を真っ赤にして。

「ユキ。それくらいにしておこう。そろそろ敵さんのお出ました。」

詠春に言われ、飛んでくる戦艦を見る。

「二人はイチャイチャしておいてくださいな。では…」

振り返り、告げる。

「のこりの屑どもを潰しますか。」

『おう!』

S I D E o u t

S I D E クルト

僕は驚きました。

何に、というと『完全なる世界』の関係者を全て証拠つきで炙り出し、一斉に処刑するというアイデアを思い付いた事に。

そしてそれを実行するための資料を完全にそろえ、この舞台を作り上げたことに。

情報を操作し、かき集め、それでも僕がまだ出来なかった事をやりとげてしまったことに。

そして今、彼女は

「アハハハハハハ！」

恐ろしい笑い声をあげて戦艦を撃墜させていきます。

「ラカン適当に右パンチ！」

「神鳴流決戦奥義、真・雷光剣！」

「フッフ…」

「豪殺 居合い拳！」

「『雷の暴風』、『闇の吹雪』！」

他のメンバーも各々の方法で次々と敵を蹴散らしていきます。

「皆さん凄いなあ…」

「そうだなあ…」

タカミチの言葉に思わず返してしまいました。

僕もあの場所にまでたどり着けるのかな…

え？ナギさんとアリカ様？ああ…見たくないんですよ…だって…

「ナギ…」

「アリカ…」

名前呼び合っている上に凄まじいオーラが出ているんですよ…
顔が真っ赤になってしまいそうです…うう…

S I D E o u t

S I D E ユキ

さて、処刑日から数日、公式的にはアリカ王女は『処刑された』ことになりました。

ちなみに『紅き翼』と関係者以外で今回の事情を知る人たちの記憶は消しましたからね：悪いことはしたと思いますが、これについてはクルトに頑張ってもらいましょう。

さて、今は休んでいる訳ですが：

「これからどうしましょう？」

アリカ王女を表に出すことは出来ないことも無いですが、あまりしたくありません。

ちなみに今ここにいるメンバーは私、詠春、アスナという奇妙な感じですよ。

ナギとアリカもいるにはいますが、ずっとイチャイチャしてるんでカウントしてません。

「日本に行きたい。」

「え？」

まさかのアスナの発言。

「日本、かぁ…どうします?」

「え?俺に聞いたのか?」

「そうですよ?詠春には木乃葉さんもいるでしょう?」

「ああ…そう言えば帰ってないな…」

「木乃葉さんって、誰?」

「詠春の愛する人、ですよ?」

「う…まあそうなんだが…」

「じゃあ会ってみたい。」

「しかしだなあ…ゲートポートを抜けるのは…アリカ様がな…皆でいくつもりなんだろう?」

「そこは私がいますし無問題ですよ。皆に伝えてみます?」

「うゝむ…そうだな…出来ればそろそろ戻りたい気持ちもあるし…そうするか。」

「じゃあ決定ですね。今日の夜にでも話してみましよう。」

「日本に行けるの?」

「まあ行けるでしょう。皆ノリは良いですし、期待していいと思い

ますよ？」

「うん。」

その夜、話すことで即時決定、場所は勿論京都です。
さて、京都ではどうなりますかね…

く王女救出く（後書き）

相変わらずうまく終わらせれない…
次回は京都が舞台です。

〽京都到着〽（前書き）

アンケート実施中です。

ユキの麻帆良での立場は：

1 教師

2 女子寮管理人

3 喫茶店などの店主

以上の3つから選んで下さい。

〽京都到着〽

SIDE ユキ

「ここが、京都。」

「そうですよ。もっとも、山の中ですけど。」

ハイ、というわけでやって来ました古都京都。

メンバーは私、アスナ、詠春、ナギ、アリカ、アル、ガトウ、タカミチ、ラカンです。

え？ラカンはゲートポートを使えないんじゃないか、ですって？

そうですね。だから私のスキマで移動したんです。座標さえ認識していればどこにでも行けるわけですから。

お金についてはガトウに頼んで調達してもらいましたけどね。

んで、今は詠春の実家もとい屋敷に向かっているわけです。

「それにしても面倒ですね。私も礼儀として結界の前に出ましたけど。」

「余計な侵入者を防ぐためだ。我慢してくれ。」

「身体強化の魔法やら転移魔法とかもただの魔法使いだと使えないようにしてありますし、階段も多いですし……」

「面倒。」

「う…」

「まあ、あの二人には関係無さそうですね。」

後ろを向けば、イチヤイチヤしているナギとアリカ。そして他のメンバーは顔をしかめています。

あ、今の位置関係を図にすると…

アスナ 私 詠春

この間およそ10m以上

ナギアリカ

この間およそ15m以上

アル ガトウ タカミチ ラカン ゼクト

といった感じです。

「姉さま、嬉しそう。」

「まあ幸せなのは結構ですが、ホドホドにして欲しいですね…」

あの美男美女カップルは人目も憚らずに路上キスとかしそうです。
|| バカップルです。

「つと…ぐちぐち言ったら見えてきましたね。」

大きな門が見えてきました、ようやく到着です。

しばらく待って、全員が門の前に来たところでぐります。

『お帰りなさいませ、詠春様、雪様!』

原作のあのシーンよろしく、大量の巫女さんがお出迎え。

「は…?」

私は苦笑しつつ、啞然としている詠春に話す。

「私が連絡しておいたんですよ。いつの間にか私も青山家か近衛家に加えられたみたいですが。」

「ああ、そうか…」

横目で納得しきれない顔の詠春を見つつ、巫女の一人にたずねる。

「それで…木乃葉さんはどちらに?」

「木乃葉様でしたら…」

「詠春さーーーーーん!」

巫女が答える前に出てきましたよ、黒髪の大和撫子が。木之葉さんです。

そのまま詠春に向かって走っていき…

「の…バカー…！…！…！…！…！…！…！」

「ぐふう！？」

おお…見事なボディブロー…気を纏った一撃をお見舞いして押し倒しました。

「詠春はん…あんさんはウチというものが有りながら…」

「こ、木乃葉…さん？」

「この赤毛の女の子は誰でっか？まさか雪はんとの子どもとでも言うつもりかいな。」

「は…？」

こちらを向いた木乃葉さん、しかしその目は笑っています。成る程…寸劇ですか…良いです。のってあげましょう。

「まさかそんなわけないだろ！？雪もちゃんと説明してくれ！」

という言葉に対して私は頬に両手を当てつつ顔を赤らめて

「そんな…あんなに激しかったのに…」

「ぶっ!?!」

「どういうことか、ちゃんと説明してくれはります?」

真っ黒なオーラが出てますねえ…これが演技だというのが信じられないくらいです。

「詠春とユキはそんな関係じゃない。」

そこにさしのべられた救いの手、アスナ。

その瞬間、木乃葉さんのオーラは一瞬で消えました。

「ええ、分かってますえ。まさか詠春はんにそんな度胸はありません。」

「木乃葉…さん?」

「でもなあ…ウチも心配やったんやで? せめて一言でもいいから手紙くれたってええんやないの?」

「その…すまなかった。」

「さて、しょーもない寸劇に付き合ってくれておおきに。」

「いえいえ、私も楽しかったから良いですよ。」

啞然とする観客、途中まで昼ドラ的展開でしたし。

「改めまして、ウチは近衛木乃葉、詠春はんの妻になる予定です。よろしゅうな。あんさんらが『紅き翼』のメンバーやな？」

「ええ。アルビレオ・イマです。以後よろしくお願いします。」

「俺はナギ・スプリングフィールドだ。」

「アリカじゃ。」

「ジャック・ラカンだ。」

「アスナ。」

「ガトウ・カグラ・ヴァンテンバーグと言います。どうぞよろしく。」

「フィリウス・ゼクトじゃ。」

「高畑・T・タカミチです。」

とまあ自己紹介。アスナとアリカはもうウェスペルタティアから縁を切ったと言いたいのでしょうか？

「まあ立ち話も辛いやろうし、家に入ってゆっくりしてな。」

というわけで私たちは中に案内されましたとき。

〳京都到着〳（後書き）

ネギまの漫画の中に「雪」という名の登場人物がいたことに今さら気づく：

まあ別に良いですよね！と開き直ってみたり。

とりあえず中途半端ですが今回はここまで。

以下ネタバレ

次回は両面宿儺を出すつもり…です。

〱両面宿儺、フルボッコ?〱 (前書き)

アンケート実施中です。

ユキの麻帆良での立場は

1 教師

2 女子寮管理人

3 喫茶店などの店主

以上の3つのうちどれが良いか、選んで下さい。

く両面宿儻、フルボッコ？く

SIDEユキ

詠春の実家についてのんびり過ごし、今は夜。

「ガハハハ！ほら飲め飲め！」

「ちよっ…やめて下さいラカンさん！」

「ほらアリカ、あーん。」

「あーん。」

「！！ウチも、ほら詠春はん、あーん。」

「ちよっ…何を対抗しようとして…ぐむ。」

「平和ですねえ…」

「そうじゃのう…」

「平和なのは良いこと。」

「そうだな、アスナちゃん。」

「ま、そうですね。」

半分宴会に近い形になっています。

バカップル×2とラカン、タカミチが中で大騒ぎ、私、アル、ゼクト、ガトウ、アスナは縁側に腰かけてます。

「私は酒は苦手ですけど、どうです？ 日本酒の味は。」

「うん？ まあまあだな。少し度が強いが。」

渋いおじ様が日本酒を飲むのは様になってますけどね。

「んゆ…」

アスナが私にもたれ掛かって来ました。

「もう眠い…」

「なら寝ても良いですよ。夜更かしは良くないですし。」

「分かった…」

膝枕をしてあげます。よほど眠かったのか、すぐに寝息が聞こえてきました。

「よっ…」

遮音用の結界を張りました。後ろで騒いでいるのが聞こえて途中で起きられても可哀想ですしね。

しばらく時間が経ちました。いや、月をぼんやりと見ていただけなので何分経ったのかは知りませんが。

と、結界に誰かが触れたようです。後ろを向くと、焦っている様子の詠春。

私は枕を出してアスナの頭の下に置いて、結界を狭めて外にでます。

「どうしました？」

「ああ、実はリョウメンスクナの封印が解かれてしまったんだ。出来れば再封印の手助けをして欲しいんだ。」

「リョウメンスクナって飛弾の大鬼神とか呼ばれてるやつですよね？ 何故京都に？」

「確か1600年ほど前に京都に封印されたらしい。何故かはよく覚えてないが…」

ま、これは気にしたら負けですし…

「良いですよ、手助けしましょう。」

「ありがたい。」

というわけでやって来ましたよ。ナギたちもやって来ましたけど、随分フラフラしてますね…酔ってるんですか？

「つーかでえな！こいつ！」

「おもしれえじゃねえか！」

いや、何が面白いのかよく分からないですよ？

「おっと…」

殴って来ましたが避けました。まだ封印が解かれて間もないのか、動きが鈍いですね。

「『雷の斧』！」

「ラカン・インパクト！」

ナギの打ち込んだ『雷の斧』で腕の一本が切れました。ってか斬れた腕が消滅ってどういうことでしょうね？

ラカン・インパクトで大きくふらついてますし…

「神鳴流決戦奥義！真・雷光剣！」

詠春の雷光剣でまた大きくふらつきました。うーん…私っているんでしょうか？

「再封印したいから動きを止めてくれ！」

「わかったぜ！」

「おうよ！」

とか言いながらボコボコにしてるのはどういことでしょうか。動きが止まってないですよ？

まあ良いですけど…バカですし。動き止めるだけならアレが一番でしょう。

「ナギ、ラカン、巻き込まれても知らないですよ！」

「ああ!？」

「何だって!？」

二人が吠えてますが、放っておいても大丈夫でしょう。

「リラ・カ・マジカ・ラ・エレメンタ！」契約に従い、我に従え、氷の女王、来れ、とこしえのやみ、えいえんのひょうが”！！」

「ちょっ!？」

「やべっ!？」

二人は詠唱を聞いて急いで範囲から脱出。そうでもしないと巻き込まれますし。

リョウメンスクナのいる範囲の空間を凍結させました。結果、とりあえず凍りましたが、まだ途中です。

「「おい！あぶねーじゃねーか！」」

「知りませんよ。動きを止めるのに最適な魔法を使っただけです。」

スクナのほうに向き直り、続きを再開。

”全てのものを、妙なる氷牢に、閉じよ”『こおるせかい』！

そのまま氷柱封印魔法。これでスクナの氷付けの完成です。

「これで良いですか？」

「ああ。あとは本山の陰陽師に任せるようになってるからな。」

文句を言う二人は拘束して、スキマで部屋に落としておきました。

私と詠春は普通に帰ります。

「なんじゃったんじゃ？」

「神の一柱の封印が解かれて暴れそうだったので、動きを封じて再封印しました。」

「神？」

「ええ。両面宿儺という鬼神で、日本だと様々な形で伝承されています。ただ、私が見た限りで言うところの鬼としての性質の強いものでしたが。」

「鬼としての性質の強いってのはどういうことじゃ？」

「えーっと…両面宿儺はある伝承では民からの略奪を楽しむ、とされていてまた別の伝承では民のために別な鬼を討った、ともされて

いた…筈です。今回は暴れてただけですが、明らかに私たちを攻撃してきたので。」

「そうか…」

え？変態^{アル}はどうしたのか、ですって？

出掛ける前に気絶させて縛ってそこら辺に放って起きましたよ。

く両面宿儺、フルボッコ?く（後書き）

やっぱり中途半端な気がする…

そろそろアンケートの締め切りが近づいて来ました。

＼ユキの原作破壊劇＼（前書き）

アンケート実施中です。

ユキの麻帆良での立場は：

- 1 教師
- 2 女子寮管理人
- 3 喫茶店などの店主

以上の3つから選んでください。

＼ユキの原作破壊劇＼

SIDEユキ

よう、零崎雪織だ。

ってか→のSIDE表記があるのかね？少し疑問に思えてきたぜ。

まあメタい発言はこの辺にしておこう。

京都でリョウメンスクナをボコボコにした後、『紅き翼』は解散になったぜ。んでもう何年か経ったわけだ。

詠春の子供：木之香も生まれたな。ってかマジに何年たってんだ？

ええと：今は西暦：1993年だと？つまりあのメンバー：ネギパーティーの大体が5歳になる年ってことか。

俺はアスナと旧世界と魔法世界を回ってるわけだが、定期的にクルトの手伝いをしている。メインは『完全なる世界』の残党狩りだ。

んで今は：どこだっけ？忘れたけどメガロのどっかにいる。

クルトから通信が来たと思ったら切羽詰まった声で「手伝ってください！」だからな。結構ヤバイ状況らしい。

アスナはクルトに預けて、俺一人で戦地に赴いた訳だ。クルトにロリコンの気はないから大丈夫：のはず。

空中から状況を見たところ、味方はいっぱい、上級悪魔：伯爵級の強さも感じる。こりゃ召喚主は捨て身で：

「ってオイオイオイオイ！なんでガキがいるんだよ！」

こんな場所に子供、近くには血まみれで倒れている：女性か？近くに魔法銃が二丁転がってるな。

俺は人は殺すが無関係の奴が巻き込まれるのは気に入らない。

待てよ？このタイミング：すでに6／1は過ぎている：まさか！

近くにいた子供：女の子が俺に声をかけてきた。

「おねえさん：おかあさんをたすけて！」

涙をボロボロとこぼしながら頼んでくる。

「ああ、助けるから安心しな。」

俺は精神的には男なんだがね：まあ見た目は女だし仕方ねえな。

手をあてて確認、まだ息はある。すぐさま生と死の境界を弄り、彼女が死なないようにする。

次にやることは普通は回復魔法の『治癒』なんだろうが、怪我が酷すぎる。それに加えて

「西洋魔法の回復魔法に対する無効化術式：」

思わず呟いてしまったが、言った通りだ。こんなのをかけれるのは伯爵級以上の悪魔だな。

境界弄って消しても良いが、さっきも言った通り怪我が酷すぎてアレだと治らない。よって

「陰陽術は専門外だが、仕方ねえか。」

正直アンチョコが欲しいくらいだが。

「えーっと…『氣吹戸大祓 高天原爾神留坐 神漏伎神漏彌命以
皇神等前爾白久 苦患吾友乎護惠比幸給閉止 我能生魂乎宇豆乃幣
帛爾 備奉事乎諸聞食』！」

原作で木之香が使った完全治癒魔法(?)。3分以内、『コチノヒ
オウギ』専用のアレだが、その辺は境界を弄りまくってどうにかし
た。

眩い光が放たれ、みるみる傷が癒えていく。

「う……………ん……………」

「おかあさん！」

「ゆう……………な……………」

「起きたか。」

「おねえさんありがとうございます！」

すぐにお礼を言う女の子。

「あなたは」

「『漆黒の死神』零崎雪織だ。いろいろ聞きたいことは有るだろう
が今は聞かん。」

言葉を遮って、結界を張る。

「なんで子供がいるのかとか俺が聞きたいぐらいだが、俺も依頼はこなさないといかんのでね。」

「はあ…」

「ここから出るな。何が起こっても壊れはしないし、そもそも他の奴は知覚すらできん。依頼が終わったら戻るから、それまで待っつけ。」

俺の予想が正しければ、彼女は原作では本来死んだ「明石夕子」、そして女の子はその娘の「明石裕奈」だろう。

何故裕奈がここにいいのかは分からないが、俺が何らかの形で介入して何かが起こったのだろう。

俺は結界から出て鎌を取りだし、悪魔狩りに向かった。

悪魔狩りはわりとすぐに終わった。

他の人たちの頑張りもあって、残っていた上級悪魔2体と伯爵級1体を殺して終了。

戻ってきて、状況を説明してもらうと…

明石一家で旅行に来ていた所、丁度止まっていた宿の近くで戦闘が始まった。

夕子さんは戦闘が出来るため呼び出され、参加。上手く立ち回り、順調に悪魔を撃破していった。

しかし明石教授（今は講師だが）の目を盗んで安全な場所から飛び出し、裕奈は夕子さんを探しだす。

運悪く伯爵級の悪魔に見つかり、殺されそうになっていた裕奈を夕子さんが庇い、負傷。なんとか魔法銃で頭を撃ち抜き、還したところで気絶。

ってな感じだ。後は俺が見つけて治療した、ってこった。

「んで、聞きたいことがあるんなら聞くが？」

「私には治癒魔法の阻害術式がかけられていたはず。どうやったんですか？」

「ん？ 陰陽術。それも最高レベルの治癒術を使ったんだ。」

「陰陽術ですか：いや、それ以前に何故私を助けたんですか？」

「依頼主はクルト・ゲーデル、依頼内容は援護と負傷者の治療。依頼されたからにはきっちりこなす。」

「理由はどうあれ、妻を治療してくれてありがとうございます。」

「そう何度も感謝の言葉を言われてもな……」

ふと気になったことが生まれた。原作では夕子さんが殉職したがゆえに祐奈は魔法関係から離れることになった。

「ところで、だ。娘さんはどうする気だ？ ショッキングな光景を見たから恐らくトラウマになるぞ。記憶を封印するのかどうか、決めた方が良い。」

「あなたは…どう考えているんですか？」

「俺は記憶の封印は基本的にしない。本人がよほど強く望まない限りは、だ。記憶はその人物を構成する重要なパーツだからな。」

「そうですか…」

「後は…仮に記憶を封印しても、おそらく俺の姿を見た時点で再び思い出す。」

「何故そんなことが言えるんですか？」

「記憶封印…これはハッキリってあんたら程度の魔法使いが使っても大した効果は無い。」

「どういうことですか？」

「あの魔法を使いこなせている魔法使いはほぼいない。恐ろしく緻密な魔力制御がいるからだ。そう簡単に記憶の封印が出来てたまるか。出来るのは俺と『紅き翼』の泉野雪、あとは造物主くらいのものだろう。」

「はあ…」

「つまりだ。不完全にかけられているのなら、俺みたいに目の前で母親を救ったような重要人物が現れたときに封印が外れるからだ。」

「なら、記憶消去はどうですか？」

「アレだけはダメだ。使うな。アレは記憶封印以上に精密な魔力制御がいる。はつきりいって使った後に人格が壊れる可能性の方が高い。下手したら人間関係を壊滅させる恐れがあるくらいだ。むしろ殺した方がいいってレベルになることもあり得る。」

顔を真っ青にする明石夫妻。

「まあ、一般に伝わってる記憶消去の魔法はその大体がただの記憶封印魔法だな。」

少しだけ顔色が戻った。

「ただ、これは俺が巻き込んだことだし、俺にも責任がある。俺に任せるんだったら、彼女が中学生になったら魔法の指導をしてやるつもりだ。」

「何故そのような事を？」

まあ、普通の反応だな。

「俺には義理の娘がいて、魔法を知っている。で、麻帆良に通わせるつもりだ。見た感じ大体あんたらの娘さんと同じくらいだし、面

倒な事態になってるのは俺にも責任がある。どうだ？」

明石夫妻はお互いに向き合い、頷く。

「では、それでお願いできますか？」

「了解した。これは頼みだが、魔法を教えるのは良いが、魔法生徒にはしないようにしてくれ。」

「別に構いませんが：どうしてですか？」

「夜の警備員なんかやって死んでもらったら後味が悪すぎる。ついでに言うと、変な正義思考を持たれて反発を買われるのも嫌だからな。良いか？」

「ええ：分かりました。」

「んじゃ、俺は失礼するぜ。ま、散々ボコボコにしてやったから襲撃は無いだろうし、ゆっくり観光でも楽しみな。じゃあな。」

手を振りつつ転移魔法。まさか裕奈と接点を持つとはな：

メガロに戻ると、疲労した様子のクルト発見。

「どうした？クルト？」

「いえ：アスナちゃんが稽古をつけてくれていうから軽く相手を
してあげたんですが：」

「あー…」

「クルトは結構強かったよ。でも物足りない。」

「ちょっとアスナは強くしすぎたかもしれん。」

「いや、かも、じゃなくて強くし過ぎですよ…僕何回か死ぬかと思
いましたよ?」

「うーむ…神鳴流の技は教えてないんだがな…」

「身体能力が高過ぎるんですよ! 咸卦法使って打ち込んで来ますし、
アーティファクトは意味がわかりませんし…」

「あれな。」

「ふふん。」

上機嫌なアスナ。つかクルトも結構な実力者なんだがなあ…

「まあ良いだろ。じゃ、クルト。また連絡くれよ。」

「ええ、それではまた。」

アスナと共に、次はどこへ行こうか。

＼ユキの原作破壊劇＼（後書き）

ゆるやかな魔改造フラグですよ。

＼ユキの原作破壊劇 part 2＼（前書き）

アンケートはもうすぐ締め切ります。具体的な日時をいうと12／3 19..00で締切です。

ユキの麻帆良での立場は：

1 教師

2 女子寮管理人

3 喫茶店などの店主

以上の3つから1つ選んでください。

＼ユキの原作破壊劇 part 2＼

SIDE ユキ

どうも、泉野雪です。

今は夕子さん救出から1年と数ヶ月、1995年1月です。

その間は特に何も無し、世界中を巡っていましたがね。

今の居場所はトルコのイスタンブールです。

「つたく…こんなことになるんだったらクルトに予定を聞いておく
んでしたね…」

アスナが追い付けるレベルで急ぎます。今何をしてるかですって？
悪魔を切り払っているんですよ。

『完全なる世界』のゲート襲撃です。

つーか嫌な予感しかないんですよ。何故かって？ここに来るまでに合流した味方は『悠久の風』。勘が良い人なら分かったでしょう。
ガトウと連絡はとれていたので心配して無かったんですが、ここに来て修正力が働いた可能性もあり得ます。

人払いが済んでいるとはいえ、奴等もやることがえげつないですね。
大量の悪魔を召喚してるわけですから。低級悪魔の大量召喚、数の
暴力ですよ。

「えい！」

アスナも横から襲いかかってくる低級悪魔を切り捨てます。『ハマノツルギ』効果で一撃でも当てれば一発で還せます。もともと、そうでなくても真っ二つになってるんで還るんですけど。

「神鳴流奥義！斬魔剣 弐の太刀！」

今のアスナですよ？詠春から許可もらいましたんで神鳴流は教えませんでした。つか物覚えが良すぎです。魔法球使ったとはいえ、半年で覚えてしまいました…他の人泣きますよ？

「ユキ！こっちの方が多い！」

突然アスナに呼び止められました。急いで近づくと狭めの道に悪魔が溢れています。もともと、こちらからみて後ろを向いていますけど…

「味方は向こうにいるでしょうから…突撃しますよ！」

「分かった！」

剣に気を纏わせ走る。使うのは広範囲攻撃の奥義

「「神鳴流決戦奥義！真・雷光剣！！」」

広範囲に気によって出来た雷が炸裂し、大量の悪魔が吹き飛ぶ。

それに気づいた悪魔が一斉にこちらを向く。っていうかどれだけ集まってるんですかね？

一気に走り込み、回りを大量の悪魔に囲まれた状態にして

「神鳴流奥義！百烈桜花斬！！」

一気に切り捨てる。こうした方が早く倒せますし。

切り捨てたところをアスナが一気に走っていきました。

「百花繚乱！」

直線上に気を放ち、敵を吹き飛ばしつつ。

私が悪魔を殲滅したところで、アスナから念話が繋がりました。

（急いでこっちに来て！ガトウが大変！）

こちらの返事も待たずに切りました。結構マズイことになってますね…

急いでアスナの方に向かいます。

到着したところには、腹から大量の血を流すガトウと慌てているアスナとタカミチ。

「雪…か…？」

「ユキ！」

「雪さん！」

「落ち着いて。」

そう言って手を当てる。生と死の境界を弄り、『治癒』をかける。

「全く：貴方のような実力者が何をしてるんですか。」

「スマン：不意をつかれてしまった。」

立ち上がろうとするが、上手くいかずに座り込む。

「血が足りてないですから、今動くのは諦めて下さい。」

「良かったです：ありがとうございます！」

「感謝の言葉は要らないですよ。私たちは仲間でしょう？」

「それでも、です！雪さんが来なかったら師匠は死んでもおかしくなかったんですから！」

「はいはい…」

そしてタカミチの顔を見て思うことが1つ。

「それにしても：タカミチ君。」

「何ですか？」

「老けたね。」

「私も思った。」

グサツと何かが刺さった、そんな音がなった気がしました。

「アハハ…そんな…」

「ダイオラ魔法球でも使いまくったんじゃないの？」

「ガトウと同一年くらいに見える。」

さらに何かが突き刺さる音が聞こえた気がしました。

「まあそんなのはほっというて、アスナ。」

「分かった。」

剣を地面に突き立てるアスナ。すると半径3mほどの半球状の結界が張られます。

「私はこれから残りの悪魔を潰しますんで、3人は待っててください。」

何か文句を言われる前に移動しました。さて、悪魔狩りです。

悪魔狩りを終えて、『悠久の風』に感謝されて、その場で解散。

とあるホテルの一室で、私はガトウとタカミチと話をします。アスナはすでに寝てますよ。

「それで、どうしたんだ？」

私から話があるって言いましたからね。

「アスナの成長阻害が無くなったようなんです。それで、小学校に通わせようと思ってるんですが…」

「小学校に？」

「ええ。麻帆良小学校に入れようと考えているんです。」

「何故ですか？アスナちゃんは頭脳明晰、はっきり言って器じゃ無い気がします…」

タカミチの疑問は分からなくは無いですね。

「そうではあるんですがね。はっきり言いますが、アスナには同年代の『友人』がいないんです。」

「「！！」」

「で、友人関係を築くためにも通わせたいんですが…どうでしょう？」

「いいんじゃないか？」

「そうですね。僕もそう思いますよ。」

「それなら良いんです。で、これはお願い何ですが…」

私の出したお願い。二人は驚いた顔をしましたが、納得してくれました。

翌日、朝。

「じゃあ、頼みましたね。」

「ええ、任せてください。」

「ユキと別れるのは寂しいけど、待ってるからね。」

私のお願い。それは来年度からアスナを入学させること、魔法生徒としては通わせないということ、もう1つ、アスナと一時的に離れること。

しばらく一人で旅をしたいという理由にしておきました。

本当の理由は、私とずっと一緒にいると原作から性格が大きく解離し、展開が読めなくなる可能性があるからです。こういうとアレですが、実際『友人』を作って欲しいんですよ？

まあアスナが中学生になったら麻帆良に行くつもりですけどね。明石夫妻との約束もありますし。

おっと忘れてました。アスナの名前は「泉野明日菜」になりましたよ。神楽坂では無いですよ。

私は手を振って離れます。

「待ってるからねー！」

アスナには珍しく大声で宣言。ちゃんと戻らないと、ね。

さて、後6年、どこで何をしましょうか。

＼ユキの麻帆良入りまであと少し＼（前書き）

アンケートの締切は12／3 19..00ですよ。

ユキの麻帆良での立場は：

- 1 教師
 - 2 女子寮管理人
 - 3 喫茶店などの店主
- 以上の3つから1つ選んでください。

今回は埋め合わせの回：ゆえに短いです。すみません。

＼ユキの麻帆良入りまであと少し＼

SIDE ユキ

どうも、泉野雪です。

アスナと離れて早6年、様々な事がありました。特にこれといったことは起きませんでした。

いや、ネギの故郷の襲撃があったはずじゃ無いのか、ですって？

アレには私はノータッチです。というか変に介入してややこしくなっても嫌ですし…

で、今どこにいるのかと言うと、京都の近衛家のところです。

いやはや、やる事が無くて暇なのですよ。世界中を転々として、賞金稼ぎもしてはいるんですけどね。

「はぁ～暇です。」

「お前がだれているのは珍しいな。」

「良いじゃないですか。アスナと一時的に離れて起きたかったんですよ。詠春の気持ちを感じてみようかと…いや、木乃葉さんの気持ちで行った方が正確ですかね？」

「まあ…そうやろうなあ。詠春はんはあくまで男やしなあ。」

ちなみに木乃葉さんは木乃香を生んだ後体調が優れず、一時危篤状態になりましたが私が治療しました。

やっぱり大きな魔力を持つ子を産むと危ないようです。

「しかしなぜ離れようなんて思ったんだ？ お前が固執しているとは感じてなかったが…」

「血を見せたくなかった、感じさせたく無かった、そんな感覚ですね。私の仕事を休めば良かったんでしょうが、それは嫌でしたんで」

「詠春はんとウチが木乃香に魔法に関わって欲しゅうない、それとおんなじ気持ちってことかいな？」

「そうですね。いずれは関わることになるでしょうが、それでも一時的にでもいいから離してあげたい。そんな気持ちですよ。」

ですが、ただの偽善でしか無いんですよ、それは。

一人の親としてはその判断も間違いではないでしょう。が、『大戦の英雄』としては恐ろしく不適切な判断ですよ、詠春。

私なら早くから陰陽術を覚えさせて、それで暮らさせますね。魔法に関わっていったって幸せな生活は出来るんですから。

原に私はアスナには色々覚えさせていますし。まあ『ハマノツルギ』を地面に突き刺して籠城すれば大抵の魔法使いには負けないですよ？

だって『無効化』結界ですから。一発で許容量を越えれば割れますけど、一発で割らないと全部ペアになるんです。あくまで地面に突き刺し続けた場合ですが。

地面に突き立てて張った場合、そのあと剣で攻撃出来ますが、許容量まで無効化した分が蓄積されるようで、そのうち割れます。

許容量はナギの『千の雷』で3回分といったところ。

反射結界の場合、地面に突き刺し続けても地面に突き立てて張った場合でも変わりません。

ただ、強度は無効化に比べてかなり落ちます。ナギの『雷の暴風』がギリギリ反射出来るレベルでした。十分すぎますね。

「うーあー」

とまあグダグダ説明はしたんですが。何より：

「地球外言語話しても俺には分からんぞ。」

「暇だー」

「つて言われてもなあ…」

「やる事が無いっていうのはええことやないですか。」

「まあそうですね。そういう風に考えることにします。どのみちあと数ヵ月したら忙しくなるでしょうし。」

麻帆良に行くまであと数ヵ月。それまで近衛家でのんびりさせてもらいますかねえ…

アスナとの再開は楽しみです。

＼ユキの麻帆良入りまであと少し（後書き）

時間がぶっ飛びました。

ユキはネギ関連のイベントは総スルー。

理由は本文に書いた通り、変に介入してややこしくなるのが嫌だからです。

くユキの麻帆良入りく（前書き）

投票の結果、ユキは教師になりました！

質問…『完全なる世界』はかなり処刑したからネギの村の襲撃そのものが無いのでは？

回答…世界の修正力、ということでお願ひします。悪魔を召喚した人物は別に現れた、処刑されなかった、等で。

＼ユキの麻帆良入り＼

SIDEユキ

どうも、泉野雪です。

ふとあることに気がついたんですよ。私が麻帆良に行くとして、あまり早くから行くとどうなるのか？って。

最悪私がいるがゆえにアスナの友人関係が狂うんじゃないか？と思います。

いや、すでに狂っていてもおかしくないだろと言われればそれまでなんですが…

と言うわけで麻帆良に来るのをおよそ1ヶ月ほど送らせて、今はゴールデンウィーク。そして場所は麻帆良学園の学園長室前。

コンコン、とノックをする。良いぞ、と返事が来たのでドアを開ける。

目にはいるのは学園長の長い後頭部、ぬらりひよんでしょ、アレ。

「はじめまして、『属性を統べる者』、泉野雪殿じゃな？」

「ええ、その通りです。麻帆良学園長、近衛近右衛門さん。まずはお礼を。アスナをこの学園に受け入れてくれたこと、感謝しています。」

「構わんよ。タカミチ君から聞くに、ガトウ君の命を救ってくれた

そうじゃないか。」

「それでもです。それに依頼していた通り、魔法生徒でも無いみたいですし。それだけでは足りないかと思いついて、学園長からなにかお願いがあるのならお聞きしますが…?」

学園長に利用される気はさらさら無いですけどね。

「そうじゃのう…では、1-Aの担任をしてくれんか?」

「担任ですか?この時期に担任を変えたとすると混乱を招くのでは?」

「普通のクラスならのう。そのクラスの担任はタカミチ君、副担はガトウ君なんじゃ。」

「はて…『悠久の風』に所属しているタカミチ君が担任ですか…?その上同じ立場のガトウさんが副担…つまり二人とも『出張』として活動しているからあまりこちらにいられないから問題無いと?」

「その通りじゃ。」

「ふむ…」

「ついでに言えばアスナ君はそのクラスじゃが…どうじゃ?」

「うーん…分かりました。受けましょう。」

「ありがたい。それで次じゃが、魔法関係者にお主の事を伝えてもよいか?」

「どうせ名前で分かるでしょうし、構いませんよ。」

「ほう、それは良かった。」

「ただし！」

ここで言うことはある。

「学園の警備をしろとかは言わないで下さいよ？」

「む…それは何故じゃ？」

「はっきり言いますが、とある事情のせいで私は『正義の魔法使い』が大嫌いなんです。もし警備なんかして誰かが私の行動に口を挟んだらうっかり殺しそうになります。」

「むう…じゃが」

「ああ、ついでに言っておきますがアスナも『正義の魔法使い』は大嫌いなんですよ？彼女と私は一緒に行動してましたし。」

コレははっきり言っておく。正直アイツラの戯言に付き合う気は全く無い。

「そ、そうか…顔合わせ位はいいかの？」

「それくらいなら。ただ、それはもう少し待ってくれますか？」

「構わんが…どのくらいじゃ？」

「ゴールデンウィーク明けに私が担任であることを説明したあとで

すね。」

「わかったぞい。」

「それでは、失礼しますね。」

そういつて学園長室を後にする。後数日かあ…楽しみです。

アレから数日、ゴールデンウィークが明けた初日。

「それにしてもまたふけた？タカミチ君。」

「ハハ…言わないで下さいよ…気にしてるんですから…」

今は廊下を歩いています。1—Aに向かっています。

「そういえばガトウは？見なかったけど。」

「師匠は『悠久の風』の活動です。今どこにいるのかは知りませんが。」

「そ。」

「そんな興味が失せたって顔されても…今日の夕方には帰ってくるそうですよ？顔合わせもあるでしょう？」

「そういえば今日の夜でしたね…ああ面倒くさい。」

「面倒って雪さん…あ、つきましたよ。」

グダグダ話していると到着。そして一言。

「ねえタカミチ、これって引っ掛かった方が良いんですか？」

「あ…そう言えば事情は説明したけど性別とか説明してなかったです…すみません。」

「まあ良いです。この程度の罠たち、粉々にしてやります。」

そういつてドアを開ける。

まず降ってきた黒板消しは普通にキャッチ、ワntenポ遅れて降ってきたバケツもそのままキャッチし、床に置く。

歩いて紐を踏んで、飛んできた吸盤付きの矢は手でキャッチ、最後に降ってきた金だらいは

「ちえいさー！」

回転蹴りで後ろまで吹き飛ばす。ガアン！という音を立てて壁に激突、落下。

啞然とするクラス、タカミチが入ってきて話し出す。

「えーと、罠はひとまず置いておいて、こちらが今日から皆の担任

になる泉野雪先生だよ。」

「さて、紹介してもらったけど自己紹介。担任になった泉野雪よ。よろしくね。」

『き……』

き？

『きれーーーーーい！』

綺麗、ですか。一瞬にして沸き上がるクラス。

ちらりと見て反応したのはエヴァ、刹那、マナ、超の4人。

「はいはい！皆の質問は麻帆良報道部の私、朝倉和美が代表しておこないまーす！」

横目でタカミチを見る。どうせ次の授業はタカミチが担当だし、別にいいって感じですね。

「まず、泉野って明日菜と同じ名字だけど何か関係はあるんですか？」

「そうねえ…アスナを見てみたら？」

「どういう…って、え！？アスナ！？ちょ、なんで泣いてるの！？」

「ユキ…会いたかった」

アスナが飛びかかってきたので受け止める。

「ごめんね、長いことほったらかしにして。」

「別に良いわよ…本当に戻ってきてくれたから…」

頭をゆっくりと撫でてあげる。

「え……と……これは？」

「アスナは義理の娘。もう6年以上会ってなかったけどね。ほら、席に戻って。」

「うん…ありがと…」

ゆっくりと席に戻るアスナ。

「ええと、気を取り直して！ずばり、好みの男性のタイプは！？」

「うーん…あまり気にしたこと無いから分かんないわね。」

「ふうむ…では趣味は？」

「読書と料理かしら。お菓子作りも好きよ。」

「なるほど…では担当の教科はなんでしょう？」

「数学よ。もっとも、他の教科も教えられるから質問に来てもいいわ。」

「ふむふむ：男性だったら年齢とかきけるんだけどなあ：（ボソッ）」

ぶつぶつ言ってるけど内容聞こえましたよ？

「あ、年齢は詳しくは教えないけどタカミチより年上よ？」

『うそっ！？』

「まさかの衝撃事実：その若々しい見た目をどうやって維持してるんでしょうか！？」

「バランスの良い食事、適度な運動と睡眠、これだけよ。」

まあ不老なんですけどね。

その後は普通に授業。授業の終わりを開けておいてくれ、とタカミチにはあらかじめいっておいたので連絡。

「さて、歓迎会をしたいんなら明日にしてくれる？出来れば久しぶりにあった義理の娘とゆっくり話したいからね。」

さすがにこれに異を唱える人はいませんでしたよ。

その後は普通に私も授業をこなし、仕事も終わらせました。

で、今はコーヒーショップ。アスナと話をするためです。

「ふう…質問攻めにあっちゃったわ。」

そう言いながらコーヒーとカフェオレを持ってくるアスナ。私がコーヒーです。ブラックですよ？

「悪く思ってますよ。それは。」

「ホントよ。かなり疲れたんだからね？」

「ふふ…まあクラスメイトとは仲良くやってるみたいね。」

「ん、まあね。ユキは『完全なる世界』の残党狩りでもしてたんですよ？」

「そうね…叩いても叩いても減らないんで面倒になってきたけど。」

「それは…仕方ないわね。」

「ま、私のことばかり話しても仕方ないですね。クラスメイトについて報告してくれます？」

「エヴァンジェリン…」

「『闇の福音』のエヴァンジェリンね。正直見て驚いたけど…」

「タカミチに事情を聞いたらナギに『登校地獄』って呪いをかけられたらしいわ。ただ、適当にかけたのかもう10年以上中学生をや

ってるみたい。」

「としたら…それは解呪ね。許容量越えた魔力流せば呪いは壊れるから…他には？」

「そうねえ…長谷川千雨ちゃん。」

「何かあるの？」

「大有りね。彼女は認識阻害が効いてないみたい。クズ（正義の魔法使い）は気付いているかどうか知らないけど、そのうち壊れる可能性があるわ。」

「うーん…今度面談してこちら（魔法側）に引き込もうかしら？」

「出来ればそうしてあげて。もちろん千雨ちゃんの意味を確認してよ？」

「分かってますよ。他には？」

「近衛木乃香の護衛に桜咲刹那がついてる、っていうのは？」

「詠春から聞きましたよ。ただ、今日見ただけでも…はあ…」

「そうなのよね…アレじゃ護衛じゃなくてストーカーよね。どうする？」

「うーん…アレが護衛として為ってないって自覚させるのが一番だろうけど中々機会が無さそうなのよね。」

「時が解決するのを待つってこと？」

「そう。木乃香ちゃんには悪いけど、時間がかかりそうね。」

「そっか。ま、仕方ないか…」

「あ、そうそう。明石祐奈ちゃんには魔法を教えるつもりよ。」

「へ？どうして？」

「いや、簡単にいうと雪織がへまをやらかしたんだけど…魔法世界で親が死にかけてたのを助けたのよ。」

「なるほどね。自分が巻き込んだことだから、ってやつね？」

「そ。他に何かある？」

「うーん…無いわね。」

「じゃあ今からエヴァンジェリンの呪い解きに行くけど、どうする？」

「行こうかしら…でも今日顔合わせでしょ？何でそんなことするの？」

「ん…愚弟がやったことならすぐにでもやらないと、ね。アスナは顔合わせには来る？」

睡眠薬をちらつかせる。

「クズ（正義の魔法使い）の実力把握にはなるか…行くわ。」

睡眠薬を受けとるアスナ。

「じゃ、エヴァンジェリンのところに行きましようか。」

「ええ。」

私はアスナと二人、エヴァの家に向かいました。

く解説、顔合わせく

SIDEユキ

歩くこと数分、エヴァの家が見えてきました。

「なんというか、意外ね。」

「そう？ シックな感じのログハウスじゃない。」

「あんまりエヴァちゃんのイメージに合わない、ってことよ。」

とりあえずノック。呼び鈴が無いのは何故？ 気にしたら負けですね。

「はい…」

扉を開けて出てきたのは絡繰茶々丸さん。そう言えばエヴァの従者でしたね。

「泉野先生に明日菜さんでしたか。何かご用ですか？」

「ふふ：『闇の福音』エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルさんに用事があったね。良いかしら？」

すると茶々丸さんの目がスツと細くなる。

「マスターに敵対するつもりなら排除させていただきます。」

「まさか。エヴァちゃんにとって良い話を持ってきてあげたのよ？」

「それは…」

「どういうことだ？ 泉野雪に泉野明日菜？」

家の奥からゆっくりと歩いてくるエヴァ。

「敵対はしないから家に入れてくれる？ 立ち話は嫌だし。」

「ふん…良いだろう。」

家の中にて。

「で、何が目的なんだ？」

単刀直入に聞いてきた。シンプルな方が良いですし。

「『登校地獄』の解説、と言ったら？」

「なっ…出来るのか！？ というかそもそも何故だ！？」

「エヴァちゃんってもう何年も中学生やってるんでしょ？ ナギのせいで。本来ならとくに外れてるから解いてあげるってことよ。」

アスナが答えると顔をしかめた。

「そもそもお前が何故そんなことを知っている？」

「馬鹿にしてる？ 私はユキと幼い頃から行動してたのよ。だから魔法は知ってる。タカミチに聞いたら簡単に答えてくれたわ。」

「ま、そんな感じよ。で、どうする？ 解いて欲しい？」

「それは…出来れば解いて欲しいが…」

「何が目的なんだ？ ってこと？」

「ああ。」

ま、普通なら気になりますよね。

「まず、私に敵対しないこと、それから何人か弟子をとるつもりだからそれに出来るだけ協力すること。主にこの二つね。」

「1つ目は分かるが…2つ目は何故だ？ お前だけで十分だろう？」

「うーん…実践訓練をやるときの相手が欲しい、ってことよ。私だけだとしても偏りが出るからね。」

「分かった。それで良いだろう。」

「契約成立ね。じゃ、ちょっと頭を触るわよ。」

「んっ…」

エヴァの頭に手を置いて、軽く魔力を流す。

スキャンです。

むう…適当にかけすぎですね。呪いが無茶苦茶…
呪いの仕組みを逆算…完了。

「んじゃ、ドーン！」

「げふう！？」

「マスター！？」

解呪用魔力弾をぶつけました。

「き、貴様…」

「解けているでしょ？」

「何？」

自分の体をペタペタと触るエヴァ。

「フ、フハハハハ！解けた、解けたぞ！これで私も自由だ！」

そして高笑いする金髪少女。

「はいはい…高笑いは良いけど、魔力は半分程度まで押さえられてるわよ。」

「何だと！？」

「学園結界そのものに魔物に対する力の封印作用があるみたいよ？」

こればかりは仕方ないわよ？」

「フン…学園の外に出れば問題無いのだろう？そのくらい構わん。」

「あ、これは教師として言うけど、学校には来てよ？不登校とか面倒だから。」

「さすがにいきなり来なくなったらクラスのメンバーが騒ぐからね。」

「うぐ…仕方あるまい。」

その後はうだうだと雑談をして、アスナは寮に、私は自宅に戻りました。

深夜、私はアスナと合流して、世界樹広場に向かいます。

「っていうか深夜に集合ってどうなのかしら？」

「それはお肌の手入的な意味ですか？」

「そうよ。なんだってこんな時間にやるんだか…まあ一般人に見られないように、っていう理由なのは分かるけどさ。」

「まあ仕方ないですよ…っと見えてきましたね。」

大人数の魔法先生と魔法生徒。いやはや、壮観ですね。

「ふお…ちようど来よったわい」

学園長が気付いたようですね。

注目も集まったところで、始めますか。

「どうも、警備するつもりは一切ありません、泉野雪です。」

「同じく警備する気0の泉野明日菜よ。」

「ふお!？」

「どういうことだ!警備するつもりが無いとは!」

「あなたは…ガンドルフィーニ先生ですか。そのままの意味ですよ?学園の警備を手伝うつもりは無いと。」

「まさか『英雄』だから学園の警備を手伝ってくれるとも思ってたの?だとしたらアンタは一度入院したほうが良いわよ?」

「なっ…!」

「クク…ハハハハハハ!面白い!さすがに私の封印を解いただけある!」

高笑いと共にエヴァ登場、飛んできましたよ。

「なんだと!？」

「おや、何か不都合でも？」

「君は彼女が誰か分かっているのか！」

「ええ分かってますよ。『闇の福音』でしょう？」

「だったら…！」

「何年も不正に封じられていた一人の吸血鬼の封印を解いた。それだけのことですが？」

「なっ…しかし彼女は『悪の魔法使い』だぞ!？」

「『悪』って何？」

「は？」

「自己防衛のためにやむなく犯した殺人と、自分の魔法の実力を知るための殺人。どちらが悪？」

「それは…後者だろう。」

「そ、だったらナギ・スプリングフィールドは悪でエヴァンジェリン・A・K・マクダウェルは善ね。だってそれが事実だもの。」

「な…しかし彼女は真祖の吸血鬼で…」

「種族がそうってだけね。それがどうかした？人並み外れた力と魔力、そして生命力を持つだけでしょ？」

「く…」

おやおや、この程度で黙りますか。

「なら何故明日菜君は魔法生徒ではないんだ！？魔法のことを知っているんだろう！？」

標的変更ねえ…

「私が頼んだんですよ。そうするように。」

「何故だ！？」

「アンタらを殺しそうになるから。」

アスナがガンドルフィーニにむけて殺気を放っているみたいですね…顔が青くなってますよ？

「私は『正義の魔法使い』が嫌いな。死ぬほどね。何故か知りた
い？」

私をみるアスナ。ま、良いでしょう。

「私、泉野雪。1つの顔は『属性を統べる者』。」

突然話し出した私に、全員が注目する。私は服装と髪の色を変化さ

せ、大鎌を取り出す。それと同時に、人格を入れ換える。

「もう1つの顔は俺、『漆黒の死神』、零崎雪織だ。」

おや？ 啞然としてるな。ちなみに俺は殺し方が残虐だったって理由から『正義の魔法使い』には疎まれているからな。

「ユキオリは賞金も何もかかっていない。ただ殺し方が残虐だ、それだけの理由で『正義の魔法使い』どもに命を狙われた。もつとも、全員殺さずに退却させてたけどね。私はユキオリとも一緒に行動していたから。」

ふん。あんな光景みれば誰だって嫌いになるわな。

「それくらいにしてくれんかの：」

やっところさ復帰した学園長が発言。

「まあ良いぜ。ただ攻撃されるのは嫌だから、実力差をはっきりさせたいと思うんだが？」

「ふむ：分かった。良いじゃろう。誰かおらんかの？」

その言葉に反応して出てきたのは刀子、グラサン、ガンドルフイーニ、高音・D・グッドマンの四人。

「んじやお前らはアスナの相手だ。いいな？」

「な：4対1ですわよ！？」

「いくらなんでもこれは…」

驚く四人のうち、高音と刀子が言う。が、

「悪いがこのくらいにさせてもらう。アスナ、いけるか？」

「ちゃんと訓練はしてたから、多分いけるわよ。」

ま、このくらいはこなしてもらわんとな。さて、

「タカミチ！ガトウ！お前らが俺の相手だ。」

「雪織は勘弁してえな…」

「僕も勝てる気がしないので遠慮したいんですけどね…」

諦めた顔で二人が出てくる。手加減はするつもりだがな。

「まずはアスナの方からだな。学園長、いいな？」

「仕方ないのう…合図はするぞい。頼むから殺しは無しにしてくれんか？」

「そのくらいは良いわよ。ただ、手足がちぎれても文句は言わないでよ。」

「その程度俺が治癒してやる。だから本気でやりな。」

「分かったわ…『来れ』。」

お？『ハマノツルギ』を使うか。

「では…始め！」

学園長の合図。さ、模擬戦か。どうなるかな？

ゝ解呪、顔合わせゝ（後書き）

なんか急展開？な気がする…

次回は模擬戦です：戦闘になるかどうかは別として。

〈模擬戦 アスナ対4人〉

SIDE アスナ

「では…始め！」

「咸卦法」

学園長の開始の合図と同時に咸卦法を発動させる。って…驚いた表情？ここが戦場なら死んでるわよ？

指摘するのも面倒だけど、話そうかしら。私は目の前の地面に向けて斬岩剣を放つ。それは見事に地面を抉り、轟音を立てる。

「動揺してる暇があるの？私がその気ならアンタたち全員死んでるわよ？」

「『影よ』！」

その言葉で始めに我に帰ったのは金髪の女。これは…影魔法の使い魔召喚。珍しいじゃない。

直後に復帰したグラサンは風の『魔法の射手』。無詠唱だし魔法使いとしてそれなりかしら？

「『無極而太極斬』！」

ま、食らう理由も無いし、それらを全てかき消す。

『なっ！？』

ホント、戦闘の「せ」の字も知らないのかしら？ いちいち驚くとか。
瞬動で金髪のところまで一気に移動し、首に峰打ち。

ドサッ

意識を失った金髪はその場に倒れこむ。

「！！ディグ・ディル・ディリック…」

「やらせると思う？」

「グフッ！」

瞬動、グラサンを掌底アップで打ち上げる。

腹這いに打ち上がったグラサンのところに跳び上がって移動、何回か蹴りを入れて虚空瞬動、踵落として勢いを殺す。

ボキッ

あ、なんか嫌な音聞こえた。背骨折れたかも。

落下し出したグラサンの頭を両足で挟み、地面との距離を測って後方回転、そのまま叩きつける。

ズドン！

「浮雲・桜散華！？」

「正解。それにしてももう二人ダウン。弱すぎよ？」

残った女の方は神鳴流を知ってるのね。まあどうでも良いけど。

「っと危ない。」

今のは魔力弾？みればガングロが銃を構えてるわね。実際のところ効かないんだけどね。

「君のことを甘く見ていたようだ…少しは本気でいかせてもらおう！」

そう言って魔法銃を乱れ打ちしてくるガングロ。でも馬鹿じゃない？女はどうみても前衛、だったら後ろで強力な魔法の準備でもしとくべきよね。

ってか弾密度薄いし。このくらい余裕よ。適当に避けつつ咸卦法を解いて軽く斬空閃を放ってみる。が、障壁に阻まれる。

咸卦法解いたのは神鳴流を使うためよ。後でユキに聞いてみようかしら…咸卦法のまま神鳴流使えないか？って。

弱冠安心した表情になったけど、甘すぎよ。すぐに斬魔剣・弐の太刀を放つ。

ポトッ

音を立てて右腕が落ちる。何が起こったのか認識出来ていない内に、左足も斬り落とす。当然バランスが取れなくなったガングロは倒れる。

悲鳴が出ない？ああ、多分ショックで気絶したのね。

「な…な…」

最後に残ったのは女、おそらく神鳴流剣士。

「なんで神鳴流が使えるかって？今はどうでも良いでしょ。」

「クッ…神鳴流奥義！雷光剣！」

チョイス間違えてるわよ。たしかにそれは威力は大きいけど、隙も大きいよ。

普通に瞬動で後ろに回り込み、首に峰打ち。さすがに女性だし、傷がつくのは嫌でしょ？仮にも模擬戦なのに、ね。

学園長を見る。が、啞然として、物も言えそうにない。

「決着はついたわよ。どうしても良いけど男二人はさっさと治療した方が良いわよ？」

「う、うむ！急いで治療を！」

「『治癒』」

学園長が指示を出したところで、雪織が治癒魔法を発動。

「どうだった？」

「中々良かったぜ。体術も剣術も。しっかり修行してたんだな。」

「当たり前よ。」

「断面が綺麗だからガングロの治療もラクだ。詠春にも劣らないだろうな。」

「そう？それは嬉しいわね。」

剣士として一流って事だしね。

「むむ：アスナ君がこれほどまでに強いとはの…」

「油断しすぎなのよ。そもそも連携も何も出来てないし。模擬戦だからって気持ちでもあったんじゃないの？」

「やはり警備に参加して…」

「嫌よ。私は自分に降りかかる火の粉を払うだけ。出来るなら友人の分も払う。けど、この学園そのものを警備する気は無いわ。」

「むぐ…」

「だってこの学園広すぎるんだもの。まあ私の気分によっては女子寮の近くによってきた侵入者を潰すことはするかもね。」

ピクリと反応したのは桜咲刹那か：ちょうどいいわ。説教してあげよ。

「そうねえ：近衛木乃香の護衛をしていると勘違い（・・・）している桜咲刹那みたいな事をする気は無いって言ってるのよ。」

「なっ…」

「まさか学園の警備をすることで一個人の安全が守れるとも思っ

てたの？いつもいつもストーカーのようにつけてるだけで護衛が務まるとも？だとしたら相当馬鹿ね。」

「貴様…っ！」

「ほらこの通り。」

瞬動で首に剣を突き立てる。

「大した実力も持っていないくせに離れた場所から護衛出来ると思ってたの？私の接近も気付けなかったアンタが？」

「クッ…」

「離れた場所から見守るような護衛ってのはたしかにいるわ。でもね、大統領のSPとか見れば分かるだろうけど、それって近くで護衛する人物がいて始めて成立するのよ？」

あら、固まっちゃったわね。その程度も理解出来てなかったのかしら？

「ついでに言うなら元親友のアンタが木乃香に対してよそよそしい態度をとってるからって木乃香は悲しんでるわよ？護衛対象の精神まで蔑ろにしてるのに護衛を名乗るなんて笑わせるわね。」

「っ……貴様に何が分かる！」

「分からないわよ。私が言ったのはただの一般論。」

「なら！」

「ま、過去に護衛の失敗でもしてもっと修行しなければ、とかで躍起になったりしたんでしょ。『木乃香の考えを全部無視して』。ただそれって護衛として失格じゃない?」

凶星だったのか、口を閉じた。

「ああ、ついでに言う成績を上げることがオススメするわよ。木乃香が高校に行くときにアンタが入れない、とか高校で落第して木乃香と同学年になれない、とかなくてもっと護衛が出来なくなっても良いんなら構わないけど。」

今度は顔が真っ青になったわね。

「ハハ、傑作だな。ただ成績については雪が言いたかったらしいぜ?」

「ゴメンゴメン。」

ま、私はこの辺で引くとしましょ。

「ただ今アスナが言ったことは真実だ。四六時中側にいるってのも変だが、お前は木乃香から離れてる時間の方が多い。はっきり言ってプロから見ればお前は護衛として機能してないぜ?」

あらら、また固まっちゃって。ダメダメじゃないの。

「現に今…」

「お嬢様!?!」

トサツと木乃香が落ちてきた。何時の間に座標を確認したのかしら？

「こうやって拐えるんだからな。」

「ねえ、たしかにユキは寮に来たけどどうやったの？」

「ん？ 木乃香は魔力がアホみたいに多いからな。寮についた時点で座標の計算をやってたぜ？ かなり苦労したかな。」

スキマに木乃香を落とした…戻したのね。

「まあ俺は例外だが…実際今誰かが来て寮から拐うことも出来るかな。」

「一応私が結界張ってるからそこまで酷くはならないと思うけど…」
あ、また真っ青になってる。ま、これで護衛として失格なのは分か
ったでしょ。

さてと、次は雪織対タカミチ・ガトウペアかあ…どうなるかな？

いや、雪織の勝ちが決まってるからどこまで粘れるかってことよ？

〱模擬戦　アスナ対4人〱（後書き）

とてつもない一方的な勝負…そして刹那に対する説教でした。

アスナはかなり修行しています。

（手合わせとその翌日）

SIDEユキ

俺は鎌を持って、タカミチとガトウの二人から少し距離を置く。

ちらりと魔法先生と魔法生徒の方を見てみたが、俺が確実に勝てると思っっているのはアスナだけのようだ。

エヴァはどうなるのか分からない、といった顔つき、残りは負けるに決まっているだろう、勝てるはずが無い、そんな感じだ。

「そう言えば俺は雪織とはやったことが無かったな。」

「そうだったか？ バカ二人の相手ばかりしてて覚えてねえんだ。」

「僕は雪さんにアドバイスを貰っただけですね。」

「ん、どのくらい成長したか、見せてもらうぜ。」

「ふおふお…いいかの…では、始めい！」

二人から飛んできた居合い拳を見切り、避ける。

「ガトウは全盛期から落ちてるな？ タカミチはとりあえず速さは十分だ。威力は知らんがな。」

「俺はもう年だからな…『悠久の風』から外れたよ。」

「僕はまだまだですが。これから本番ですよ！」

「まあ威力の確認がてら一発でかいの置くぜ？リラ・カ・マギカ・ラ・エレメンタ、”おお地の底に眠る死者の宮殿よ、我らの下に姿を現せ”」

「「！」」

詠唱を聞いて、すぐに二人は咸卦法を発動させる。

「『冥府の石柱』」

「「豪殺・居合い拳！！」」

6本の石柱を、轟音を立てながら次々と砕いていく。

ガラガラと崩れ、土埃が舞う。正直見えないのは面倒だが…と

飛んできた極太レーザーのような拳圧を避ける。正直楽勝だ。

「七条大槍無音拳たあやるじゃねえか！ただ土埃のせいで丸見えだぜ！」

そう、拳圧を飛ばす居合い拳が土埃で丸わかりなんだ。

「千条閃鏃無音拳！」

ガトウの声と同時に大量の無音拳が飛んでくる。俺も対抗してぶつけ、その衝撃で土埃は飛んでいく。

「ハア…ハア…」

ガトウは肩で息をしている。こりゃ本格的に衰えてるな。

「そー……らっ！」

鎌を勢いよく振って、剣圧ならぬ鎌圧を飛ばす。

「ガフッ！」

それに直撃したガトウは吹っ飛ばされる。

「悪いがガトウは足手まといになるだけだろ？」

「ぐ…ああ…俺はリタイアだ。」

「ってなわけで一対一だ、タカミチ。」

「ハア……勝てる気はしないんですけど、ねっ！」

「よ！」

飛んできた豪殺・居合い拳に鎌圧を飛ばして相殺。

「そらそらそら！」

追い打ちと言わんばかりに連続で放つ。が、それらを慎重に見極め、上手く避けていくタカミチ。

「回避も上手くなったか？」

「そりゃ食らわなければ良いんですからねっ！」

今度はただの居合い拳、しかしかなりのスピードで打ってくる。が、俺も食らうようなことはしない。

「どうしてなかなかじゃねえか！」

「僕だって修行はしてきましたからね！」

「ただな…まだまだ甘かったな！」

「なっ!？」

縮地。

居合い拳を掻い潜り、一瞬でタカミチの後ろに回り込む。首には鎌が添えられている。

「どうする?」

「ここから挽回なんて出来ませんよ…降参です。」

「よろしい。」

鎌をしまつて、学園長を見る。

「おい!終わったぞ!」

「ふお!?!勝者、零崎雪織!」

大半は信じられない、そんな表情。まぐれじゃないか、そんな風にも見える。だが、

「悪いですが皆さん、雪織さんは本気じゃ無いですよ…終始遊ばれてましたし。」

タカミチの宣言。それでもまだ納得出来ないような奴もいる。

「雪織が本気なら、『冥府の石柱』は6本じゃ終わらない。それこそ次々と落として圧殺するまで続けるだろうからな…」

たしかに24本くらい呼び出してひたすら鬼神兵に打って潰したこともあったな。

ガトウの言葉で漸く残りも理解したらしい。納得はしてないようだが、そいつらは知らん。

「まあ私と雪の実力は分かったでしょ？手出しなんてしない方が良いわよ。それじゃ。」

「俺も帰るぜ。ここの警備なんてかったるいこと誰がするかってんだ…じゃあな。」

アスナは女子寮に、俺は自宅にと帰った。

翌日、学園長室

「なんですか？私は呼ばれるような事をしたつもりはありませんが？」

「むう：手合わせの結果があれじゃったにも関わらず警備をしないというのに反対という方が多くてのう：困っとるんじゃ。」

「はあ？知りませんよそんなこと。」

「じゃがのう：」

「じゃがも何ありません。私は学園長から『1つだけ』言うことを聞きます、と言ったのです。それ以上の事は私が善意でする事はあっても、強制される理由はありません。」

「む…」

「次いでに忠告しておきますと、もし私を攻撃するような馬鹿がいたら反撃させて頂きます。アスナも同じことをすると思いますよ？攻撃の度合いによっては殺す可能性もあるので、しっかりと部下を纏めておくことをオススメします。」

「ふお！？それは勘弁してくれんかの！？」

「いいえ、しません。攻撃するということは反撃される覚悟があつての事でしよう？もし食らえば死ぬような攻撃をしてきた場合、それは自分が殺される覚悟を持っている、そう捉えさせて貰います。」

私は扉を開ける。施錠魔法？私にとっては無いに等しいですよ。

「朝礼もありますし、私は失礼します。一度目は半殺しまでにするつもりですが、それ以降はどうなるかは分かりませんので。」

言いたいこと言って、気分はそれなりです。

『泉野先生、1―Aにようこそ!』

パパンパーン!

放課後、書類を纏めたと思ったらアスナが私を呼んできました。

そうしてついたクラスは何時の間にか飾りがつけられ、パーティームード。

入ってきた瞬間にクラッカーが鳴らされました。誰が用意したんでしょう？

騒ぎ過ぎない程度に大騒ぎ、いやはや、テンションが高いですね。

あっちこっちに回されて、何時の間にか携帯電話にはクラスのメンバーのアドレスが登録されました。

ちなみに千雨ちゃんは途中で帰りました。体調が悪い、とか言っていました。が嘘って見抜きましたよ？

その時に明日の放課後に面談、というのを取り付けました。裕奈ちゃんも回っている間に面談を取り付けました。時間は指定したので

被ることは無いでしょう。

そうこうしている内に時間が経ち、お開きになりました。

く手合わせとその翌日く（後書き）

戦闘描写は相変わらず難しいです…

ほとんど戦闘になってない気がしますですが、実力差ということで願います。

～個人面談…カウンセリング？～

SIDE ユキ

進路指導室でシャーペンをカチカチ。

そんなことをしながら待つこと数分間。

コンコン

「入って良いわよ。」

「失礼します…」

若干うつむき気味に顔を下げ、入ってきたのは長谷川千雨ちゃん。

机を挟んだ位置にある椅子を示すと、頭を下げてゆっくりと座った。

「さて、と…面談って言ったけど実際にはカウンセリングなのよ、これ。」

「へ？」

「貴女の悩み、解決します、とか言ってみたり。ふふ。」

ぽかーんとした表情になりました。

「失礼ですが、まだ一週間も経っていないのに私の悩みを先生が把握しているとは思えません…」

「そう？クラスに異様に多い留学生とか、あり得ない大きさを持つ世界樹に、訳の分からない図書館、果てはロボットのクラスメイト。それにも関わらず何の違和感も覚えずに過ごしているクラスメイト。そんなのに悩んでる感じでしょ？」

「！」

驚いた表情をする千雨ちゃん。ま、認識阻害の悩みはこんなところでしょうか？

「これらは全ておかしい事。そう感じているのは私だけ？」

「……私も……です……」

うつむいたまま発せられたのは、小さく、掠れるような声。

「だけど、これらの現象にはタネがある。教えて欲しい？助けて欲しい？そう願うなら、そうしてあげる。どうする？」

その言葉で、顔を上げる。

「でも、今から話すことは知らなくても生きていける。むしろ知らない方がいい場合もある。それで良いなら構わないわ。」

何分もの空白の時間。日常と非日常の境界に立つ千雨ちゃんのだした答えは

「教えて下さい。」

非日常へと足を踏み入れるものでした。

「分かったわ。」

「は!？」

その言葉と同時に、転移魔法を発動、魔法球の中へと。

「な……な……」

目の前に広がる海と砂浜。

「この世界には魔法があり、魔法使いがいる。それが答え。」

驚く千雨ちゃん。

「リラ・カ・マジカ・ラ・エレメンタ” 契約により、我に従え水の女王、来れ、とこしえのやみ、えいえんのひょうが、全てのものを妙なる氷牢に、閉じよ” 『こおるせかい』」

ズドン！

轟音を立てて、突如、海に氷山が出来ました。ちょっとやり過ぎましたかね？氷柱で良かったんですけど。まとめて詠唱した場合突然氷柱がたつのは知ってましたけど…

「どう？理解した？」

「こんなトンデモ見せられて魔法がねえって言う方がもっと現実味がねえよ。」

「素が出てるわよ。そっちの方が楽でいいでしょ？」

「あ！？あー、うん。まあ良いか。先生はこれでも良いんだろ？」

「別に良いですよ。私も普通に戻します。」

同時に転移魔法を発動し、進路指導室に戻ります。

「さて、千雨ちゃんは魔法を知りましたが、本来ならここで記憶を消すことになります。」

「!？」

「魔法は秘匿されるべきもの、そう言うことです。聞いたこと無いですか？この学校には魔法少女と魔法オヤジがいて、ピンチになったら助けてくれる、しかしその時の記憶は消されてしまう。そんな噂。」

「ああ…たしかにあるが…先生もそうするのか？」

おそろおそろ、といった感じに聞いてきました。

「私はどちらもある気は皆無です。が、千雨ちゃんの体質について説明する必要があります。」

「私の体質？」

「千雨ちゃんは精神に干渉する魔法に対する抵抗力が非常に高いです。この学園には認識阻害という魔法を使った結界を張っていますが、その効果が効いてないんです。」

これって結構有利なんですよ。洗脳とか聞きにくいってことですし。

「つまりその認識阻害？ ってのが効いてないから私はまわりとズレが出来てたのか？」

「そう言うことです。で、ここで選択肢をあげます。」

「選択肢？」

「そう。千雨ちゃんがこれからどうするのか、です。」

1つ目、記憶を消して、このまま何もせずに過ごす。この場合その体質は消してあげれます。

2つ目、記憶は残したまま、このまま過ごす。ただしこれは他の魔法使いにバレると今までの状態に戻ってしまいます。

3つ目、いつそのこと魔法使いになってしまう。この場合私が師匠になりましょう。その辺の魔法使いよりは遥かに強くなれますよ？

とまあこんな感じです。」

実質1通りですがね。

「うーん…」

「1つ忠告しておきますと、魔法の世界は危険に満ち溢れた世界です。生半可な気持ちでいたらその先には死しかありません。ただ…」

ただねえ…

「ただ？」

「はっきり言ってこの学園にいる時点で魔法から離れることは出来ないんです。特に千雨ちゃんは体質も記憶も消さない限り。」

「つまりなんだ？ 私は記憶と体質を消して一般人になるか、記憶を消さずに危険な一般人になるか、もしくは完全に一般人から外れるかのどれかしかないのか？」

「理解が早いですね。まさにその通りです。」

「それだったら私は3つ目を選ぶ。記憶を消されるのは嫌だし、今までに戻る可能性のあるのも嫌だからな。」

「本当にそれで良いんですね？」

「ああ。」

「分かりました。」

その後、アスナに報告するように言っておきました。お礼を言ってお立ち去った千雨ちゃんの顔はスッキリしていました。良かったですよ、ホントに。

さて、次は裕奈ちゃんですね…

〱面談二人目〱

SIDEユキ

千雨ちゃんを送り出して、ノートパソコンで書類作成。しばらくやってると、時間がきました。

コンコン

「どうぞ。」

ノック音が聞こえたので返事を返す。ドアを開けて入ってきたのは明石裕奈ちゃん。

椅子を示すとそれに座りました。

「緊張してる？」

「にやはは、せんせーに呼ばれてやって来たのがこんなところだからね。」

進路指導室ですしね。

「まあ別に叱るとかそう言うことじゃ無いから安心して。ちょっとしたおしゃべりだから。」

パン、と一回拍手を打ち、結界を張る。

「何したの？」

「結界を…ね。今から話すのは魔法の事だから。」

「結界？魔法？せんせーってRPGとか好きなの？」

へえ…秘匿意識はしっかりしてますね。

「嫌いじゃないけどね。私は魔法関係者だから話しても良いわよ？」

「……ふう。せんせーは私が魔法を知ってるって気づいてたの？」

「まあね…明石教授から聞いてない？」

「んー…そう言えば私の魔法の師匠をしてくれる人がいる、って言うってたね。もしかしてせんせーがそうなの？」

「答えはイエスでありノーでもある。」

「どういうこと？」

魔法を使って髪と目の色を変化、黒いローブを着て、雪織と入れ替わる。

（あとはよろしく頼みますよ。）

（おう。）

裕奈の顔は驚きに包まれる。

「この姿に見覚えはあるか？」

「お母さんを、助けてくれた、人？」

ニヤリと笑って答えてやる。

「大正解だ。自己紹介をしておこう。俺は泉野雪のもう一人の人格、零崎雪織だ。」

「もう一人の人格？」

「そうだ。俺と雪は表と裏。二重人格なのさ。」

その後、数分間は裕奈は固まってしまった。

なんとか立ち直ったので、1つ問いかける。

「それで、だ。俺はお前の魔法の師匠になることは構わないんだが、お前がどう思っているか、だ。」

「私が？」

「そ。俺無理やり教えるつもりは無い。お前は俺についてくるのか、ってことだ。」

「私は、あなたが教えてくれるのなら教えて欲しい。お母さんを助けてくれたあなたに習えるんだから。」

「分かった。1つ聞かせろ。魔法とはどういうものだ？お前はどうか考えている？」

これで裕奈が魔法についてどう考えているかが分かる。

何分か経って、口を開いた。

「魔法は便利なもの。だけど同時に人を傷つける武器になるもの。人を殺してしまうほど、危険なもの。そう考えてる。」

目の前で母親が死にかけてたからか、まともな答えが返ってきた。

「その考え方なら大丈夫だな。俺も安心して教えられる。」

「私の魔法の師匠をしてくれるの？」

「ああ。話すことは終わりだな。アスナに報告しておいてくれ。教室にいるだろうから。」

「アスナに？なんで？」

「簡単に言えば弟子が増えた、ってことを知ってもらうためだ。修行の日にちともあるからな。」

「わかったよ。じゃあね、雪織さん。」

「おう。」

これで二人とも面談は終了、か。結界はもう解いたし…ん？

「いるんだろ。入れよ。」

「ばれてたカ…」

ドアを開けて入ってきたのは超鈴音。イレギュラーの俺に接触、つかかか？

「何の用だ？顔合わせの時に機械があつたのは気づいてたが。」

「なんのことカナ？」

「けっ…雪と完全に態度の違う俺を見て驚いてないのによく言うぜ。」

すでに髪と目の色は戻しているし、ローブもしまってある。見た目は完全に泉野雪と同じだ。

「……単刀直入に言うネ。私の仲間になって欲しいネ。」

「仲間、ねえ…断る。内容も知らねえのになれるか。」

「この世界を救うため、と言ったらどうか？」

「世界を救う？バカバカしい。そんなことはどうでもいいね。」

「なッ!？」

「俺は俺のやりたいように生きればそれだけで良い。世界がどうにかならろうが別に構わん。」

おや、黙ったか。次にどうするかを考えてるのか？

「……なら、不干渉はいいカ？」

「それくらいなら構わん。が、アスナや弟子がどうするかは知らん。」

はっきり言うと三人（アスナ、千雨、祐奈）は魔改造するから計画は潰れるんだがな。

「分かったヨ。」

それだけ言って、超は立ち去った。ま、不干渉だけでもありがたいと思いな。

さて、と…修行の内容とか色々考えないとな…

〱面談二人目〱（後書き）

なんかイマイチな出来です。
短い…

＼ユキの魔法講義＼

SIDEユキ

「ようこそ、私の別荘へ。」

面談から数日後、とある休日。

私の別荘へやって来たのはアスナ、千雨、裕奈の三人です。

千雨ちゃんには魔法を教えるため、裕奈ちゃんとアスナには修行をするために来てもらいました。

別荘って魔法球のことですよ？あの神様にもらった特製魔法球。今では1時間が5年という化物魔法球になっています。

当然不老の私以外が使うと色々和不味いことになるので：

「とりあえずこの指輪を着けて下さい。」

「これは？」

千雨ちゃんが聞いてきました。

「時間を騙す指輪です。ここでは1時間が5年になります。成長してもらおうと困るので。」

もっとも、筋肉やら気力やら魔力やらはつくんですけどね。

「さて：魔法を教える前に、1つ話しておきましょう。」

アスナ以外の二人はどこか疑問のあるような顔。

「魔法とは簡単に人を殺めることの出来るもの。魔法の世界では人の命を奪わなければ、自分の命がなくなる、そんなことは多々あります。」

私は魔法使いからは『英雄』と呼ばれる存在です。ただしそれは戦争で活躍したという意味での英雄です。これがどういうことか分かりますか？」

無言。当然理解出来ているのでしよう。

「そう、私は多くの人の命を奪いました。つまりはただの大量殺人者。」

ただ、その本質を理解せずに憧れる魔法使いは沢山います。そういった中には『正義』として、悪を殺すことを正当化するやつすらいます。『立派な魔法使い』を目指す、とかほざきながら。

二人は決してそんな馬鹿にはならないで下さい。」

理解したと言う風に、頷く二人。いい兆候ですね。

「まあ暗い話はこの辺りにして：まず二人にはスタイルを決めてもらいましょうか。」

「「スタイル？」」

「ええ。戦闘においては大きく分けて2つスタイルがあります。魔法剣士と魔法使いです。」

「その2つの違いは？」

「まず魔法剣士。これは戦闘で魔法だけではなく、自分の肉体や近距離武器等も使うタイプです。簡単に言えば魔法を使いながら殴り合いに持ち込むタイプです。」

一方の魔法使い。こちらはひたすら魔法を放つタイプです。極端なことを言えばただの砲台です。」

「せんせーはどっちなの？」

「私はどちらかと言えば魔法使いタイプです。まあ近接戦も出来る

ようにはしてませんが。雪織は魔法剣士ですね。大鎌を得物として近距離戦闘をするタイプです。」

「雪織？」

あれ？ああ。千雨ちゃんは会って無いですね。

「私は二重人格でして、もう一人の人格の事です。零崎雪織、通称『漆黒の死神』。私は『属性を統べる者』と言われていますが。」

「『漆黒の死神』って…」

「雪織は大鎌を得物にして黒いローブを着ています。ついでに魔法で髪と目の色を黒くしてますから。いつの間にかそんな風に呼ばれるようになってましたね…」

「へえ…」

んー…話がそれました。

「まあ私の見立てでは二人とも魔法使いタイプでしょうね。魔法剣士になりたいのなら別ですが…」

しばらく考えさせた結果、二人とも魔法使いタイプになることになりました。

「では次のステップ…と行きたいところですが裕奈ちゃんはもう魔法は使えますか？」

「うん。一応はね。」

「とするとしばらく裕奈ちゃんは後回しになりそうですね…適性属性は分かる？」

「えーっと…火、土、光だったかな？」

「全体的に火力が高い属性ですね…とりあえず今使える魔法で一番強いやつを撃ってみて。」

「いいの？」

「どのくらいの威力があったかでアスナにメニュー決めさせるんで。」

「え!?!? 私が!?!?」

「魔法は無理でも体術は教えられるでしょ。ついでに属性が絡まない魔法。」

「まあそうだけど…分かったわ。」

「と言うわけで、撃ってみて。」

「はい。」

私は障壁を展開、裕奈ちゃんは距離をとり、呪文の詠唱をスタート。

「ウェアオー・オブティマー・エスト”ものみな焼き尽くす浄化の炎、破壊の王に再生の微よ、我が手に宿りて敵を喰らえ”！」

お？結構強力なやつですね。

「『紅き炎』！！」

爆煙が押し寄せる。障壁で防ぎつつ、威力の確認…なかなかのレベルですね。

「明石って結構凄かったんだな…」

「母親は現場の第一線で活躍しましたからね。才能が遺伝したんでしょう。」

と、晴れてきましたね。

「どうだった？」

「なかなか良いですよ。私は千雨ちゃんに初歩から教えるので、アスナと二人で頑張ってください。」

アスナは歩いていき、一言二言話してから歩いて行きました。

では、始めますか。

「さて、と。まずは魔力を感じてみないと分からない訳ですが。」

「って言っても先生。私は魔力なんて感じたことないぜ?」

「だからこうします。」

そう言って手を頭にのせ、魔力を流す。

「んっ…」

「分かります?」

「ああ…なんか頭から来てるのが分かる。これか?」

「そのなんか、がわかればOKです。はい。」

初心者用の杖を渡す。

「今から私と同じようにやってみて。プラクテ・ビギ・ナル『火よ灯れ』」

「えーっと…プラクテ・ビギ・ナル『火よ灯れ』」

ぽっ、と杖の先に火が灯りました。これはこれは…

「結構才能あるみたいですね。」

「本当か！嬉しいなコレ…」

ついでにさっき頭に触れたときに境界を弄って魔力を伸びやすくしておきました。後で裕奈ちゃんにもやっときましよう。

何の境界か、ですって？「魔力の限界」と言う名の境界ですよ。取っ払ってやりました。強いて言うなら「有限」と「無限」の境界でしようか？魔力の「伸び」には本来限界がありますからね。

「ま、とりあえず火が灯せたのでコレを。」

取り出したのは水晶玉のようなもの。魔力を流すことで適性属性を計れるようにしてあります。

「どうするんだ？」

「魔力を流してみてください。さっき火を点けたようにすれば良いです。」

言われて魔力を流す千雨。すぐに内部で変化が起こります。

「これは…？」

ジグザグに走る黄色い線、流れるような薄緑の線、所々に浮かぶ黒い球。刻一刻と変化するそれは幻想的でもあります。

「それは千雨ちゃんの適性属性を示しています。黄色は雷、薄緑は風、

黒は闇です。」

「ふうん…それぞれの特長とかあんのか？」

「共通するのはどれも補助的な要素を持っていることです。雷は相手を麻痺させ、風は捕縛魔法が多いです。闇は…まあ色々です。色々。」

闇って出来ること多いんですよ。同時にリスクも大きいものが多いですけど…『闇の魔法』なんてその最上級ですね。まあアレは近接専用に近いですし、千雨には要らないでしょうね。

さて、これからが楽しみですね…

＼ユキの魔法講義＼（後書き）

裕奈の始動キー

ウアレオー・オプティマー・エスト

ラテン語で「元気なことは最も善いこと」という意味。

適性属性は何となくで決めました。

く魔法球での修行後く（前書き）

修行風景は無いんです…と言うわけで魔法球内で5年が経つてます。

魔法球での修行後

SIDEアスナ

千雨ちゃんとゆうなと一緒に魔法球に入ってきて大体5年がたったわ。で、今は二人の模擬戦を見てるんだけど：

「ウアレオー・オプティマー・エスト！」契約により、我に従え奈落の王、地割り来れ、千丈舐め尽くす灼熱の奔流、滾れ、迸れ、赫灼たる亡びの地神”！」

「モルス・ケルタ・ホーラ・インケルタ！」契約に従い、我に従え高殿の王、来れ、巨神を滅ぼす燃ゆる立つ雷霆、百重千重と重なりて、走れよ稲妻”！」

見てるん…だけど…

「『引き裂く大地』！！！」

「『千の雷』！！！」

それぞれ地属性と雷属性の広域殲滅魔法。それぞれがぶつかり合い、恐ろしいまでの爆風が発生。

正直5年も魔法漬けにしてたからってここまでのレベルになるのかしら？いや、たしかにユキの教え方がいいのは分かるけど：

問題なのは魔力量ね。二人とも始めごろはせいぜい一般人に毛が生えたくらいだったのに、今では木乃香の倍近くあるみたいね。确实

にユキが何かしたわね…

「ウアレオー・オプティマー・エスト！」 おお地の底に眠る死者の
宮殿よ、我らの下に姿を表せ”！」

「ちよっ！マジか！」

「いっくよー！『冥府の石柱』！！」

巨大な質量を持つ石柱が6本発生し、千雨に向かって飛んでいく。
追撃と言わんばかりに無詠唱で『紅き炎』を多重展開。

爆煙と石柱のコンボ…って普通の相手にやったら確実に逝けるわよ？

千雨ちゃんは虚空瞬動と浮遊術を駆使しつつ、障壁を展開して爆煙
の中を突っ切る。

「障壁突破『雷の斧』！」

「え！？うにゃあああああ！？」

おおぅ…これは酷い。油断はしてなかったけど遅延呪文でそれは…
ねえ。直撃だし…

なんで無詠唱じゃないか分かったのか、って？爆煙を抜けたところ
で口が『開放』って動いたのが見えたわ。大方突っ切る途中にでも
唱えたんでしょ。

「今回は私の勝ちだな。」

「うーん…」

ゆーなは目を回して気絶してるわね。あ、普通の人間がくらったら多分死んでるわよ？

模擬戦をするにあたって、ユキが恐ろしく巨大な結界を張ったわ。魔法や気による攻撃で死に至らないようになってね。

そうそう。千雨ちゃんの始動キー、「モルス・ケルタ・ホーラ・インケルタ」だけドラテン語で「死は確実、時是不確実」って意味の格言ね。

実戦では死に至る可能性はあるし、決まったと思った魔法で仕留めきれないこともあるだろうから、って言ってたわね。

「お疲れさま。なかなかでしたよ。」

「つてもやっぱ『冥府の石柱』は苦手だわ。あんな巨大な質量攻撃、あと一本でも多かったら避けきれなかったかもしれないねえ。」

「まあ…仕方ないです。火力が弱めの千雨ちゃんだと。」

あれって一本壊すのにも相当な火力がいるのよね。私も壊そうとすると雷光剣とか使わないと無理なもの。斬岩剣で切れることは出来るけど、それだと二つになったやつが別々に降ってくるだけだからね。『無極而太極斬』使ったらかき消せるけど…アレは例外だしね。

あ、咸卦法で神鳴流は使えたわよ。ただ威力が高すぎるから半ば封印しておくけど…ただの雷鳴剣が真・雷光剣クラスになったもの。斬岩剣とかは純粋に威力が上がっただけだけど、それでも…ね。

「ただ、ちょっと二人とも強くしすぎたかもしれません。正直その辺の魔法使いは『引き裂く大地』とか『千の雷』とか使えませんし……」

「ユキがノリノリだったからでしょ。大は小を兼ねるって言うし、強すぎて困ることは無いんじゃない？」

「まあ……そうですね。」

何か悩んでる？魔法のレベルはもう最強クラス、気は二人ともあまり使えないけど魔力で瞬動と虚空瞬動は出来るし、体術もそれなりに使えるレベルになったし……

あ、いくら魔法使いタイプって言っても前衛無しである程度戦うには体術は必須だからね？

まあだとすると……実践訓練が足りてない？私とユキ、ユキオリ、千雨ちゃんとゆーなの5人だから充分な気がするけど……

「そうだ。図書館島に行きましょう。」

「「「図書館島？」」」

たしかに地下は危険って聞いたことあるけど……ってゆーなもう起きたのね。早いわね。

「そ。思い立ったが吉日、今から行きましょう。」

SIDE ユキ

魔法球から出る。私の家、久々の空気。

「ここに入ったのが午後1時だったから本当に一時間しかたってねえのか…」

現在時刻は午後2時。あの指輪、「時間を騙す」の言葉通り、ここにいた記憶は全部残っています。

つまり料理の腕とか宿題とか、そういうことは忘れてないってことです。昨日…つまり5年以上前のはずの事もきちんと昨日の事として感じるようになっていきます。

「なんか変な感じ…ひたすら魔法の練習をしてた記憶はあるのに時間はたつてないとか…」

「まあこの感覚は慣れるしか無いわよ。」

アスナの言う通り、慣れてもらうしか無いですね。まあ次から使うのはせいぜい24倍魔法球でしょう。1倍魔法球なんてのもありますよ？ 純粋な空間確保ですけど。

「ま、とりあえず行きましょう。」

経験不足を解消するには調度良いでしょうから、ね。

「おっと！」

飛んできた矢を避ける千雨ちゃん。

「なんつーか、ここってやっぱ変だよな。」

「魔法書ねらいの敵を排除するため、らしいですよ？」

「でもこのくらいの罫で大丈夫なのかなぁ？」

うだうだと喋りながら、下へ下へと潜ります。

「でさあ、ユキはこの奥に何があるのか知ってるの？」

「ええ、もちろんです。」

「だったらユキはすぐに行けるんじゃないの？一度は行ったんですよ？」

「まあそうなんですけど。ここを歩いて行ったほうが良いんですよ。」

お、見えてきましたね。

「先生：私の見間違いか？なんかドラゴンっぽい生き物が見えるんだが。」

「私もみえるにゃー…」

「大丈夫よ二人とも。私にも見えるから。」

「ドラゴン：というよりワイバーンですね。まあ安心してください。私がいる限り襲わないので。」

取り出したのは通行許可証。あっさりと身を潜めるワイバーン。

「まあコレがいるのと顔を覚えてもらう二つの意味で来たわけですよ。」

と言うわけで歩いてワイバーンの下のところまで行き、扉を開ける。

さて：アイツは何て言うのでしょうかね。

く魔法球での修行後く（後書き）

千雨の始動キー

モルス・ケルタ・ホーラ・インケルタ

「死は確実、時は不確実」という意味のラテン語の格言。

〈図書館島の深部にて〉

SIDE ユキ

「お邪魔しますよー」

扉を開けつつそんなことを言います。

広がるのは地下とは思えないほど広い空間、少し向こうにはテーブルと椅子、二人腰かけています。

後ろの三人は言葉を失ってます。アスナは予想外の人物がいることに、千雨ちゃんと裕奈ちゃんはこの空間そのものに、でしょう。

「いきなり来ないで下さいよ…雪。それで、後ろのお嬢さん達は？」

「まったくもって同感じゃな。心臓に悪いぞい…」

「あ、ああ。長谷川千雨だ。」

「明石裕奈…です。」

「ワシはフィリウス・ゼクトじゃ。」

「ご丁寧に。私、クウネ「アルビレオ・イマ」ル…」

強引に切られて言葉につまるアル。

「たしかにその通りですが、今はクウネル・サンダースと名乗って

います。ここの図書館の司書をしている者です。どうぞよろしく…」

「えーっと…クウネルさんで良いのか？」

「はい。ああ…アスナちゃんは今まで通り『アル』で結構ですので。」

「分かったわ。でもなんでこんなところにアルとゼクトがいるのよ？」

「10年ほど前に色々ありまして…療養中の身です。」

「ワシは純粹にやることが無いでの。落ち着いて過ごすにはここが一番じゃ。」

「ん…あ！思い出した！麻帆良祭の時に現れる謎の白いフードの青年と謎の老人口調の少年！」

「アルにゼクト…そんな風になっているとは知りませんでしたよ？」

「分身体を送っているんですよ…私が外に出れるのはその時くらいなものなので…」

「ワシはあまり外に出る理由が無いからのう…」

身分的にも動きにくいでしょうからね。

「まあ…と、それは良いんです。二人に用があって来たんですよ。」

「何ですか？」

「ええ。はっきり言うと二人に稽古を付けてもらいたいです。特にこの二人に。」

「そちらの二人はどのくらいですか？」

どのくらいのレベルか、ということでしょう。

「得意属性を伸ばして、それぞれの広域殲滅魔法は使えるまで伸ばしました。二人とも魔法使いタイプですのである程度の体術も身に付けてます。」

「ふむ…実践経験が足りんということじゃな？」

「そういうことです。場所は1倍魔法球で確保できるので…どうですか？」

2つほど取り出します。どこからですって？もちろんスキマからですよ。

「良いですよ。ゼクトはどうですか？」

「ワシも構わんよ。久しぶりの実践じゃ。断る理由も無いじゃろう。」

「ありがとうございます。では！」

千雨ちゃんとアル、ゼクトと裕奈をそれぞれの魔法球に送ります。

「戦えなくなるまで二人とも、頑張ってください。」

念話を利用した魔法で指示を出しておきました。

「私たちはどうするの？」

「まあゆっくり待ちましょう。紅茶でもいれてきますよ。」

しばらく…およそ一時間経ったところで千雨ちゃんとアルが魔法球から出てきました。

「どうでしたか？」

「あー…もう全然喰らわせれねえ…ふらふら避けられて重力魔法で反撃されるし…」

「彼女は魔法の才能が素晴らしいですね。ただいかんせん実践経験が少ないから戦法がワンパターンになってしまってます。」

「ふうむ…やはりですか…」

「ただセンスは良いですし…どうでしょう？重力魔法を覚えてみますか？」

「おや？その素質があつたんですか？」

「ええ…どうです？あなたはどうしたいですか？」

「教えてくれるんなら教えてくれ。手札が多いに越したことはねえ。」

「分かりました…とはいえ今は疲れてるでしょうからまた後で。」

まさかアルが教えると言い出すとは…

千雨ちゃんとアルが出てきてから15分ほど経って、裕奈ちゃんとゼクトが魔法球から出てきました。

「にやはは…ダメダメ。」

「ゼクトの意見は？」

「うーむ…なかなか良いんじやが、やはり実践経験が足りてないの。魔法の連繫を良くすれば化けるじやろうな。後は…」

「まだあるんですか？」

「うむ。どうやらこやつは火、土、光が適性が特に高いのであって、他の属性の適性が悪いようでは無いみたいじゃ。他の属性魔法ある程度は使えるようにするのが良いじゃろうて。」

へえ…まんまゼクトみたいになれると。結構良さげですね。

「ところで雪。あなたは仮契約はしてるんですか？」

「ええ。アスナとはしてますよ。」

「「仮契約？」」

「コレね。」

そう言っアスナは仮契約カードを取り出します。

「あれ？二人には説明してなかったですか？」

うんうん、と頷く二人。

「仮契約とはその名前通り『仮』の『契約』です。魔法使いの従者を作るための儀式で、主からの魔力供給、念話、従者召喚などが出来ます。」

「それらもありますが、重要なのはアーティファクトですね。」

アルが補足を入れる。

「「アーティファクト？」」

「アーティファクトとは仮契約で手に入る魔法具じゃ。主の魔力量によってはそもそも手に入らない場合があるがの…」

「まあ雪の魔力量は異常とも言えるレベルですし、間違いなくアーティファクトは出るでしょう。それも強力なのが。アスナちゃんのそれは？」

「『ハマノツルギ』よ。効魔法や気による攻撃の無効化、及び無効化や反射の出来る結果を張る機能、後は召喚された物の一撃で送り還す効果もあるわ。」

私とアスナ以外の顔がひきつってますね。まあ仕方ないですけど…

「仮契約って何人でも出来るのか？」

「ええ…『仮』ですし。」

本契約も器しだいで何人かと出来るんですがね。

「なら先生…私と仮契約してくれないか？」

「あ、私も！」

「え？別に良いですけど…」

少し離れて、足下に魔方陣を発現させる。

「一人ずつやりますから…まず千雨ちゃんから。この上に立って足元の陣に魔力を流して。」

「分かった。」

足元の陣が輝きを増す。

”我、泉野雪を主とし、長谷川千雨、かの者を我の従者と為さん”

するとカードが手元に降りてきます。千雨ちゃんの手元に1m位の杖：クリスタルロッドが握られてます。名前は『透明の魔法杖』ですか。

「はい。確認は後ですから待って下さいね。」

千雨ちゃんと同じように、裕奈ちゃんも。こちらは両手に形の違う拳銃：名前は『七色の銃』：原作と同じですが魔改造されてる可能性大ですね。

「使うときは『来れ』です。」

「「『来れ』」」

当然のごとく手元に現れます。さて、と。効果はどんなものでしょうかね…

調査結果です。

千雨ちゃんの『透明の魔法杖』は

1つの魔法をノータイムで発動できるようです。これは杖を持つて
いる限り、なんの前触れも無しに魔法を発動出来るということです。
恐ろしいことに無詠唱以上に早く発動します。

もつとも、一度使うと次の使用には10秒ほど時間が必要のよう
です。まあ『千の雷』二重展開とか出来るので十分な気がします：

こんな感じです。

裕奈ちゃんの『七色の銃』は

特殊な効果を持った魔法弾（魔力封印）などを打てるようです。ま
あこちらはそれなり、ですね。

問題なのは『雷の暴風』レベルの魔法を銃を介して連発出来るこ
とです。魔力は消費しますが。

さらにその威力を圧縮した魔法弾も打てます。当然のようにアシス
トがついていて、狙った位置に確実に着弾させる事が出来ます。

実際『紅き炎』の威力を圧縮した魔法弾を5秒で30発近く一ヶ所
に打ち込まれて障壁を壊されました。『千の雷』クラスも余裕で防
げる障壁が、です。

こんな感じです。

いやはや、二人とも強化しすぎレベルになってしまいました。これ
からどうなりますかね…？

〽図書館島の深部にて〽 (後書き)

アーティファクト

千雨：『透明の魔法杖』

裕奈：『七色の銃』

それぞれチートクラスのアーティファクトです。説明は本文で。

～主人公設定～（前書き）

ユキの設定です。

～主人公設定～

本名…ユキ・スプリングフィールド

偽名…泉野雪／零崎雪織

身長…167cm

体重…禁則事項

B88W58H88

二つ名

泉野雪…『属性を統べる者』

零崎雪織…『漆黒の死神』

容姿

泉野雪…赤髪、目は茶色。顔はナギを女っぽくした感じ。腰まで伸ばしたストレートヘアで、アスナとは姉妹に間違われるほど若い見た目。

零崎雪織…黒髪、目は黒色。顔は雪と変わらないが、常に黒いフードを被っているためあまり見えない。一応髪は束ねているため、フードを外すとポニーテール。

性格

泉野雪…おだやかで、ですます口調を好んで使う。ただし戦闘では冷静で非常に冷酷な性格となり、口数は極端に減る。

零崎雪織…残虐思考。ただし明るく、軽い口調で話す。戦闘では敵を挑発することも多い。

能力

『境界を操る程度の能力』…境界に関する事象を操ることが出来る。ただし死者の蘇生など、出来ないことも存在する。

『不老』…そのまま。20歳から肉体年齢は変化せず、老衰するところが無い。

二重人格だがお互いを認識しており、任意のタイミングで入れ替わることが出来る。

主に表に出ている人格は雪の方。雪織になったときは魔法で髪と目の色を変化させている。

戦闘スタイルは雪が魔法使いタイプ、雪織が魔法剣士タイプ。ただしどちらも『一応』であり、二人とも無音拳や神鳴流を使える。得物を使う場合雪は刀を、雪織は主に鎌で時々刀を使う。

（設定集）

ここまでの原作との相違点

泉野明日菜

- ・ 姓が神楽坂ではなく泉野、泉野雪の義理の娘
- ・ 記憶封印を受けていない
- ・ 泉野雪と仮契約済み、アーティファクトは『ハマノツルギ』
- ・ 属性の無い魔法は使用可能（ただの転移、障壁、念話など。）
- ・ 神鳴流、各種式の太刀まで使用可能

長谷川千雨

- ・ 魔法の事を知り、ストレスが緩和されている
- ・ 泉野雪と仮契約済み、アーティファクトは『透明の魔法杖』
- ・ 使用魔法は雷、風、闇の属性魔法と重力魔法

明石裕奈

- ・ 夕子生存により、ファザコン度合いが軽い
- ・ 泉野雪と仮契約済み、アーティファクトは『七色の銃』
- ・ 使用魔法は主に火、土、光の属性魔法、他の属性魔法も中級クラスまでなら使用可能

・ ガトウ、明石夕子は生存

・ ゼクトは造物主に乗っ取られていない、現在は図書館島の深部でアルビレオ・イマと同居

・ エヴァの登校地獄は解呪済み

アーティファクトについて

『ハマノツルギ』

・魔法反射、魔法無効化の結界機能がある

『透明の魔法杖』

・杖を持っているときに1つの魔法をノータイムで発動できる。呼び動作は一切なく、無詠唱以上に早く発動する。

・上の効果は間髪いれずに連続使用することは出来ず、次に使うまで十秒かかる。

『七色の銃』

・アシストが付いており、狙った位置に着弾させる事が出来る

・特殊効果（魔力封印など）をもつ弾を打てる。

・銃を介して『雷の暴風』レベルの魔法を連発することが出来、その魔法の威力を圧縮した弾を打つことも出来る。

オリジナル魔法

『無限の光槍』

詠唱…” 契約により、我に従え光の皇帝、来れ、不滅の光、破邪の神槍、永久の輝きとなりて、降り注げよ光輝” 『無限の光槍』

光属性の広域殲滅魔法。

上空から無数の光の槍が降り注ぐ魔法。

性質上、他の属性の広域殲滅魔法より確実性が落ちるが、威力は他をはるかに凌ぐ。

『裁きの竜巻』

詠唱…” 契約により、我に従え風の帝王、来れ、全てを切り裂く不可視の刃、地を海を空を走りて、巻き起これよ旋風” 『裁きの竜巻』

風属性の広域殲滅魔法

横向きの巨大な竜巻を打ち出す魔法。

弱い魔法は飲み込んで威力を上げる特徴を持ち、味方による強化も可能。

竜巻の内部は真空刃が飛び交っており、当たったものはズタズタにされて塵になる。

真空刃はダイヤモンドですら真つ二つにするほど。

『神々の黄昏』

呪文はとくに無し。

『燃える天空』 『こおるせかい』 『千の雷』 の3つの魔法をを固定、魔力で連結して打ち出し、『解放』して魔法を発動させる。

とてもじゃないがユキ以外は一人では出来ない。

3つの相乗効果で恐ろしく威力が上がっている。

く原作開始の足音く（前書き）

前話から再び時間が飛んでいます。
それから短めです。

〈原作開始の足音〉

SIDEユキ

「ゆくぞ！リク・ラク・ラ・ラック・ライラック！」 来れ氷精、闇の精、闇を従え、吹雪け常夜の氷雪”！」

「モルス・ケルタ・ホーラ・インケルタ！」 来れ雷精、風の精、雷を纏いて、吹きすさべ南洋の嵐”！」

え…と…今はエヴァの魔法球の中です。

「『闇の吹雪』！」

「『雷の暴風』！」

二つの魔法がぶつかり、衝撃が走ります。

「のわっ！」

威力で言えばどちらも同じくらい、ですが衝撃によって千雨の体勢は崩れました。

その隙を見逃すはずもなく、エヴァは一気に詰め寄ります。

「っ…『最強防護』！」

「ちっ…」

なんとか体勢を立て直し、エヴァの『断罪の剣』を防ぎました。エ

ヴァは反撃に備え、急いで距離を取ります。

「『白き雷』！」

「甘いぞ！『こおる大』：なっ！？」

放たれた雷を避けるために飛び上がったはずが、いきなり落下する。
結果、命中。

「ぐう…」

「はい、そこまでー」

あくまで模擬戦です。アーティファクト無しの一撃終了ルールでしたけどね。

「大分板についてきましたね。」

「ケケケ。御主人モツイニ鈍ッタカ？」

「いや、あれは完全に予想外だった。なんせ重力球も使ってなかったからな。」

「やっと上手くいったからな…やっぱ球無しで重力魔法使うのは難しいな。」

重力魔法は普通、球の形にします。それなしだと大幅に難易度が上がるんですよ。

「ソレニシテモ、他ノヤツガ居ナイト調子狂ウゼ。」

そう、いまここにいるのは私とエヴァ、千雨ちゃん、チャチャゼロの3人＋1体なんです。

アスナと裕奈ちゃんはそれぞれお出かけ、茶々丸さんはメンテナンスです。

ちなみに今は2003年の1月です。あと一ヶ月ほどでネギがやっできます。

「ところで先生、今日なんか用事があるとか言ってなかったか？」

「うん？たしか1時頃に学園長室に來いって話でしたね。とすると…そろそろですか？」

「ここに入ったのが11時半位、1日たったからそのくらいだろう。」

「そうですか。じゃあ私は出ることにしますが…二人は？」

「長谷川次第だな。コイツとはやり合っていて面白いものがあるが…無理は言わん。」

「だったら私も出ることにする。今日はこの辺にしておきたいからな。」

「ふむ。分かりました。」

転移魔法を発動し、三人でそとに出ます。

学園長室前。ノックをしてから入る。

「ふむ。よく来てくれたの。」

「なんですか？早く用件をお願いします。」

「そう焦らんでも…近々来る新任の先生の事での。」

「それがどうかしたんですか？いや、そもそもこんな時期に来るのと事態がおかしいのですが。」

「いやいや、おかしくないんじゃないよ。」

どう考えてもおかしいですけど。

「ん…まあ良いです。私に関係あるんでしょう？誰が来るのですか？」

「なんと、ナギの息子、ネギ・スプリングフィールド君じゃよ。」

「へえ…まだまだ子供でしょう。労働基準法という法律を知らないんですか？」

どうせ『認識阻害があるから大丈夫』とか言うんでしょうけど。

「それは大丈夫じゃ。ここには認識阻害の結界もあるしのうち。それに彼はメルディアナ魔法学校を首席で卒業しとる。頭脳面も問題ないじゃろうて。」

「へえ：分かりました。で、何をさせるつもり何ですか？」

「お主のクラス：2－Aの担任と英語教師をしてもらおうと思ってるよ。」

「英語教師は良いとして、担任は反対させてもらいます。」

「何故じゃ？」

「分かりきった事でしように。私は自分で言うのも何ですが、一般教師と一般生徒からはかなりの支持を受けています。いきなりやって来た子供なんかがとって変わったらその辺りの人から総スカンくらいますよ？副担補佐から始める方がよろしいかと。」

これは事実。魔法先生も良識ある人は支持してくれています：明石教授とか瀬流彦先生とか。

「む：分かったぞい。」

「それから、そのナギの息子のサポートを私にさせるつもりなら諦めて下さい。」

「ふお！？」

「メルディアナ魔法学校を首席で卒業しているんでしょう？それなら私は『一人の教師』 としてはサポートしますが、『魔法使い』としてのサポートはしません。」

「そこを何とかしてくれんかのう…」

「いいえ。魔法学校を卒業している限り私は彼を『魔法使い』としては一人の大人として見させてもらいます。もっとも、彼が懇切丁寧に頼みに来たのであれば別かもしれませんが。」

当然の事でしように。

「むう…仕方あるまい。」

「ああ、その時には読心魔法を使って本人による意思かどうか確認させてもらいますので。もし学園長や自称『正義の魔法使い』による指示であった場合はそれ以降『魔法使い』としては完全に無視させてもらいますので。ご注意ください。」

本人が本人による意思で、きちんと礼儀正しく来たならばそれには応えます。それが礼儀という物でしょう。

「ぐぐ…分かったぞい。用件は以上じゃ。」

「では、失礼します。」

さて、もう少しで原作開始ですね…色々と忘れて来てますけど、大丈夫でしょう。

〈原作開始の足音〉（後書き）

補足というかなんというか…

千雨、裕奈、アスナはエヴァが吸血鬼であること、ユキが不老であることを認識しています。

千雨と裕奈の实力は拮抗しています。

くやって来たネギ、原作開始く

SIDEアスナ

まったく、頭が痛いわ。

横でタカミチと話しながら、赤毛の子供、ネギ・スプリングフィールドを見つつ思う。

いきなり新任の教師が来るから迎えをしてくれ、って言われて、いやそもそもこんな時期に来る時点でおかしいんだけど。

ユキに聞いたたらナギの息子だって言われて、明らかに子供なのがやって来た訳で。

やって来たと思ったら明らかな杖を背負ってて。

おまけにくしゃみで武装解除を暴発させて…私だったから無事にすんだけど。

しかもこれで魔法学校の首席？絶対にウソでしょ？

「ハア…」

思わずため息が出てしまった。

「どないしたん？」

「ちょっと寝不足っぽいわ。眠りが浅かったのかも。」

木乃香が聞いてきたけど適当にごまかす。

ウダウダ悩んでたらいつの間にかタカミチは居なくて、学園長室前。ノックをして、中に入る。ってか私と木乃香はここにいる意味無いわよね？

学園長に紙を渡し、何かを話すネギ。

ちらっと見回すと腕を組んで幽霊のように存在感の薄くなったユキ。思わずぎよっとしちゃったわ。

「なるほど…修行のために学校の先生を…そりゃまた大変な課題をもらったのう…」

いや、修行の内容自体がおかしいでしょ。そもそも木乃香がいるのにそんなこと言って言い訳？

まあ大方メガロのお膝元である麻帆良が監視にも『正義の魔法使い』にするにも好都合だからなんだろうけど。

修行ってたしか『立派な魔法使い』になるために必要なだけ？

『立派な魔法使い』 Ⅱ 『正義の魔法使い』とか考えてる限りネギに明るい未来は無いわね。いや、どんな魔法使いにも言えることかしら？

グダグダと考えていたら学園長の頭から血が流れていた。大方ネギを木乃香の婿に…とかいったんでしょ。

「あ、そうそうもうひとつ。アスナちゃん、木乃香。ネギ君を君等の部屋に泊めてくれんかの？」

は？なに言ってるのかしら？

「学園長」

「ふお!？」

いままで口を閉じていたユキがいきなり話した。木乃香とネギが驚くのはわかるけど…

「子供と言えど、一人の男性です。教師として行動する以上、生徒でもある女子と同じ部屋にするという発言は教育者としての人格を疑いますよ?。」

おお、流石ユキね。異性であること、教師と生徒の関係、そこから学園長の『人格を疑う』発言。

いや、やり過ぎなのか木乃香もネギもぼーんとしてるけど。

「しかし、寮の空気が…」

「無いと言わせるとでも考えてますか？きちんと確認させて頂きました。ありましたか？」

逃げ道を封鎖、と。

「じゃが、ネギ君はまだ子供じゃし…」

「なら高畑先生と同室はどうでしょう？彼はスプリングフィールド実習生と知り合いだと聞いております。」

「む：タカミチ君は出張で忙しいのは知っておるじやろう？」

ユキがミス？いや、これはわざとね。

「それならガトウ先生と同室はが良いでしょうね。彼は出張等はしていませんし、スプリングフィールド実習生も知り合いと聞いております。」

「ガトウさんもここにいるの！？」

ネギが大声を上げる。ガトウさんはタカミチの師匠だったわよね。とするとまだ出張してた時にタカミチと一緒にあったのかしら。

「ええ、ガトウ先生もいますよ。っと、私の紹介をしませんでしたね。私は泉野雪、あなたが英語の担当をする予定の2-Aの担任ですよ。」

「え、と、ネギ・スプリングフィールドです。よろしく願いします。」

「こちらこそ。」

すぐに学園長の方に向き直る。

「反論があるのならお聞きしますが？」

「む…無いわい。じゃあガトウ君と同室じゃの。二人は教室に戻って良いぞ。」

「わかったえ。」

「わかりました…失礼しました。」

木乃香と二人、教室に帰る。

S I D E o u t

S I D E ユキ

「はい。」

学園長を木っ端微塵にして、今は廊下を歩いています。私はネギに名簿を渡します。

「これは…クラス名簿ですか？」

「ええ。ネギ先生は副担補佐もすることになってますからね。出来るだけ早めに皆さんの名前を覚えて下さい。」

「はい！」

実はあの後、少し話してこの3月までに教師としての力量が認められるのならネギが担任になることになりました。これはまだネギは知らないんですが。

代わりに私の自由度を上げさせました。まあ色々ですよ。

「あの…」

「どうかしました？」

「泉野先生は明日菜さんと同じ苗字ですが、なにか関係あるんですか？」

「アスナは義理の娘ですよ。」

「！！ごめんなさい！」

すぐに謝ってきました。

「謝らなくていいですよ。気にしてないですし、知った人からは確実に聞かれることですから…ん、到着ですね。」

教師に到着、ネギは僕が行きます、といってドアを開ける。

まず黒板消しが降ってくる。それは障壁によって、わずかに浮く。がすぐに気がつきそれを頭に被る。

咳き込みながら歩き、紐を踏むのではなく引っ掛かる。前のめりになったところにバケツ襲来、もろに頭に直撃。

そのままゴロゴロと罌を受け続け、教卓に激突。ようやくストップ。

『ええええええ！？子どもおおお！？』

クラスの大半が驚いて駆け寄る。

あれこれ聞かれて困り果てた表情になるネギ。

「はいはい！その辺にして席に戻る！質問は朝倉さんがすること！」
そこからはネギが自己紹介、あとは原作通りに事が運びました。

放課後、ネギ先生歓迎会が行われることに。

タカミチとガトウがやって来て、後は呼びにいったアスナとネギ本人を待つだけです。

しばらく待つとドアが開き、ネギが入ってきました。

「ようこそ！ネギ先生！」

クラッカーが鳴り、すぐに歓迎会がスタート。

と、アスナがこっちにやって来ました。

「もう嫌になるわ…」

「どうしたの？」

「本屋ちゃん助けるために人目もはばからずに魔法使っし、朝迎えにいったときはくしゃみで武装解除を暴発させるし、そもそもあんなデカイ杖を背負ってるし…」

「諦めて下さい。」

「そうね…いちいち気にしてたら持たないわよね…」

「ああいうのはもう徹底無視が一番です。大方ナギの息子だからってちやほやされていたんでしようから。」

「だよね…ハア。」

アスナでこれだから、裕奈ちゃんは大丈夫でしょう。ただ千雨ちゃんもつと酷くなるかも、ですね…気を付けますか。

そのあとのはのかさんが図書券を渡したり、雪広さんが銅像を渡したり、なんやかんやの大騒ぎ。

そのうちにお開きになりました。これから忙しくなりそうです。

～期末テストとその裏で～

SIDEユキ

ネギがやって来てからしばらく経ち、期末テストがもうすぐ、というところ。

いやはや、千雨ちゃんなんかはとてつもないストレスがかかっているようです。そこは親身になって聞いてあげることですねとかしています。

あ、生徒にはネギが正式な教師になったら担任になるから、といって時々ホームルームをやらせてます。

その時は私は職員室で書類の整理とかしてるわけですが。

そうして過ごしていて、ある日の朝、いつものように朝礼を…と思ったら6人ほどこいません。

メンバーはバカレンジャー（アスナのかわりに刹那）十木乃香、つまり図書館島のやつですね…

今日学園長に呼ばれたのはこれが用件でしたし。

きちんと抗議…じゃなくて忠告はしておきましたよ？まあ故意に魔法に引き付けるのは構いませんが、そうやって魔法を知った場合、そいつらは私が守ることはしませんよ、死んだらアンタの責任になるからそのところよろしくお願いします、とね。

「えー：6人ほどいませんが、図書館島でスプリングフィールド実習生と勉強会をしているそうです。図書館島の司書から連絡が来ていますので安心して下さい。」

スッ、と手が上がりました。

「なんですか？雪広さん。」

「金曜日にネギ先生が最下位脱出をしないと大変なことになる、とおっしゃっていましたが内容をご存じでしょうか？」

「ええ。」

ただその内容は伝えるなって学園長に言われましたからね。

本来なら知ったことじゃ無いんですけど、ここは別な理由を立てておきますか。

「簡単に言うと私のクビが飛びます。いつまでも最下位だったことに学園長が腹を立ててますので：私を教師として麻帆良に残したいのであれば皆さんも勉強に励んで下さいね。」

ま、こう言っておけば大抵は勉強するでしょう。

その後は授業。皆普段より励んでいるのがわかるくらいの変わりっぷりでしたよ。

放課後、場所はエヴァの家。

私、エヴァ、アスナ、千雨、裕奈と茶々丸、チャチャゼロがいます。

「で、実際のところはどんなんだ？」

気だるげな顔で聞いてくるエヴァ。

「もちろんアレはウソ、ネギが正式に教師になるかどうかを見極めるためのものです。」

「ふーん：学園長のことだからどうせ最下位でも色々と手回しして正式な教員にしそうだけど。」

「たしかにな：もう嫌になるぜ。どうにかなんねえのか先生？」

「ならないですよ、残念ながら。」

「やっぱ『英雄の息子』って肩書きのせい？ あんな無茶苦茶やって文句いわれてないもん。」

「そうですね。将来有望と回りからもてはやされてきて、自分の非を責める人物が周りにいなかったらしいです。」

「うわ：それってマズくねえか？」

「不味いですよ。たんなる魔法使いがやったら犯罪になることを平

気でやるようになってます。しかもそれを間違っていないと思ってるからなおさらたちが悪いです。」

「もうちょつとまともな環境にいればああならなかったんだろうけどね。」

「自分が井の中の蛙であることに気づいてない、自信過剰な少年、かあ…ある意味かわいそうだね。」

「ま、このままいくと残念なことになるだけ、ってことか。周りがなんかしない限り。」

「なんとか、ねえ…『正義の魔法使い』がするわけないし…学園長とかならするかもね。」

「ん…？　そういうえばジジイにネギと戦ってくれて言われたな。」

「ネギ先生と戦う？　エヴァちゃんが？」

「ああ。すっかり忘れていたが。」

「でも戦う意味なんてあんのか？」

「アイツがどのくらい出来るのか興味はあるからな。ただそこに持つてく方法がイマイチ思い付かんかったから忘れていた。」

「こういうのはどうですか？」

そういつて原作の「桜通りの吸血鬼」が起こるように調節する。

手順としては

満月の夜、適当にボロローブなどで顔をかくして現れる。

時期を見て自分のクラスの生徒を襲い、それをネギに気付かせる。

とまあ大雑把に言えばこんなもの。期末テストできちんと結果が出ればネギは担任となり、あの責任感の高い性格なら成功するだろう、と伝えました。

アスナ、千雨、裕奈も実力は気になる、ということでもネギと戦うときは知らせることになりました。

一週間たって、期末テスト。結果2－Aは一位になり、ネギは正式な教員に、新学期から担任になることが決まりました。

その後記念パーティーが開かれましたが、千雨ちゃんも普通に出席したためネットアイドル発覚イベントは無しです。

ネットアイドル「ちう」自体はちゃんといいますよ？

さて、春休みは特に何も無いでしょうし、次は桜通りの吸血鬼、ですかね。

く期末テストとその裏でく（後書き）

短めです。

戦闘描写がないと長く書くのは難しいですね…

〈特訓と暗躍〉

SIDEユキ

「ウアレオー・オプティマー・エスト！」契約に従い、我に従え炎の霸王、来れ、浄化の炎、燃え盛る大剣、ほとばしれよ、ソドムを焼きし火と硫黄、罪ありし者を、死の塵に」！」

「モルス・ケルタ・ホーラ・インケルタ！」契約に従い、我に従え高殿の王、来れ、巨神を滅ぼす燃ゆる立つ雷霆、百重千重と重なりて、走れよ稲妻」！」

「咸卦法：神鳴流決戦奥義！」

よう、零崎雪織だ。

いきなり物騒な詠唱とかが色々聞こえるが：

「”燃える天空”！！」

「”千の雷”！！」

「真・雷光剣！！」

「”最強防護”」

一応言うが手合わせだ。これはな。

熱線からの爆炎、大量に走る稲妻、恐ろしく巨大な咸卦による雷が同時に襲いかかる。俺は防御呪文を利用してそれらを防ぐ。

まったく、爆炎のせいで視界が最悪だな。

直後、アスナが『ハマノツルギ』を思いっきり振ってきた。正直アレには障壁なんて無意味だ。

よって俺は右手にもつ刀で防ぐ。

「ちえっ…当たってくれないか…」

「そりゃそうだっ！」

「きゃ！」

力任せに振って、アスナを地面に叩きつける。

同時にやって来た大量の魔弾、裕奈だろうがまだまだ甘い。

左手にもつ鎌をふるい、それらを叩き落とす。

「あちゃ…こりゃ参ったね。」

「ま、危ない弾には当たりたく無いからな。」

そう言いながら一気に上昇、直後後ろから雷が飛んできた。上には重力場が展開されているが、強引に突っ切る。

「ちっ…」

舌打ちの音、千雨だろうが構ってる暇はない。いつの間にか復帰したアスナが斬空閃を乱れうちしてやがる。

刀と鎌で防ぎながら、呪文詠唱スタート。

「リラ・カ・マギカ・ラ・エレメンタ！」 おお地の底に眠る死者の
宮殿よ、我らの下に姿を現せ”！」

無詠唱でも打てるが、これは言わば枷。手加減の印だ。

「ウアレオー・オプティマー・エスト！」 来れ虚無の炎、振り払え
”！」

「モルス・ケルタ・ホーラ・インケルタ！」 来れ虚構の風、切り裂
け”！」

二人は詠唱、アスナは『ハマノツルギ』を構える。

「『冥府の石柱』」

「『炎の剣』！」

「『風の刃』！」

「無極而太極斬！」

俺は6本の石柱を呼び出し、それぞれの方向へ一本づつ放ち、残りの3本は落下させる。

裕奈は横風ぎに放った爆炎で石柱を破壊、千雨はアーティファクトも利用して二重展開、真空刃によって切断、アスナはまるまる消滅させる。残った3本はそのまま地面に落ちて倒れ、足場となる。

足場となった石柱の上で、裕奈は魔弾を、千雨は『雷の暴風』を、

アスナは『斬鉄閃』を放ってきた。

俺は足元に『斬岩剣』を放ち、岩を砕いて盾にして防ぐ。今度は高速詠唱を開始。

「リラ・カ・マガカ・ラ・エレメンタ” 来れ氷精、大気に満ちよ、
白夜の国の、凍土と氷河を”」

「『紅き炎』！」

「『白き雷』！」

「斬空閃！」

三人は気づいて攻撃してきたが、もう遅い。

「『こおる大地』！」

石柱に乗っていた三人のところまで一瞬で凍り付き、裕奈と千雨は下半身が凍る。アスナの場所は回りを凍らせ、実質下半身が凍ったのと同じ状態に。

本来なら氷柱を地面から生やし、それで攻撃する魔法だが、魔力そのものである『冥府の石柱』と組み合わせるとこんなことも出来る。

魔力の変質ってところか？『引き裂く大地』を使えば溶岩化するし、『石の槍』で貫くことも出来るぜ。

「そこまで、だな。」

離れた場所からやって来たエヴァが言う。とりあえず今日はここま
でかな。

今は春休み最終日、場所はエヴァの家。

もちろん戦っていた場所は魔法球だ。一倍魔法球はかなり頑丈な作りにしてるからな。心置き無くでかい魔法が打てる。

「連携はそれなり、おれも何度か危ないことがあったから結構上出来だ。」

「ホントに!?!」

「ああ。」

自分で使っておいて言うのもなんだが、あの組み合わせは酷いからな。

「ただ全員とももう少しアーティファクトを使え。折角機能が良いんだからもっと上手く使いこなせないと勿体ない。」

頼りきりになるのは良くないがな。

「うーん…結構使ってたと思うけどなー…」

「裕奈は攻撃重視のやつばかりだったろ。もっと特殊弾を使え。魔力封印とか避けざるを得ないんだからな。」

魔力封印弾は武器に当たった場合、それに込められた魔力も封印してしまう。そうになると弾くのも辛くなるし、体に当てれたなら気オンリーでの戦いに持ち込める。

「私はどうなんだ？」

「千雨はタイミングと種類だな。捕縛魔法二連発とかも結構辛いぜ？」

千雨は主に片方サポートもう片方攻撃、か二連続で攻撃魔法、とやはり攻撃重視。

一人で戦う分には良いが、攻撃役が他にもいるならひたすら拘束しようとするほうが良い。拘束魔法ってのは一番注意を向ける必要があるからな。

一度拘束されたらそこから二重、三重と拘束されてどんどん抜け出せなくされる可能性がある。

千雨なら戒めの風矢連発、当たったら麻痺させて風牢壁、とかな。

「アスナはあんまり言うこと無いぜ。ただ最後のは結界を使うべきだったな。」

「うーん…どうしても攻撃に方向が向くのよね…」

「その気持ちは分からんでも無い。が防御も大事ってことだ。」

攻撃は最大の防御、たしかにそうだろう。だが、基本的に攻撃より

も防御の方が素早く出来るんだからな。さつきみたいに攻撃が間に合わないことも多々ある。

「お前みたいな例外が言っても説得力ないぞ。」

「それを言うならエヴァもだろう。『闇の魔法』で『こおるせかい』を取り込んで防御の「ぼ」の字もしなかった癖に。」

「フン。私は不老不死だから良いんだよ。多少無茶をしても問題ないからな。」

「俺は普通の人間に教えてるんだよ…まあ良い。『桜通りの吸血鬼』はどうなってる？」

「寮でも良い感じに噂が広まってるわよ。そろそろ行動に移しても良いんじゃない？」

「ふむ…明日は新学期の始まり、身体測定もある…つまり休むと分かりやすい…長谷川、お前が今日被害者になれ。」

「私は今日の夜用事があるんだよ。やるんなら別な奴にしてくれねえか？」

「はいはい！じゃあ私が被害者になる！」

被害者ってのは朝に拾われてネギに発見される役をする奴。

「では明石、今日の深夜に桜通りに来てくれ。魔力を残す必要があるからな。」

「わかったよ」

「ってかこんなノリノリで良いのかしら…？」

「別に良いだろ。ただの茶番劇だし。」

「そう言えばネギ先生が気づいてから勝負に持っていくのは出来るのか？」

「それは夜に適当に襲えば良い。ネギのことだから一度気付いたら夜はひたすら犯人を探そうとするだろうからな。」

「なるほどね…ネギの責任感を利用するってことね。」

「そう言うことだ。」

その後は適当に駄弁って解散、さあて、明日からどうなるかな？

〈特訓と暗躍〉（後書き）

オリジナル魔法

『炎の剣』

詠唱…” 来れ虚無の炎、振り払え” 『炎の剣』

『雷の斧』と同じ系統の上位古代語魔法。

幅広い爆炎が前方に広がる魔法。射程距離が短いため近づく必要があるが、破壊力は『燃える天空』にも劣らないほど高い。

『風の刃』

詠唱…” 来れ虚構の風、切り裂け” 『風の刃』

『雷の斧』と同じ系統の上位古代語魔法。

横1m程の真空刃を数発飛ばす魔法。通過した場所は余波で強風が吹くおまけ付き。

直線的な動きで避けられやすく、相殺もされやすいが切れ味は鋭く、射程距離も長い。

〈桜通りの吸血鬼、始まり〉

SIDEユキ

『3年A組！ネギせんせー！雪せんせー！』

元気の良い声で挨拶が飛んできました。何人かはあきれた顔をしてますが。

とまあ始まった新学期、ホームルームをそれなりの手つきですませ身体測定にとりかかる必要があるのですが。

「それでは身体測定がありますので、皆さん服を脱いでください！」

「バカタレ」

思わず口に出してしまいました。首を掴んで歩いて廊下に出ます。あわわわとか言ってますが知りません。

「良いですか？いくら10歳だといってもあなたは教師で男性です。セクハラで訴えられますよ？」

ハッ、と気づいた顔になりました。

「ご、ごめんなさい…」

「まあ次からは気を付けて下さい。」

「大変やー！ゆーながー！」

一通りしかりつけたところで大声を上げつつ和泉さんが走ってきました。

その声を聞いた3-Aの一部は着替え中の下着姿にもかかわらず飛び出してきました。

「落ち着いて、明石さんがどうかしたの？」

「あ、はい…身体測定の準備のために保健室に行ったんやけど、ゆーなが寝とって…先生に聞いたら昨日桜通りで寝とったのを運ばれたらしいんや。」

「ふうむ…ネギ先生、先に行って明石さんの様子を見てきてもらえますか？私はクラスを落ち着けてから向かいますので…」

「わ、分かりました！」

ネギは和泉さんに案内されながら保健室に。心なしか焦ってみえました。心配なんでしょうね…実際にはただの茶番なんです。

「すみませんね、遅れました。」

保健室に入り、明石さんの寝ているベッドに。

軽く確認すると魔法で色々と仕組んだ見たいですね。

首もとに噛まれたような後、かなり上手く作ってますね…顔色も若

干悪いですが、これも魔法。というか上手すぎでしょう。それらの魔力の残り香を全て首もとに集中させてます。

はつきり行って魔法使いなら誰でも気づけるレベルです。ネギは考えこんでます。「誰がこんなことを…」とか思ってるんでしょう。

「うーん：貧血で倒れたみたいです。しっかり休んで鉄分の多い食べ物を摂れば問題ないでしょう：ネギ先生？」

「あ、はい。そうですね。」

それからネギは教室に戻りました。私は擁護担当の先生に伝え、残ります。

放課後、カタカタとパソコンで書類の整理。授業の進度も考える必要がありますからね。

「う、うーん：」

「起きた？」

「んにゃ：？雪せんせー？」

「はい、その通りです。」

「ふぁ…よく寝たわ…上手くいった？」

「ええ。考え込んでいましたが、すぐにでも行動に移すでしょう。」

「ふーん…としたら今日が一回戦？」

「そうでしょうね。夜に寮の屋上に来てくださいね。」

月と星が浮かび、舞い散る桜を幻想的に彩る、そんな夜。

黒いローブ…今まで説明はなかったが実は少しボロい感じなんだが…それを羽織って屋上に佇む俺、殺人鬼。

こんなこと言うとか酔ってるのかね、俺は。酒は飲んでないんだが。

後ろに魔力反応、振り向けば千雨が影のゲートでやって来た。

「この感覚にはなれねえな…雪織さんか。」

「でも場所さえ把握出来ればどこにでも行けるからな。便利なものだぜ？」

「まあたしかにそうではあるんだが。」

ゲートが普通の転移魔法と異なるのはその距離と特徴だ。基本的に距離は伸びて、なんらかの特徴を持つ。

影のゲート：闇のゲートでもあるんだが。こいつは影に潜り込むことが出来る。影から手だけ出すとかホラーなこと：もとい、不意打ちも出来るな。代わりに影のあるところからしか出れないが。

と、再び魔力反応。眩い光が突如現れ、収まったところにいるのは裕奈。光のゲートだ。

「とうちゃーく！」

光のゲートは転移時に眩い光を放つため、目眩ましが出来る。ゆえに奇襲をかける時なんか便利だ。転移出来る距離が最も長いのも特徴の1つだな。

エヴァクラスの魔法使いが使える鹿兒島〜北海道レベルの転移が出来る。長距離転移符とか目じゃないぜ。そんな転移する意味も無いんだがな。

「まあ、火のゲートで来ても良かったんだけど。」

「いや、結構危ねえからな？ ついでに使う意味ねえし。」

「冗談だよ、冗談。」

火のゲートは転移先に火柱を発生させる事が出来る。転移は炎を介して行うから、捕まれた時とかに発動すると相手を火傷させることも出来る攻撃的な転移だ。代わりに距離は短くて普通の転移とあまり変わらない。

まあ風とか雷のゲートとか色々説明したいが、キリがないからこの辺で止めておくか。

「ゲートの練習にはなっただろ：つと、そろそろ始まるぜ。」

三角帽子をかぶったエヴァが現れ、のんきに歩く宮崎に襲いかかる。

そこにネギ登場、『戒めの風矢』を放つ。が、エヴァの投げた魔法薬により発動した『氷楯』が全て跳ね返す。

三角帽子が飛び、エヴァの顔をみて驚くネギ。そして言い合いに。

「言い合ってる暇があるならなんかすりゃ良いのにな。」

「一応生徒だからな。攻撃はしたくないんだろ。」

言い争いをエヴァはうちきり、魔法薬を投げ、『氷結・武装解除』を放つ。ネギは宮崎を抱えたまま腕を突き出してレジスト、ネギは無事だったが宮崎は裸になってしまう。

騒ぎを聞き付けた木乃香とアスナが登場、もちろんアスナは事情を知ってるのだが。

ネギの腕の中で裸のまま眠る宮崎をみて、木乃香はネギを吸血鬼と

勘違い、ネギは必死に木乃香とアスナに説得を試みる。

「うーん…一応敵がいるんだから背を向けちゃダメだよね…」

「まあまともに戦闘訓練やってないってことだな。」

シリアスが崩壊した混乱に乗じてエヴァは逃走、それを見たネギは二人に宮崎を預けて追いかける。

ちなみに俺たちは浮遊術とかを利用して傍観出来る位置に適宜移動してるぜ。

地面を走り追いかけるネギ、追い付かれたエヴァはマントを使って飛び出す。それを見たネギは驚いて距離を離されるが、杖にまたがり一気に距離を詰めていく。

「おお…はいね…」

「だてに風魔法使ってる訳じゃないってな。お、精霊召喚か。」

若干驚いた様子のエヴァ、すぐに魔法薬で撃墜するが落ちたのは半分ほど。

それを見たネギは呪文を唱え、『風花・武装解除』を発動、避けきれずくらった（どうみてもわざとだが）エヴァはマントを失い落下するが、事も無げに屋上に着地。

追い詰めた、と勘違いしているネギは調子に乗っている。（ちなみにエヴァは指に魔法発動体の指輪をはめている）

「うわゝ…」

「ダメダメだな。」

エヴァは呪文を唱えるように言い、ネギは首を傾げつつも唱えようとする。が、そこに現れた茶々丸がデコピンで阻止。

「ってかデコピンくらいで止めるなよ…」

「うーん…子供だし仕方ないと言えばそうなのかな？」

この二人は鍛えてるから片腕が吹っ飛んだ位で呪文詠唱を止めるようなことは無いようにしている。やりすぎ？知らねえな。

その後もなんども唱えようとするが良いように遊ばれるネギ。ネギはパートナーの重要性を知ったとき。

エヴァは飽きたところで血を吸おうとネギによる。

が、そこに（予定通り）アスナ乱入。蹴りを入れようとするが足を捕まれ上に放り投げられる。

なんとか着地（実際は余裕）したアスナを見て、興が冷めたとエヴァは言って飛び降りる。

その後は泣きじゃくるネギをあやすアスナの姿があったとき。

く桜通りの吸血鬼、始まり(裏)く(前書き)

指摘をいただいたので、ネギ側の動向を。

ネギの台詞が全くないのもどうかと思ひまして…

く桜通りの吸血鬼、始まり(裏)く

桜通り。

吸血鬼の噂が流れ、さらにはネギが注意をしたにも関わらず、それでも通る人はいるものである。

「こわくない…こわくないですよ…」

とかなんとか言いながら歩いているのは宮崎のどか。むしろ何故こんな夜に外出しているんだ、という話です。

「27番、宮崎のどか。」

「え？」

上の方から聞こえる声。街灯にのったエヴァがかけた声ですが、ローブと三角帽子を身に付けているために、のどかはそれが誰かを把握できていません。

「悪いが、その血を吸わせてもらおうよ。」

「ひっ…！キヤアアアア！」

言葉と同時に飛び掛かったエヴァ、思わず悲鳴を上げて、のどかは気絶してしまいます。

「待てーっ！僕の生徒になにするんですかー！」

悲鳴を聞き付けたのか、杖を構えて飛び出してきたネギ。

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル！」風の精霊11人、鎖縛となりて敵を捕らえよ”！『魔法の射手、戒めの風矢』！」

ためらうことなく詠唱し、勢いよく飛んでいく風の矢。

「来たか…『氷楯』」

しかしエヴァは魔法薬の入ったフラスコを投げて、魔法で跳ね返します。

「僕の呪文を跳ね返した！？」

跳ね返った矢は地面に激突、土煙が上がります。

「ほお…なかなかの魔力じゃないか。10歳とは思えないな。さすがに奴の息子というだけある。」

そんなことを言うエヴァ、たった今魔法を跳ね返したばかりですけどね。

「誰ですか、あなたは！僕と同じ魔法使いなのに…どうしてこんなことを！」

敵意をむき出しにして、叫ぶネギ。強風が吹き、煙とエヴァのかぶる三角帽子が吹き飛びました。

ようやく見えた顔を見て、ネギは驚きます。

「な…あなたはうちのクラスのエヴァンジェリンさん！？それに奴の息子って…」

「新学期に入ったことだ、あらためて歓迎の挨拶といこうかネギ先生。先ほどの質問の答えだが、世の中にはいい魔法使いと悪い魔法使いがいるってことだよ。」

とかなんとか言うエヴァですが、あまり回答になってないですよ？それだと理由なしに襲ったことになりますからね？

「『氷結・武装解除』」

そして魔法薬を投げて、ネギに向かって魔法を発動。

「うわっ！」

とっさにネギは手を突き出し、レジストします。ただそれだとネギは防げてものどかは防げません。障壁を展開するべきですよ。

パリン、と音を立てて、のどかの服は碎け散ります。

「宮崎さん、大丈夫です…わっ!？」

状態を確認しようとして、ネギはのどかの方を見ます。が、そこには裸となったのどかの姿が。武装解除をうけたんだから当然ですね。

「はっ…え…わわ…」

混乱してまともに喋れないネギ。実践なら隙だらけでアウトです。

「何や今の音!？」

「ネギ、何がってアンタ！」

「えう!?! いや! これは…その…」

言葉につまるネギ。まあどこからどうみても犯罪者ですしね。

「ネ、ネギ君が吸血鬼やったんか!？」

「っていうか、何してんの！」

「ち、違います! 誤解です！」

シリアスが粉々になってしまいました。これも実践なら隙だらけ、アウトです。

「フフフ…」

「ま、待てっ！」

怪しい声で笑いながら、エヴァは立ち去ります。

「アスナさん! 木乃香さん! 宮崎さんをお願いします! 僕は犯人を追いかけますので！」

「え!?! ネギ君って早！」

エヴァを追いかけるために魔法を使っただッシュ、10歳の子供のスピードではありません。

「世のため人のために働くのが魔法使いの仕事…いい魔法使いと悪い魔法使いがいるなんてウソだ…！」

ブツブツと自分の理論を展開しつつ、猛スピードで追いかけるネギ。

「いたっ！待ちなさーい！」

「早い…そういえばぼーやは風の魔法を得意としていたな…」

追いつかれたエヴァは地を蹴り、マントを広げ空に浮きます。

「杖も箒もなしに空を…！」

驚くネギ。ですが一流の魔法使いは普通浮遊術が使えます。箒や杖は邪魔な場合も多いのです。

それはともかく、ネギは杖にまたがって空を飛びます。

「待ちなさーい！どうしてこんなことをするんですか！先生としても許しませんよ！」

「くくっ…奴の事が知りたいんだろう？私を捕まえたら話してやるよ。」

「本当ですね？」

口の端をつり上げることでエヴァはそれに答える。それをみたネギは行動に移る。

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル！」風精召喚、剣を狩る戦友”！」

「分身？いや、『精霊召喚』か。」

”捕まえて”！」

『精霊召喚』を使い、自分の分身を作り上げ、それによって捕まえようとするネギ。

エヴァは魔法薬を投げて、半数ほどの分身を消してしまいます。

「（やっぱり、この人は魔力が全然弱い！勝てる！）」

勘違いも甚だしいってところですね。魔法薬を使った無詠唱の『氷楯』で跳ね返されたのをもう忘れたんでしょうか？

魔力がない＝弱いと勘違いしている限り、馬鹿としか言えません。

そうこうしている内に、最後の一体が撃ち落とされました。が、ネギは魔法を発動します。

「これで終わりです！『風花・武装解除』！」

見事に命中しました。マントを失ったエヴァはそのまま落下しますが、屋上に着地します。

実際には指輪の魔法発動体があるので飛べるんですけどね。

「やるじゃないか先生。」

「これで僕の勝ちですね、約束通り話してもらいますよ。何でこんなことをしたのかも、父さんの事も。」

「お前の父、サウザウンドマスターの事か…フフ…」

何故知っているのか、といった顔つきになるネギ。自分の父がいかに有名なのかさえ知らないようです。

「とにかく！魔力もマントも、触媒もないあなたに勝ち目はないですよ！」

「これで勝ったつもりなのか？」

呆れ顔になるエヴァ。魔力は隠しているだけだし、触媒も指輪がありますからね。

直後、屋根から茶々丸が降りてくる。当然ネギは警戒するが、誰かは分かっている。

「さあ、お前の得意な呪文を唱えてみるがいい。」

そう言われ、ネギは詠唱を始めるが、途中でデコピンをうけて中断してしまう。

「アタタ…え！？うちのクラスの茶々丸さん！？」

「紹介しよう、私のパートナー、出席番号10番、”魔法使いの従者” 絡繰茶々丸だ。」

「え、ええ〜っ!? 茶々丸さんがパートナー!?」

紹介された茶々丸はお辞儀をする。

「そうだ、パートナーのいない貴様では私に勝てんぞ。」

「なっ! パートナーくらい居なくたって!」

そういつて詠唱をするが、やはり茶々丸に妨害されてしまう。

「今や恋人探しの口実となっているが、元々”魔法使いの従者”は戦いの為の道具。私たち魔法使いの詠唱時間を稼ぐための剣であり楯だ。分かりやすく言えば護衛だな。つまり、パートナーのいないお前では万に一つも勝つ見込みはない。」

「そんな!?!」

まあそもそのスペックが違う以上、勝つ見込みはないんですが。

「茶々丸。」

「はい。すみませんネギ先生、マスターの命令ですので。」

「うわっ!?!」

茶々丸に拘束されるネギ。抜け出そうとするが、平然とそれを止める茶々丸。

「情けないな。サウザウンドマスターならこの程度、笑って抜け出すのがな。」

「ど、どうして父さんの事を…」

「15年前に色々あって、奴に呪いをかけられたのだよ。おかげで15年間、魔力も封じられてずっと学生生活だ。」

いまでは全て解けているのですがね。

そしてネギに近より、血を吸おうとする。

「こら——！この変質者ども——！」

「むっ！」

「え！？きゃあ！」

その瞬間、アスナが飛び蹴りを仕掛けてくる。エヴァはとっさに足をつかみ、真上に放り投げる。

「と、と…あれ！？エヴァちゃん！？」

なんなく着地したアスナはエヴァをみて驚く（演技）。

「ふん…興が冷めた…行くぞ、茶々丸。」

「はい。」

そういつて屋上から二人は飛び降りる。

その後はネギは恐ろしさから泣き出してしまい、アスナにあやされ

たとえ。

「襲撃?と幽霊少女」

SIDEユキ

ネギとエヴァの第一回戦が終わって3日、今私は茶々丸さんの様子を見ています。

これまでに起こったことですか？

二日前、ネギが「10歳がパートナーなんて嫌ですよね…」と発言。ホームルームの時に言ったものですから大騒ぎになりました。とりあえず、適当にたしなめて起きました。

昨日、ネギと宮崎さんが仮契約をしようとしたそうです。これはアスナが阻止したようです。なぜ「そうです」とか「ようです」とか言った語尾なのかと言うと、私が直接見たわけではないからです。

近くにオコジョ、ネギが「カモくん」と呼んでいたらしいので「アルベール・カモミール」で間違いないでしょう。これは今日私も存在は確認しました。

学校にペットを持ち込んでいるのには問題ありなのですが、スルーしておきました。面倒ですし。

ちなみに職員寮はペット可なのでその点については問題なしです。まあ、どうせ許可がなくても学園長がOK出すんでしょうけど。

あ、そう言えば相坂さんが見えました。今まで見えてなかったのが突然見えるようになったんです。…何故でしょう？

茶々丸さんの様子を見終わったら話してみますかね…いや、あんまり目立っても困るし夜にしましょうか。

それにしても茶々丸さん好人ですね…人助けに猫助け。っていうかもろにブースター使って飛んでましたね…魔法じゃなくて科学だから一応大丈夫かな…？

助けた猫を抱えて路地裏へ。それを見たネギはなんかやってますね。あれは…遅延呪文ですか。

ま、そろそろですね…集音魔法開始。

「こんにちは、ネギ先生。ここで出会うとは油断していましたが、お相手します。」

「あの、茶々丸さん、僕を狙うのをやめてもらえませんか？」

頭のゼンマイ…ネジ？どっちだっけ…を外しつつ話す茶々丸さんに、ネギはお願いする。

「残念ですが、マスターの命令は絶対です。」

「うう…仕方ないです！カモくん！」

「まかせろアニキ！オコジョフラッシュ！」

マグネシウムを燃やして、発光させるカモ。少しの間カメラ機能を潰すつもりですか…実際効果はあったようで、茶々丸さんはふらつきます。

「『魔法の射手、光の11矢』!」

ふらつきが収まったものの、迫り来る光の矢は避けきれない、そう感じたのか茶々丸さんは目を瞑りました。

「マスター…私がいなくなったら、この子達に餌をお願いします…」

それを見たネギは何かを感じたのか操作を開始。

「くっ…! 曲がれ、曲がれ!…うわっ!？」

曲がった矢はネギの足元付近に着弾、ネギは爆風で転がって壁に当たって気絶してしまいました。

「ネギ先生…」

それを見た茶々丸さんはどこか呆然とした表情になりました。

ふむ…襲撃はこの辺で終わりでしょうね。結果はネギの自爆…まあ悪くないでしょう。

私は集音魔法を切って、スキマに潜りました。

夜、コンビニ前、相坂さんはそこにいました。

「相坂さん、相坂さよさん。」

「え…？ いやいや、まさかたまたまですよ。私の姿が見えてるわけ無いですし…」

うわ…かなり卑屈になってますね…

「そこにいるじゃないですか。私ですよ。副担の泉野雪ですよ。」

「え…本当に、見えてるんですか？」

「ええ、もちろん。」

あら、不味い。泣き出しそうですね…やむを得ません。

「認識阻害…境界操作…転移！」

「え！？」

多少強引ですが、こうさせてもらいます。飛ぶ場所は私の持つ特別製魔法球です。

境界操作でとりあえず地縛霊から浮遊霊にしました。これで存在が保たれます。

「よっと…」

「あれ、ここは…?」

「まあ色々と説明する必要があるのですが。とりあえず聞きたい事があります。」

「はあ…」

「相坂さん、あなたはもう一度、生きたいですか?」

「…へ?」

そこからはひたすら説明。

私の持つ力（境界を操る程度の能力）を使えば、実体化させることは容易いですから。

結果、相坂さんは自分の意思で実体化、霊体化することが出来るようになった。

もっとも、実体化して体がうまく動くようになるまで半年ほどかかりましたが…

魔法について聞いてみると意外なことに「存在は知っている」との答えが返ってきました。

原作でどうだったかは忘れましたが、まあ60年も麻帆良に言えば当然といえばそうでしょうね。

で、魔法使いになるのかどうか聞いてみると「なる」とのこと。

4年半程修行しましたよ。

驚いたのは属性適性で、全てにありました。幽霊だからなのか、60年も麻帆良という霊地にいたからなのか、精霊に好かれやすいようです。

魔力？木乃香の倍くらいになりましたよ。いや、何もしてないのに、ですよ？魔法球の中には魔力が多いのですが：幽霊だからなのかそれらを少しずつ吸収していったようで：

体術はからっきしダメで、まあ霊体化すれば肉弾戦は食らわないのもあるので「完全な」魔法使いタイプになりました。

始動キーはずっと『プラクテ・ビギ・ナル』のままですが、どうなんでしょうね：別に構わないですけど。

明日は学園長に戸籍用意させて、エヴァ達と顔合わせですかね。

「襲撃?と幽霊少女」(後書き)

急展開ですみません…

さよのことは私もすっかり忘れてました(汗)
どうかしようと考えていたのに…何故だ。

く吸血鬼騒動中の平穏なある日く（前書き）

タイトルが最近思い付かない…

『吸血鬼騒動中の平穏なある日』

SIDEユキ

よう、零崎雪織だ。雪はなんか考えたいことがあるらしく閉じ籠ってる。魔法でも作るんかね？

実は俺と雪は考えてることが伝わらないようにすることが出来る。たまにはプライベートな時間がほしいってこともあるからな。

さて、それはともかくとして。学園長にさよの戸籍用意しろつつたらすぐに通ったぜ。

なんか涙ぐんでいたが…アレの初恋の人とかそんなんかね？

ちなみに女子寮に空きがあったからそこにねじ込むことになったぜ。

他の一般人には転校生ってことで通す方針だ。それでネギに話そうかと思ったんだがない。そういうや山籠りだっけか。

たしかこのイベントで楓に魔法使いつてことがバレるんだよな…秘匿はどうしたって感じだがいまさらだな。

んで今は…

「どこに向かってるんですか？」

「エヴァンジェリンの所だ。仲間には会っておきたいだろ？」

昨日連絡いれてエヴァの所に集まるようにいっておいたからな。千雨・アスナは問題ないとして裕奈が微妙なラインだったが：特に予定も無いらしくOKだったぜ。

と、見えてきたな。

「霊体化して憑いてくれ。」

「はい」

言葉通り、俺に憑くさよ。中にはユキがいるから話し相手には欠けないんだよな。さよも始めは驚いてたがもう慣れたみたいだし。

カランカラン、とベルを鳴らす。すぐに茶々丸が出てきた。

「皆さんお待ちです。どうぞ入ってください。」

言われて中にはいる。と、すぐにエヴァが突っかって来た。

「私を待たせるとはいい度胸じゃないか。え？」

「なんでお前がそんなのかは知らねえが。そもそも時間も指定してた筈だぜ？」

ちゃんと時間は指定、その十分前。

「マスターは昨日の晩から楽しみにしていたようで、落ち着きがありませんでした。」

「んなっ…余計な事は言わんでいいわ！」

「そうかい。説明ありがとうな茶々丸。」

やっぱ結構子供だよな、エヴァって。

「それにしても何があるの？」

「ああ。出てきてくれ。」

『？』

「はい。」

言葉の意味が分からなかったのか、首を傾げる5人。それからおれから出てくるさよ。

「ああ…そいつか。憑かせてたのか？」

「はい〜そうです〜でも4人は見えてないようですね〜…」

「なにかいるの？雪織さん。」

「私たちにはさっぱりわかんないぜ。」

「ってかエヴァちゃんはなんで納得した顔してるの？」

さよが見えないってことは声が聞こえないってことだからな。

「ん〜これでどうですか？」

『!?!?』

お：驚いてるな。まあ見た目はいきなり人が出てきたようなものだからな。

「見えるし聞こえるみたいだな。」

「うん、聞こえるわよ…って誰!?!?」

まっさきに聞いてきたのはアスナ。

「コイツはうちのクラスの出席番号1番、相坂さよだ。そうだろ?」

「ああ。幽霊だったのを実体化出来るようにしたからな。」

「幽霊…?」

「座らずの席、だったか?それだよ。」

「なんか聞いたことあるな。その席の近くで騒霊現象…ポルターガイストが起こることも。」

「そ。その正体はこの相坂さよだった、って訳だ。」

「へえ、制服来てるけど、もしかして通うの?」

「あ、はい。そうです。」

「じゃあ自己紹介しないとね。泉野明日菜よ。アスナって呼んでちようだい。」

「私は明石裕奈だよーゆーなって呼んでねー」

「私は長谷川千雨だ。呼び方は何でもいい。よろしくな。」

「絡繰茶々丸です。よろしくお願いします。」

「これは必要なのか…？ まあいい。エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルだ。」

「相坂さよですーよろしくお願いしますー」

自己紹介タイム終了。

「んで、魔法使いにしたぜ。なんか適性が全属性にあったからな。」

「ウソ！」

「マジかよ…」

「ふむ…幽霊だからか？」

裕奈と千雨はショックを若干うけたようだ。一方、エヴァは興味があると言わんばかりの表情。

「よく分からん。麻帆良に長いこと居て精霊に近くなってるのかもしれない。魔法球の中にいるときも回りの魔力を集めてみたいだな…」

「む…あり得ない話では無いな。60年近くも霊地に居て成仏して

ないんだ。霊核も高いかもな。」

「陰陽師の前鬼・後鬼につてか？冗談。」

「まさか。一人の人間として生きるんならそんなことはならないだろうな。そもそもお前が手を打ってるだろう？」

「ああ。幽霊だが成仏はしないようにしてるからな。あくまで『特殊な人間』つてレベルだ。」

俺は陰陽術も使えるからな。まあ前鬼・後鬼なんて要らないからそもそも提案すらしなかったが。ただあんまり使ってないな…神鳴流と合わせてみるか？

その後はのんびりと過ごしたぜ。まあ軽く模擬戦とかやりたいっていうから1倍魔法球の中で見たりしたかな。

さて、と…エヴァとネギが戦うまでやること無いな…暇だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5019y/>

とある私の物語～ネギまに転生ですか？～

2011年12月20日22時46分発行